

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 220

中撫川遺跡 3

一般県道吉備津松島線道路改築に伴う発掘調査Ⅲ

2 0 0 9

岡山県教育委員会



1 5区中世遺構完掘後全景（東から）



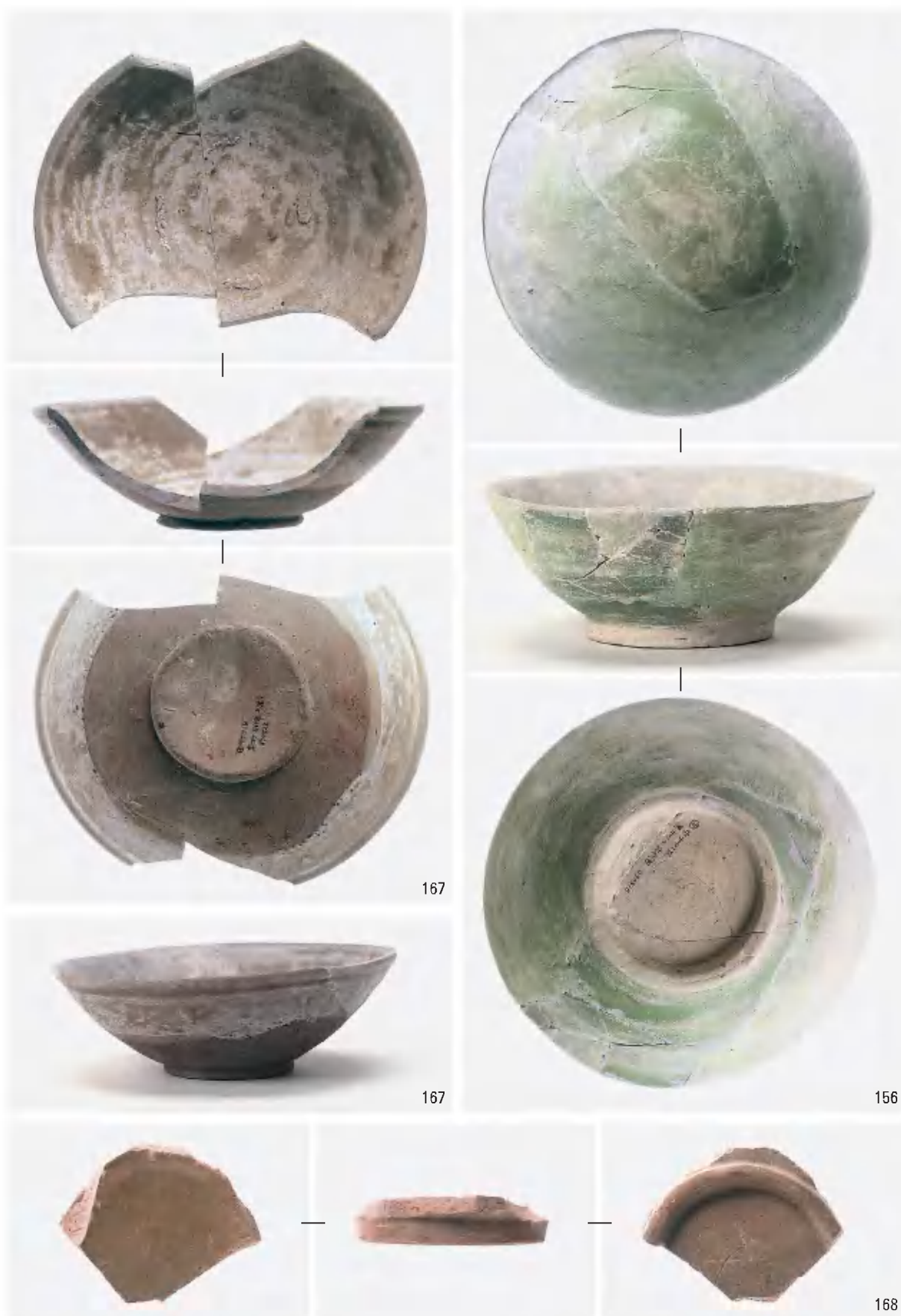
2 3区北壁土層断面（南西から）



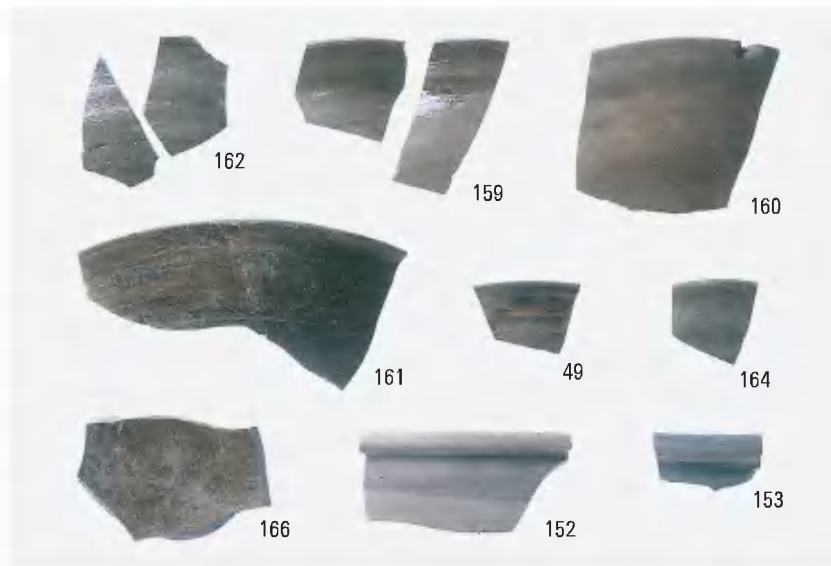
3 4区北壁土層断面（南東から）



4 5区北壁土層断面（南西から）



1 1・2区古代包含層上層出土越州窯系青磁碗（167・168）・京都産緑釉陶器碗（156）



1 1・2区出土京都府篠窯産緑釉陶器・須恵器片

2 1～4区出土緑釉陶器片

序

足守川流域は、岡山県南部にあっても、最も遺跡の密集している地域の一つとして広く知られています。弥生時代最大級の墳丘墓の一つである楯築弥生墳丘墓や全国第4位の規模を誇る造山古墳、さらには、中国新・後漢時代の貨幣である「貨泉」の多量出土や銅鐸埋納壙の検出で著名な高塚遺跡など、数々の重要な遺跡が点在し、まさに吉備の中枢部と呼ぶにふさわしい歴史的景観をそなえています。

本書で報告します中撫川遺跡は、隣接する川入遺跡と一体になった大規模な遺跡で、古代には足守川の河口付近に位置していたと考えられています。山陽新幹線の建設に伴う発掘調査を契機とし、その後、新幹線に沿って北側に設けられた都市計画道路の新設、さらには新幹線南側での市道の建設工事が続き、それぞれ発掘調査が実施されてきました。当初は、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡として注目されていましたが、その後の調査で、奈良時代から平安時代にかけての寺院跡や掘立柱建物群の存在が明らかとなり、古代においても重要な遺跡であることが認識されるようになってきました。とりわけ、奈良県の飛鳥地域に送られた岡山県最古の軒丸瓦の出土や京都府で作られた緑釉陶器の大量出土など、当時の都との直接的な物流を物語る資料は、吉備津という現在の地名ともあいまって、公営の港湾施設の存在を暗示するようです。

今回の発掘調査では中国の越州窯系青磁碗が完形に近い形で出土し、きわめて注目されます。今回の出土品は質からすれば二級品とのことで、中央の貴族の持ち物としてはふさわしくなく、都に送れずに、直接の輸入元である大宰府を中心とする北九州地方で多く出土するようです。そのような品が中撫川遺跡から出土したことは、この地が瀬戸内海航路の拠点として九州地方とも強く結びついていたことをかえって強く示唆しています。ささやかな報告書ではありますが、本書が文化財の保護・保存に活用され、さらなる歴史の解明にいささかでも貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、旧地権者の方々をはじめ、作業に御尽力いただきました地元の方々にも厚くお礼を申し上げます。また、円滑な調査の実施について多くの御協力を賜りました、岡山県備前県民局の関係各位にも深く感謝申し上げます。

平成21年3月

岡山県古代吉備文化財センター
所長 藤川 洋二

例 言

- 1 本書は、一般県道吉備津松島線道路改築事業に伴い、岡山県教育委員会が岡山県備前県民局建設部の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施した中撫川遺跡なかなつかわの発掘調査報告書である。同事業に伴う発掘調査報告書はすでに2冊（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』182・『同』202）が刊行されており、本書はその第3冊目にあたる。
- 2 発掘調査地は岡山市中撫川（字法万寺）439-1ほかに所在する。
- 3 発掘調査は平成19年4月1日から同年11月30日まで実施し、岡山県古代吉備文化財センター職員岡本寛久・氏平昭則・田中政之が担当した。発掘調査面積は2,543㎡である。
- 4 本書の作成作業は平成19年度と同20年度に実施した。平成19年度は平成19年12月1日から平成20年3月31日まで実施し、氏平が担当した。平成20年度は平成20年7月1日から平成21年3月31日まで実施し、岡本が担当した。
- 5 本書の執筆には岡本と氏平があたり、文末に文責を明記している。ただ、第3章の各遺構の説明については、おもに遺構の構造などを氏平が、出土遺物は岡本が執筆した。全体の編集は岡本が行った。
- 6 発掘調査で出土した緑釉陶器については、大阪大学高橋照彦氏に鑑定を依頼し、産地や年代について有益な御教示をいただいた。厚く感謝申し上げます。
- 7 同じく調査中に出土した越州窯系青磁については、最初に高槻市立埋蔵文化財調査センター橋本久和氏から御指摘をうけ、その後、福岡市立鴻臚館跡展示館および、九州歴史資料館において同種品を実見するとともに、同館の職員諸氏から御意見を伺った。とくに福岡市教育委員会文化財部大庭泰時氏ならびに、九州歴史資料館加藤和歳氏からはいろいろと御指導をいただいた。諸氏に対し、厚く感謝申し上げます。
- 8 出土した木製品の樹種同定は環境考古研究会に依頼し、結果を報文中に記している。
- 9 遺物写真については、江尻泰幸氏の協力と援助を得た。
- 10 本書に関連する出土遺物および図面・写真・マイクロフィルム等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

凡 例

- 1 本書に用いた高度値は海拔高である。方位は真北を示し、日本測地系に準拠した平面直角座標第V系の座標北である。報告書抄録にある遺跡位置の経緯度の座標値は日本測地系に準拠している。
- 2 遺構・遺物の縮尺は図下に明示しているが、種別でほぼ統一している。
遺構 調査区主要遺構平面図：1／250 調査区土層断面図：1／100 大規模溝断面図：1／60
遺物 杭：1／6 土器・木製品・石鍋：1／4 金属製品・土製品・砥石・石硯：1／3
縄文時代～弥生時代石器・基石・錢貨：1／2
- 3 調査区の名称は調査時のものを使用し、1区から6区としたが、既刊の一般県道吉備津松島線道路改築に伴う発掘調査Ⅰ・Ⅱ（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』182・『同』202）と重複するため注意されたい。
- 4 遺物番号については、土器は数字のみを記し、土器以外については、番号の前に素材を示す意味で、次の略号を付した。 木製品：W 金属製品：M 土製品：C 石製品：S
- 5 掲載した土器実測図の内、中軸線の両側に白抜きのあるものは、小破片のため径が不確実なものである。
- 6 木製品の実測図でトーンをかけた部分は、墨による筆跡、あるいは塗りつぶし部分である。
- 7 土層断面図に記載した土色は『新版標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）によっている。
- 8 第2図は国土地理院発行の1/25,000地形図「倉敷」「総社東部」を複製・加筆したものである。
- 9 本書に用いた時代区分は一般的な政治史区分に準拠し、必要な場合には世紀などを併用する。おおむね、古代とは7世紀後半から平安時代まで、中世とは鎌倉時代から室町時代まで、近世とは安土・桃山時代から江戸時代までを考えている。

本文目次

序	
例言	
凡例	
目次	
第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 調査の経緯	5
第1節 発掘調査の契機と経過	5
第2節 報告書作成の経過	7
第3節 発掘調査および報告書作成の体制	8
第3章 発掘調査の概要	9
第1節 調査区の概要	9
1 1・2区の概要	9
2 3区の概要	11
3 4・5区の概要	13
4 6区の概要	13
第2節 古墳時代以前の遺構・遺物	14
1 概要	14
2 縄文・弥生時代	14
3 古墳時代	16
第3節 古代の遺構・遺物	18
1 概要	18
2 各遺構	18
3 包含層遺物	23
第4節 中世・近世の遺構・遺物	28
1 概要	28
2 中世	28
3 近世	35
4 包含層遺物	36
第5節 小結	38
1 越州窯系青磁について	38
2 古代の中撫川・川入遺跡について	41
報告書抄録	50

目 次

<p>第1図 遺跡の位置（黒丸印）…………… 1</p> <p>第2図 調査遺跡周辺の主要遺跡分布図 …… 2</p> <p>第3図 発掘調査対象範囲および試掘穴 位置図 ……………… 5</p> <p>第4図 試掘穴北壁土層断面図 ……………… 5</p> <p>第5図 調査区北壁土層柱状図 ……………… 9</p> <p>第6図 1・2区主要遺構配置図 ……………… 10</p> <p>第7図 1・2区北壁土層断面図 ……………… 10</p> <p>第8図 1区東壁土層断面図 ……………… 10</p> <p>第9図 3区主要遺構配置図 ……………… 11</p> <p>第10図 3区北壁土層断面図 ……………… 11</p> <p>第11図 4区西端・5区主要遺構配置図 …… 12</p> <p>第12図 5区北壁土層断面図 ……………… 12</p> <p>第13図 1区弥生時代遺構配置図 ……………… 14</p> <p>第14図 溝1出土遺物 ……………… 14</p> <p>第15図 溝2出土遺物 ……………… 14</p> <p>第16図 溝3 ……………… 15</p> <p>第17図 遺構に伴わない縄文・弥生時代遺物 …… 15</p> <p>第18図 1・2区古墳時代遺構配置図 …… 16</p> <p>第19図 溝5出土遺物 ……………… 16</p> <p>第20図 溝7出土遺物 ……………… 16</p> <p>第21図 溝8出土遺物 ……………… 17</p> <p>第22図 遺構に伴わない古墳時代遺物 …… 17</p> <p>第23図 1・2区古代遺構配置図 ……………… 18</p> <p>第24図 土壌1・出土遺物 ……………… 19</p> <p>第25図 土壌2 ……………… 19</p> <p>第26図 溝9・10 ……………… 19</p>	<p>第27図 溝9出土遺物（1）…………… 20</p> <p>第28図 溝9出土遺物（2）…………… 21</p> <p>第29図 溝10出土遺物 ……………… 22</p> <p>第30図 古代包含層下層出土遺物 ……………… 24</p> <p>第31図 古代包含層上層出土遺物（1）…… 25</p> <p>第32図 古代包含層上層出土遺物（2）…… 26</p> <p>第33図 3～5区出土古代遺物 ……………… 27</p> <p>第34図 4区西端・5区中世遺構配置図 …… 28</p> <p>第35図 溝11 ……………… 28</p> <p>第36図 溝11上層獣骨出土状態 ……………… 29</p> <p>第37図 溝11上層出土遺物 ……………… 29</p> <p>第38図 溝11下層出土遺物 ……………… 29</p> <p>第39図 溝11杭列2平・立面図 ……………… 30</p> <p>第40図 溝11杭列2・3出土杭 ……………… 30</p> <p>第41図 溝12・出土遺物 ……………… 31</p> <p>第42図 溝13 ……………… 31</p> <p>第43図 溝13出土遺物 ……………… 32</p> <p>第44図 溝13杭列1卒塔婆転用杭 ……………… 33</p> <p>第45図 溝13杭列1出土杭 ……………… 33</p> <p>第46図 土壌3・出土遺物 ……………… 34</p> <p>第47図 4区西端・5区近世遺構配置図 …… 35</p> <p>第48図 溝14・出土遺物 ……………… 35</p> <p>第49図 遺構に伴わない中世・近世遺物（1）…… 36</p> <p>第50図 遺構に伴わない中世・近世遺物（2）…… 37</p> <p>第51図 岡山県内出土の越州窯系青磁 …… 40</p> <p>第52図 中撫川・川入遺跡古代 遺構配置図 ……………… 42</p>
---	---

目 次

<p>掲載遺構一覧表 ……………… 44</p> <p>土器観察表 ……………… 44</p> <p>金属製品観察表 ……………… 48</p>	<p>石製品観察表 ……………… 48</p> <p>木製品観察表 ……………… 48</p> <p>土製品観察表 ……………… 49</p>
--	---

図版目次

巻頭図版 1

- 1 5区中世遺構完掘後全景
- 2 3区北壁土層断面
- 3 4区北壁土層断面
- 4 5区北壁土層断面

巻頭図版 2

- 1 1・2区古代包含層上層出土越州窯系青磁碗
(167・168)・京都産緑釉陶器碗 (156)

巻頭図版 3

- 1 1・2区出土京都府篠窯産緑釉陶器・須恵器片
- 2 1～4区出土緑釉陶器片

図版 1

- 1 溝9・10 左上：1区全景
右上：2N区全景
左下：土層断面
- 2 土壇 1
- 3 土壇 2
- 4 柱穴 1
- 5 緑釉陶器片出土状態

図版 2

- 1 溝4 1区全景
- 2 溝7 2N区全景
- 3 溝6・7 2S区全景
- 4 溝7 土器溜まり 1
- 5 溝7 土器溜まり 2

図版 3

- 1 溝6 上：2S区全景 下：土層断面
- 2 溝5 1区全景
- 3 溝1・2 1区全景
- 4 溝1 1区全景
- 5 2S区北壁土層断面

図版 4

- 1 溝3 3区全景
- 2 溝3 土層断面
- 3 4E区南壁土層断面
- 4 4W区調査終了後全景

図版 5

- 1 土壇 3 検出状況
- 2 土壇 3 完掘状況
- 3 溝13 4W区完掘状況
- 4 溝13 4W区土層断面
- 5 4W区南壁西端土層断面
- 6 4W区北壁土層断面

図版 6

- 1 5区近世遺構完掘後全景
- 2 溝14 左：上層完掘後 上：土層断面
- 3 5区中世遺構完掘後全景

図版 7

- 1 溝13 全景
- 2 溝11 全景
- 3 溝13 土層断面
- 4 溝11 土層断面
- 5 溝11 土層断面 (溝12との接点付近)
- 6 溝11 獣骨検出状況

図版 8

- 1 溝11 上：杭列 2 下：杭列 3
- 2 溝12 上：全景 下：土層断面
- 3 6区北壁土層断面
- 4 6区調査終了後全景

図版 9

- 1 縄文時代～古墳時代出土遺物
- 2 溝9出土遺物

図版10

- 1 溝10出土遺物
- 2 古代包含層下層出土遺物

図版11

- 1 古代包含層上層出土遺物

図版12

- 1 各遺構・包含層出土土錘

図版13

- 1 古代包含層上層出土遺物
- 2 溝11上層出土遺物
- 3 溝11下層出土遺物

図版14

- 1 溝11下層出土遺物
- 2 溝11・13出土杭 (杭列 1～3)

図版15

- 1 溝13出土卒塔婆転用杭
- 2 溝14出土遺物
- 3 溝13出土遺物

図版16

- 1 溝13出土遺物 (W13：五輪塔転用杭)
- 2 溝13出土杭 (杭列 1)

図版17

- 1 溝14出土獣骨 (ウシ)

図版18

- 1 遺構に伴わない中世・近世遺物

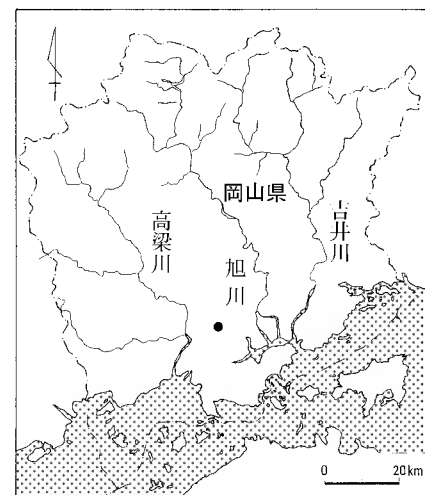
第1章 遺跡の位置と環境

本書で報告する中撫川遺跡（1）は、岡山県の南部中央、足守川中流域の東岸に位置する。行政区画は岡山市の西端にあたるが、地形的には総社平野の東端を占め、原始・古代には高梁川の分流が総社平野を西から東に貫流し、さらに現在の足守川に沿って南流していたと考えられている。足守川は吉備高原の高陣山に発し、岡山市足守で平野部に至り、岡山市三手で血吸川と前川を合わせて砂川に合流して南進する。現在では、岡山市古新田で笹ヶ瀬川に合流し、児島湾に注ぐが、中世頃までは海が入り込み、倉敷市下庄から岡山市庭瀬あたりに河口があったとみられている。

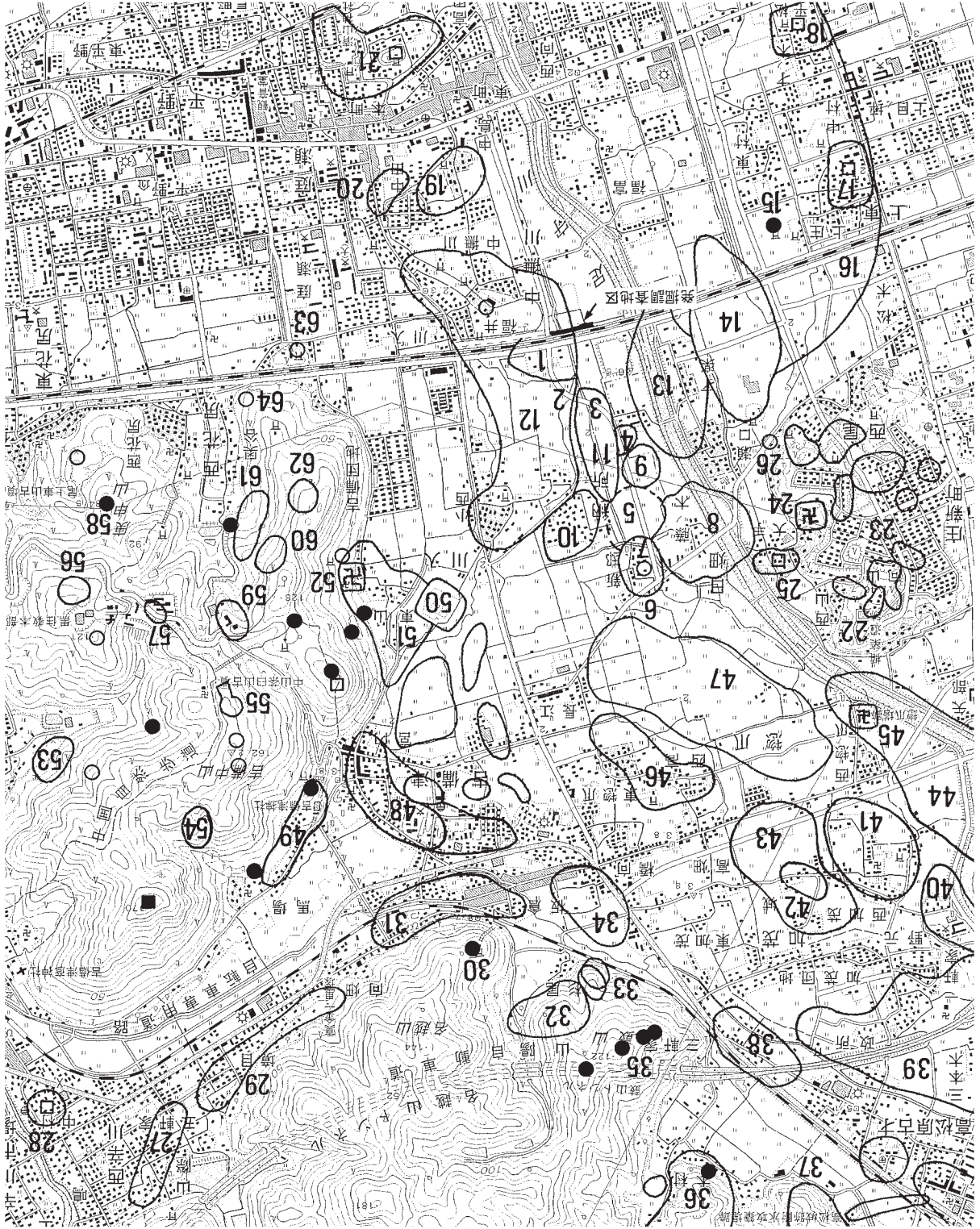
足守川中流域にあたる岡山市三手から加茂、吉備津、川入、そして倉敷市矢部から上東一帯の平野部には多くの微高地が形成されている。遺跡の所在するこれらの微高地は大きく二群に分けることができる。一つはかつての河口に形成された倉敷市上東から岡山市川入地域の微高地群で、上東遺跡（16）、新邸遺跡（6）、川入遺跡（12）などが所在する。本書で報告する中撫川遺跡もこの群に含まれる。もう一つは河口から少し上流にあたる岡山市三手から高塚、加茂、倉敷市矢部地域の微高地群で、津寺遺跡（40）、矢部南向遺跡（44）、加茂政所遺跡（39）などが所在する。この南北に広がる平野部の東西には低丘陵が連なっているが、この丘陵上には大形の墳丘墓をはじめ、多くの古墳の存在が認められている。とくに、東側の丘陵は独立丘陵で、古代から「吉備の中山」と呼ばれ、北西裾には吉備一宮とされる吉備津神社（49）が鎮座している。

この地域における最も古い生活の痕跡は旧石器時代に遡る。足守川西岸の丘陵上に所在する甫崎天神山遺跡（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告89』岡山県教育委員会 1994年、以下『県報』と略す。）や雲山遺跡（『県報89』1994年）からはナイフ形石器が出土している。寒冷的な旧石器時代から温暖な気候となった縄文時代には海水面の上昇が始まり、この平野部一帯に海が入り込んでくる。足守川西岸の丘陵裾に立地する矢部貝塚（『県報82』1993年）では、中期後半に形成された貝層の大半がヤマトシジミで、これにカキ、ハイガイなどが混じることから、近接して砂泥質の海が広がっていたと考えられる。こうした自然環境は、河川による沖積化の進行はあるものの、新邸遺跡（近藤義郎「備中新邸貝塚」『古代学研究』8 1963年）や加茂政所遺跡（『県報138』1999年）における弥生時代中期・後期の貝塚の検出からみて、古墳時代頃までは大きな変化はなかったものとみられる。

縄文時代には、早期の矢部奥田遺跡（『県報82』1993年）、中期から後期にかけての矢部貝塚・黒住遺跡（『県報89』1994年）、後期の西尾貝塚（26）（藤田憲司「周辺の遺跡」『王墓山遺跡群』倉敷市教育委員会 1974年）、後期から晩期にかけての甫崎天神山遺跡など、丘陵上から裾部に立地する遺跡がほとんどであるが、後期になると津寺遺跡（『県報98』1994年）のような微高地上の遺跡も現れるようになる。弥生時代になると、微高地上に多くの遺跡が形成されるようになる。前期の集落の



第1図 遺跡の位置（黒丸印）



- 1 中撫川遺跡 2 川入遺跡 3 掛無堂遺跡 4 仏生田遺跡 5 郷ノ溝遺跡 6 新邸遺跡 7 新邸貝塚 8 日細橋遺跡
- 9 カキノ堂遺跡 10 散布地 11 散布地 12 川入遺跡 13 才楽遺跡 14 岩倉遺跡 15 荒神古墳 16 上東遺跡
- 17 片城跡 18 平松城跡 19 散布地・古墳群 20 庭瀬川崎遺跡 21 撫川城・庭瀬城跡 22 橋架弥生墳丘墓
- 23 王臺山古墳群 24 日知庵寺 25 日知城跡 26 西尾貝塚 27 散布地 28 鎧跡 29 散布地・古墳 30 真城寺裏山古墳
- 31 散布地 32 杉尾古墳群 33 占備津杉尾西遺跡 34 占備津奥田遺跡 35 鼓山古墳群・鼓山城跡 36 勝負古墳群ほか
- 37 観音山古墳群 38 高松原古才・立川遺跡 39 津寺三木木・津寺一軒屋・加茂政所遺跡 40 津寺遺跡 41 幸利神社遺跡
- 42 加茂城跡 43 散布地 44 加茂大部南遺跡 45 惣爪庵寺・塔跡 46 高田遺跡 47 散布地 48 吉野1遺跡ほか
- 49 占備津神社・占備津神社境内古墳 50 伝實陽氏館跡 51 東山遺跡ほか 52 如草堂遺跡 53 北浦古墳群 54 高麗庵寺ほか
- 55 中山茶臼山古墳 56 三坑古墳群 57 散布地 58 矢鎌治山弥生墳丘墓 59 散布地 60 山神下古墳群 61 奥谷古墳群
- 62 向山古墳群 63 八幡神社貝塚 64 祭祀遺跡

第2図 調査遺跡周辺の主要遺跡分布図 (1/25,000)

実態はなお明確ではないが、津寺遺跡（『県報116』 1997年）、岩倉遺跡（14）、高田遺跡（46）（鎌木義昌「高田遺跡」『岡山県史』第18巻 岡山県 1986年、以下『県史』と略す。）、川入遺跡（『県報2』 1974年）などで遺物が認められることから、小規模な集落が点在していたものと思われる。中期になると先の遺跡に加え、加茂政所遺跡、津寺三本木遺跡（39）（『県報142』 1999年）、加茂B遺跡（『県報94』 1995年）、矢部南向遺跡（『県報94』 1995年）、新邸遺跡、吉野口遺跡（48）（草原孝典ほか『吉野口遺跡』岡山市教育委員会 1997年）、上東遺跡（『県報2・16・157・158』 1974・1977・2001・2001年）など、遺跡数の増加が著しい。多くの遺跡は後期で拡大し、さらに古墳時代にかけて続く。

中期の後半には、微高地の遺跡に対し、矢部奥田遺跡、矢部堀越遺跡（『県報82』 1993年）、前池内遺跡（『県報89』 1994年）、後池内遺跡（『県報89』 1994年）、雲山遺跡（『県報89』 1994年）、女男岩遺跡（間壁忠彦・間壁葎子「女男岩遺跡」『王墓山遺跡群』倉敷市教育委員会 1974年）など、丘陵上あるいはその裾部に小規模な、しかも短期間の集落を形成する遺跡が急増する。軍事的緊張関係の高まりを示す高地性集落の出現時期と重なるようにも思われ、その社会的背景が注目される。

後期になると55軒の住居からなる津寺遺跡（『県報90・98・104・116・127・143』 1994・1995・1996・1997・1998・1999年）を始め、加茂政所遺跡、高塚遺跡（『県報150』 2000年）、矢部南向遺跡、やや離れるが上東遺跡など、拠点的な集落が形成される。これらの拠点集落は高塚遺跡で銅鐸や貨泉、加茂政所遺跡で銅釧、矢部南向遺跡で小銅鐸や銅鏡などの青銅器を持ち、加茂A遺跡（『県報94』 1995年）や加茂B遺跡では朱に関わる遺物をもつなど、他地域の集落に比較して優位性が見られる。また、上東遺跡では船着き場とおぼしき遺構も検出されている（『県報157』 2001年）。

さらに、集落のみならず、楯築弥生墳丘墓（22）（近藤義郎『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会 1992年）、鯉喰神社墳丘墓（平野泰司・岸本道昭「鯉喰神社弥生墳丘墓の弧帯石と特殊器台・壺」『古代吉備』22 2000年）、雲山鳥打墳丘墓（近藤義郎「雲山鳥打弥生墳丘墓群」『県史』）、女男岩墳丘墓（間壁忠彦・間壁葎子「女男岩遺跡」『王墓山遺跡群』倉敷市教育委員会 1974年）・矢藤治山墳丘墓（58）（近藤義郎編『矢藤治山弥生墳丘墓』矢藤治山弥生墳丘墓調査団 1995年）など、大形の墳丘墓が集中することからも、かつて吉備と呼ばれた地域の中核であった可能性が強い。

古墳時代前半期の集落は弥生時代後期の集落から継続しており、しかも250軒を超える住居からなる津寺遺跡のように拠点集落の発展が窺われる。これらの集落では、弥生時代終末から、近畿地方や東海地方など、各地域の土器が出土している。吉備の中核勢力として物流をも掌握していたと思われる。しかしその政治勢力の首長墳は以外に少なく、矢部大塚古墳（宇垣匡雅「矢部大塚古墳」『前方後円墳集成』中国四国編 山川出版社 1991年）と中山茶臼山古墳（55）（近藤義郎「中山茶臼山古墳」『県史』）があるにすぎない。足守川流域では中山茶臼山古墳に続き佐古田堂山古墳（西川宏「佐古田堂山古墳」『県史』）が、続いて吉備最大の造山古墳（西川宏「造山古墳」『県史』）が築造される。このあと小造山古墳（中田啓司・近藤義郎「小造山古墳」『総社市史』考古資料編 総社市 1987年）が造られるが、これを最後に足守川流域からは大形の首長墳は姿を消す。

中期の集落は以外に少なく、高塚遺跡や津寺遺跡、三手遺跡（『県報90』 1994年）などがあるにすぎない。しかし、高塚遺跡や津寺遺跡からは朝鮮半島系の遺物が多く出土し、初期のカマドを作り付けた竪穴住居なども認められる。造山古墳の陪塚の一つである榊山古墳（島崎東「備中榊山古墳採集の遺物について」『岡山県史研究』3 岡山県史編纂室 1982年、西川宏「榊山古墳」『県史』）か

らは馬形帯鉤や陶質土器が出土しているが、渡来系の人々が足守川中流域に居住していたことが推定される。中撫川遺跡（川入遺跡）でも、かつて大溝から舶載品とみられる陶質土器が出土している（『県報2』 1974年、伊藤晃・島崎東「中国地方」『日本陶磁の源流』柏書房 1984年）。

後期になると周辺の丘陵上には多くの古墳が築かれる。その多くは前内池古墳群（『県報89』 1994年）や王墓山古墳群（23）（間壁忠彦・間壁葎子ほか『王墓山遺跡群』倉敷市教育委員会 1974年）などで明らかにされているような、横穴式石室をもつ小規模な古墳であるが、大形の石室に家形石棺を収め、鏡や馬具が副葬された王墓山古墳（山本雅靖・間壁忠彦「王墓山古墳」『王墓山遺跡群』倉敷市教育委員会 1974年）も存在する。7世紀になると古墳は減少するが、ごく一部の有力氏族はなお古墳を造り続けている。二子14号墳（『県報81』 1993年）は一辺13mの外護列石をめぐらす2段築成の方墳で、終末期古墳の一例である。

一方、これとあい前後して日畑廃寺（24）（小野雅明・藤原好二・福本明『日畑廃寺』倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告11 倉敷市教育委員会 2005年）が建立される。この地域における有力首長層の仏教の受容を示すとともに、権威の表象の変化を物語るものであろう。有力首長層は中央政権によって官人として組み込まれていくが、前内池古墳（『県報89』 1994年）の石室から出土した「官」字印の押された須恵器はこのことを如実に物語っている。なお、日畑廃寺などの寺院の瓦を焼成した二子御堂奥瓦窯跡（『県報2』 1974年）が二子14号墳の所在した丘陵裾に築かれている。

古代の足守川下流域は備中国の東端に位置し、都宇郡に属していた。都宇郡は4郷からなる小郡で、中撫川遺跡は撫河郷に属していたものと推定される。中撫川遺跡の北西2km、足守川に接して惣爪廃寺（45）（永山卯三郎「津寺址」『岡山縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第五冊 1925年）があるが、その北側にはほぼ東西に古代山陽道が推定されている。足守川西岸の山陽道沿いには津峴駅に比定されている矢部廃寺（間壁忠彦・間壁葎子『倉敷の古代』倉敷考古館 1972年）がある。津寺遺跡からは、南北124m、東西94mの二重の溝で区画された掘立柱建物群が発見されている（『県報127』 1998年）。8世紀に建てられたと考えられ、津寺が交通の要衝であることから、物流の拠点として官衙的な機能が推定されている。集落については不明な点が多いが、津寺遺跡、吉野口遺跡、矢部南向遺跡、東山遺跡（51）（乗岡実「岡山市域における最近の発掘調査成果」『古代吉備』12 1990年）などで掘立柱建物がみられる。この東山遺跡の北西に接して、この地方の有力氏族で、吉備津神社の神官を務めた賀陽氏の居館跡とされる遺跡（50）（『岡山市埋蔵文化財センター年報』2 岡山市教育委員会 2003年）が存在する。また、津寺遺跡では、6世紀末から7世紀初頭に造られた大規模な護岸施設が築かれている（『県報98』 1995年）。この施設は奈良・平安時代に機能していたもので、水利管理や前述の官衙や集落の保護をはたしていたものと推定されている。

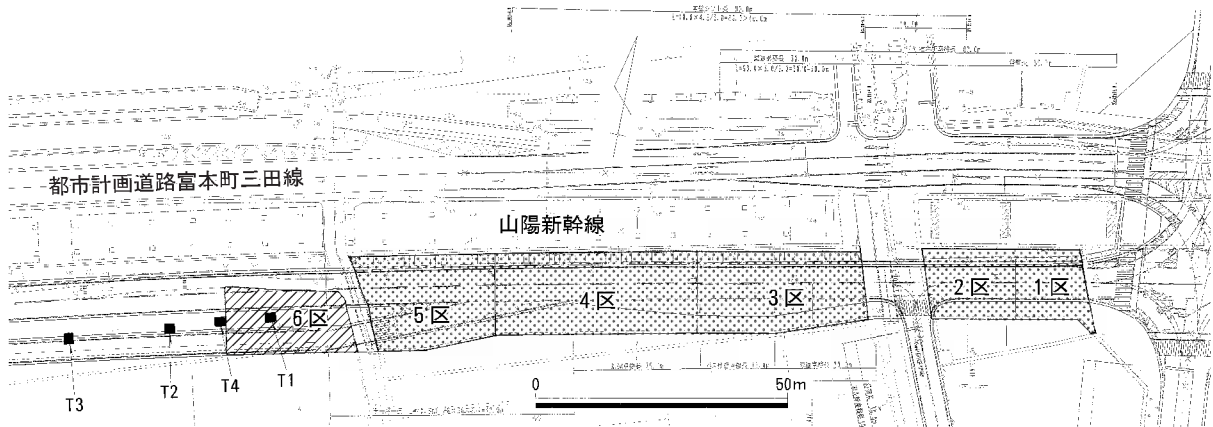
中世の遺跡は高塚遺跡、津寺遺跡、東山遺跡、吉野口遺跡、三手遺跡、足守川矢部南向遺跡など、多くの遺跡で集落を構成する遺構が検出されている。このうち津寺遺跡や三手遺跡などでは、溝で区画された屋敷地のなかに建物群がみられるほか、輸入陶磁器を副葬する土壌墓も散見されることから、やや上位の農民層の集落ではないかと考えられる。この足守川下流域は、総社市井尻野の高梁川に設けられた湛井堰から取水する湛井十二ヶ郷用水の灌漑地域にあたる。十二ヶ郷用水の起源は平安時代初期にさかのぼる可能性があるが、中撫川遺跡のある足守川下流東岸は室町時代以降に水路が開発されたとされる（藤井駿・加原耕作『備中湛井十二箇郷用水史』備中湛井十二箇郷組合 1976年）。現在の水田地帯の景観はこの室町時代以降に形成されたものと考えられよう。（岡本）

第2章 調査の経緯

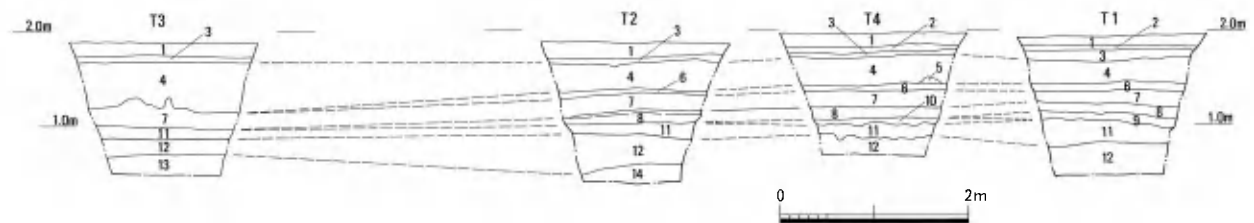
第1節 発掘調査の契機と経過

一般県道川入巖井線・都市計画道路富本町三田線は、岡山市と倉敷市の中心部を結ぶ幹線道路であるが、岡山市西花尻から倉敷市上東にかけての山陽新幹線北側沿いの部分では片側一車線のため、近年は朝夕の交通渋滞が激しくなっていた。このため、岡山県は新幹線の南側沿いにも道路をあらたに建設し、路線を拡大する形で渋滞の緩和を図ることとして、順次に建設を進めている。

一般県道吉備津松島線は、川入巖井線の西端にあたる岡山市中撫川から新邸までの南北路線が平成18年度に開通したが、中撫川から西の新幹線南側沿いの道路建設部分についても、吉備津松島線の一部として着工することとなった。建設予定地には新幹線や都市計画道路の建設等によって遺跡の存在が明確なため、岡山県岡山地方振興局（現岡山県備前県民局）と岡山県教育庁文化財課との間で、遺跡の保存についての協議が行われた。その結果、遺跡については記録保存のための発掘調査を岡山県



第3図 発掘調査対象範囲および試掘穴位置図
(網目：当初範囲 斜線：追加範囲) (1/1,500)



- | | | |
|-----------------------|-------------|-------------------------|
| 1 暗灰色上（現耕作上） | 6 淡灰褐色粘性砂質土 | 11 淡灰色～暗灰色粘質土 |
| 2 青灰色粘性砂質土（旧耕作上？） | 7 灰黄褐色粘質土 | 12 淡青灰色～灰色～暗灰色粘土（塊状混合土） |
| 3 淡灰黄褐色～淡青灰色粘性砂質土（床上） | 8 灰色～褐灰色粘質土 | 13 暗青灰色粘土（塊状混合土） |
| 4 淡灰褐色細砂（造成土） | 9 暗灰色粘質土 | 14 灰黑色粘土 |
| 5 淡青灰色粘性砂質土 | 10 灰色粘質土 | |

第4図 試掘穴北壁土層断面図 (1/80)

第2章 調査の経緯

古代吉備文化財センターが実施し、重要な遺構などが発見された場合には別途協議を行うこととした。調査対象地は過去の調査成果から第3図の1区から5区までの2,200㎡である。

発掘調査は平成19年4月10日から、現地での掘り下げを開始した。3区から5区までは用水路によって重機が直接進入できないため、水路上に仮橋を架けることとし、その完成までに、3区から5区の北端に幅1.5m、長さ98mのトレンチ（試掘溝）を掘削し、土層の堆積状況や遺跡の内容を把握することとした。土層観察の結果、微高地の基盤層や古代の包含層が5区の西端まで存在し、明瞭な微高地の下がりか認められなかった。遺跡がさらに西方へ続く可能性が高くなったため、備前県民局と教育庁文化財課とで現地協議を行い、5区より西で遺跡の確認調査を実施することとした。

5月7日から重機による表土剥ぎが可能となり、3区・5区・1区の表土を除去し、まず1区の調査、続いて5区の調査を開始した。1区では古代の包含層中から遺物が多量に出土し、越州窯系青磁や緑釉陶器片が多く出土したことからより慎重な発掘が要求され、黒褐色系の土で分層が困難であったことなどもあって多くの期間を要した。5区でも大形の水路が錯綜して検出され、隣接地では水田耕作中であったことから出水にも悩ませられ、8月上旬まで調査を継続した。

5月23日から前述の確認調査に着手した。試掘穴の位置と北壁の土層断面図は第3・4図に示したが、試掘穴1（T1）の第9層が古代遺物包含層と想定され、第12層は5区の微高地基盤層に続く可能性が考えられた。試掘穴2・3では古代遺物包含層は確認されなかったため、試掘穴4を掘削したところ、第10層が第9層と土質や上面が波打つ形状で類似した状況を見せた。すべての試掘穴から遺物の出土をみたものの、中世・近世のものがほとんどで、試掘穴3では僅少であった。以上のことから、第4図にあるように、試掘穴4付近を遺跡の西端と考え、あらたに6区を設定した。

5区の調査終了後3区の調査に入った。3区では北側のトレンチ調査から弥生時代以降の大きなたわみ地形の存在が知られていたため、中世の包含層を除去した後、中央にトレンチを入れて土層を観察した。たわみの上部に2層の薄い黒褐色系の土層が確認され、これらが洪水をかぶった旧表層である可能性が高いと判断し、湿地状の地形を呈していたと考えた。出土遺物もほとんどなかった。この湿地状の地形は4区にも続いていることがトレンチ調査で確認された。

2区と4区は排土の関係で二分割して発掘調査を行った。4区は前述のように湿地状の地形が大部分であったことから、トレンチ調査によって土層と遺物の出土状況を確認して調査を終了し、6区でも西に向かって湿地状の土層状況が中央トレンチで確認されたことから、その段階で調査を終了した。2区では基盤層上面まで掘り下げを行った。11月28日に資材を撤収し、発掘調査を終了した。

調査日誌抄

平成19年

4月2日（月）	調査準備開始。	8月7日（火）	5区調査終了。
10日（火）	発掘資材搬入。3～5区北側トレンチ掘り下げ開始。	8日（水）	3区調査開始。
5月7日（月）	3・5区重機による表土除去開始。1区調査開始。	24日（金）	1区調査終了。
14日（月）	5区調査開始。	9月10日（月）	2S区調査開始。
23日（水）	確認調査開始。	14日（金）	3区調査終了。
29日（火）	確認調査終了。	19日（水）	2N区調査開始。
		24日（月）	4W区調査開始。
		10月10日（水）	2S区調査終了。

22日(月)	4W区調査終了。	26日(月)	4E区調査終了。
11月1日(木)	6区調査開始。	28日(水)	現場資材撤収。
16日(金)	4E区調査開始。	30日(金)	発掘調査終了。
20日(火)	2N・6区調査終了。		

文化財保護法に基づく提出書類一覧

埋蔵文化財発掘の通知(法第94条)

番号	文書番号 日付	種類および 名称	所在地	面積 (㎡)	目的	届出者	期間	主な 指示事項
1	教文埋 第20号 H19.4.4	集落跡 中撫川遺跡	岡山市中撫川 地内	2,100	道路	岡山県備前 県民局長	H20.1.1～ H20.3.31	発掘調査

埋蔵文化財発掘調査の報告(法第99条)

番号	文書番号 日付	周知・ 周知外	種類および 名称	所在地	面積 (㎡)	原因	報告者	担当者	期間
1	岡吉調 第7号 H19.4.18	周知	集落跡 中撫川遺跡	岡山市中撫川 439-1ほか	2,200	道路	岡山県古代吉 備文化財セン ター所長	岡本寛久・ 氏平昭則・ 田中政之	H19.4.10 ～ H19.9.30

埋蔵文化財発見通知(法第100条)

番号	文書番号 日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
1	教文埋 第1000号 H19.11.30	弥生土器・土師器・ 須恵器・陶磁器・瓦 ・土製品・金属製品 ・木製品等 計整理箱83箱	岡山市中撫川 439-1ほか 中撫川遺跡	H19.4.10 ～ H19.11.30	岡山県教育委 員会教育長 門野八洲雄	岡山県知事 石井正弘	岡山県古代 吉備文化財 センター

第2節 報告書作成の経過

発掘調査の終了後、調査員1名が報告書作成のための整理作業に12月1日から入った。出土遺物の洗浄と注記作業は、調査中に現場事務所でほぼ済ませていたため、接合・復元作業から着手し、実測用遺物の抽出、実測、写真撮影と進めた。遺構については、図面整理の後、調査区別の遺構配置図、個々の遺構の浄写を行い、一部、割り付け作業や原稿執筆も行った。整理作業は平成20年3月31日まで実施し、次年度にも継続することとして一時作業を中断した。

平成20年度は、7月1日から整理作業を再開し、調査員1名が担当した。遺物実測と撮影用の復元作業・写真撮影を継続し、調査員は遺物実測図の点検・修正と遺物の浄写に集中した。9月末には遺物の写真撮影や浄写を終了させ、遺物図版の作成に入った。10月からは報告書の割り付け作業を行い、

10月24日に割り付けが完了した。掲載遺物は土器が229点、土製品は34点、金属製品18点、木製品17点、石製品9点で、合計307点を数える。11月中には原稿執筆を終え、印刷業者も決定した。

以後、校正作業を継続し、年度末には報告書の完成をみた。また、平成21年1月からは出土遺物や写真・図面類の収蔵管理作業を実施し、年度内に古代吉備文化財センター内における保管を終えた。

第3節 発掘調査および報告書作成の体制

前述のように、発掘調査は岡山県教育委員会が岡山県備前県民局から委託を受け、平成19年4月1日から同年11月31日まで実施した。発掘調査の実務は岡山県古代吉備文化財センターが担い、同センター職員3名が配置された。発掘調査の終了後、継続して報告書作成作業に着手し、同センター職員1名が担当して平成20年3月31日まで整理作業を行った。

平成20年度に入って報告書作成作業は一時中断されたが、平成20年7月1日から再開され、同センター職員1名が配置され、同年度末の報告書刊行に至るまで作業を継続して実施した。

発掘調査および報告書作成作業の体制は以下のとおりである。 (岡本)

平成19年度	平成20年度
岡山県教育委員会	岡山県教育委員会
教育長 門野八洲雄	教育長 門野八洲雄
岡山県教育庁	岡山県教育庁
教育次長 神田 益穂	教育次長 岡野 健一
文化財課	文化財課
課長 藤井 守雄	課長 三村 修
参事 田村 啓介	参事(埋蔵文化財班担当) 木山 潤郎
総括副参事(埋蔵文化財班長) 光永 真一	参事 田村 啓介
主任 小嶋 善邦	総括副参事(埋蔵文化財班長) 光永 真一
主任 金出地敬一	主任 小嶋 善邦
岡山県古代吉備文化財センター	岡山県古代吉備文化財センター
所長 高畑 知功	所長 藤川 洋二
次長(総務課長) 小林 勝	次長(総務課長) 小林 勝
参事 岡田 博	参事 岡田 博
副参事 中島 謙次	
〈総務課〉	〈総務課〉
総括副参事(総務班長) 若林 一憲	総括副参事(総務班長) 若林 一憲
主任 福池 光修	主任 福池 光修
〈調査第一課〉	主任 中島 忍
課長 中野 雅美	〈調査第二課〉
総括副参事(第二班長)(調査担当)岡本 寛久	課長 島崎 東
主任 (調査・整理担当)氏平 昭則	総括副参事(第二班長)(整理担当)岡本 寛久
主事 (調査担当)田中 政之	

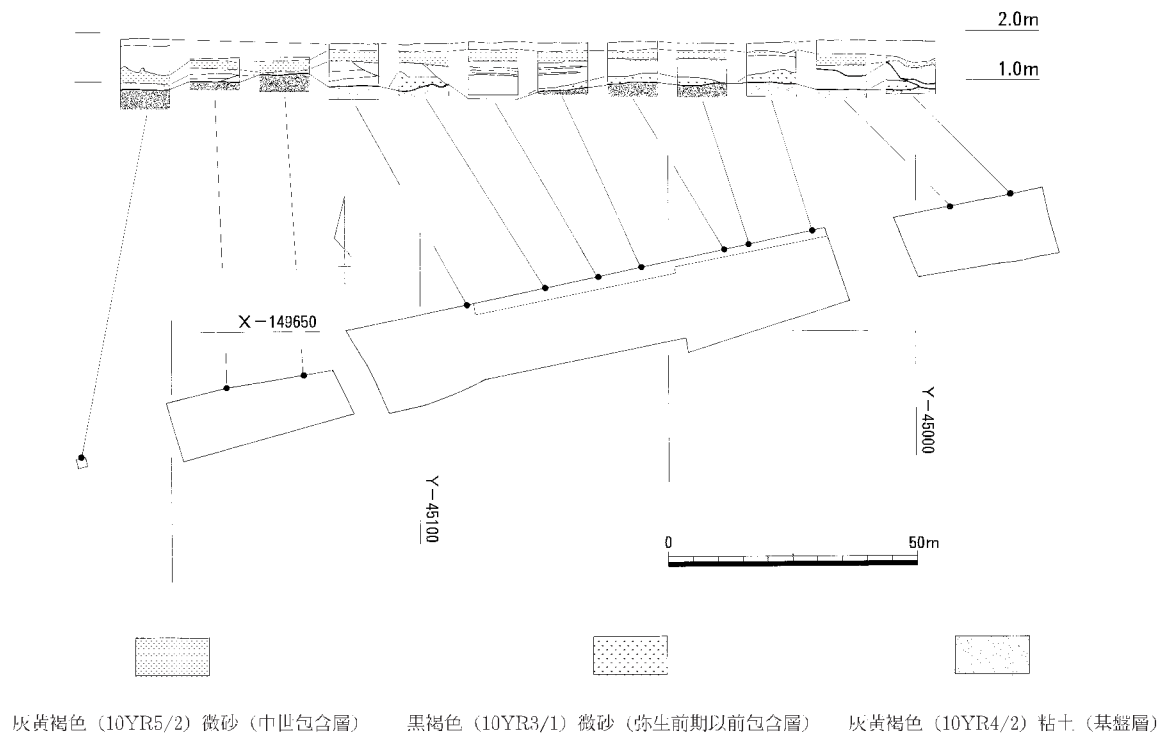
第3章 発掘調査の概要

第1節 調査区の概要

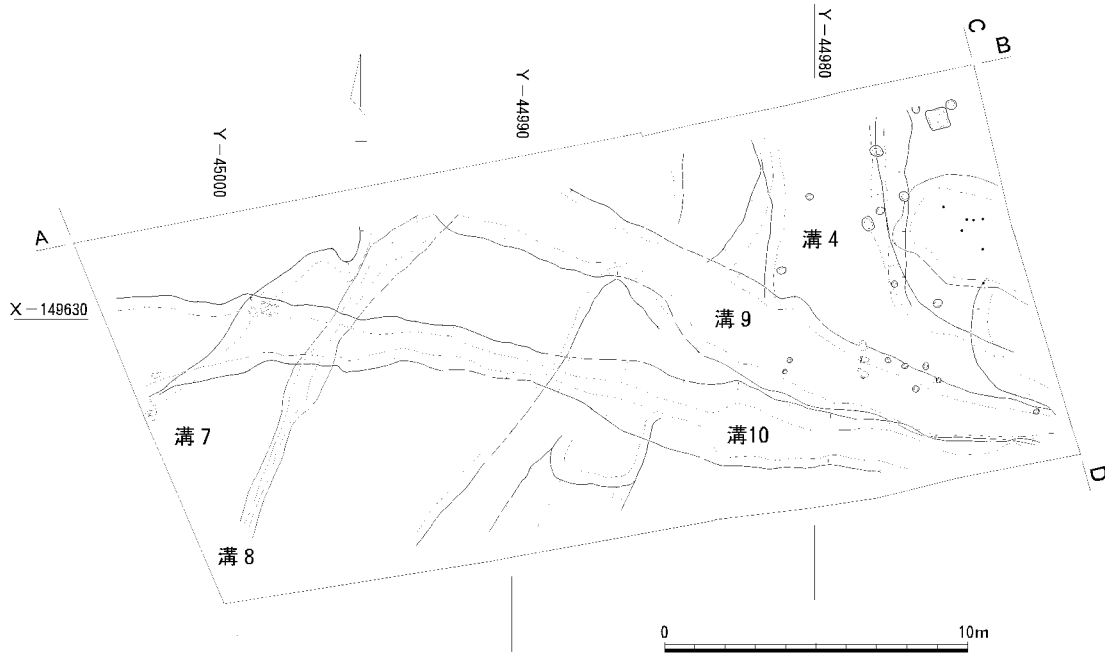
1 1・2区の概要

調査の行程上調査区を6つに分け、東から番号をふり1～6区とした。1・2区は北を新幹線調査地点、東を岡山市調査地点に接している。これらの過去の調査では古代・中世の建物や古代以前の溝群を検出していることから、その続きを予想した。西は現在の用水路があり、南は畑地である。用水路を隔てて西の3区に比べ、実際には表土で海拔高5cm程度高いに過ぎない。

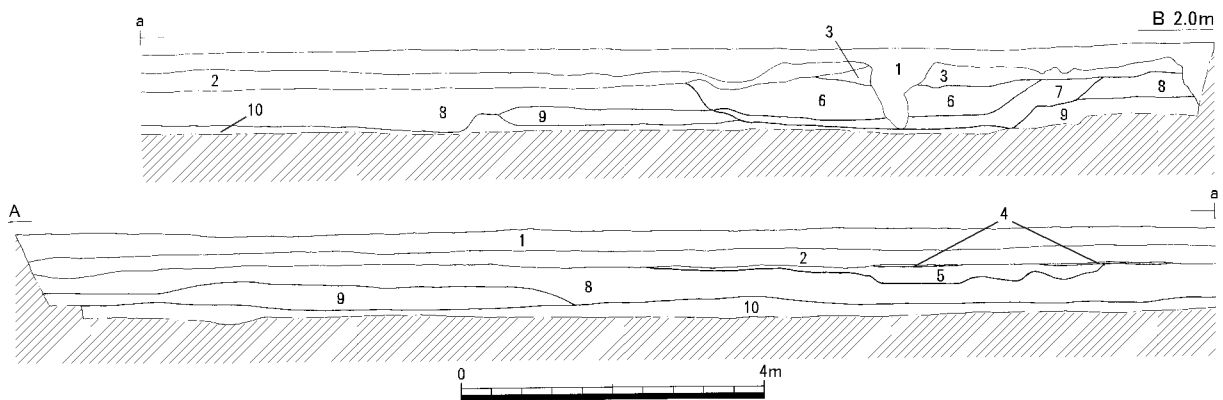
表土下は2区から1区西側まで中世包含層が認められた。1区東側では中世包含層は存在せず、古代の包含層が2層に分かれて堆積していた。上層は黒褐色微砂層で、調査区北東の窪地を中心に堆積していた。この層は11世紀前半までの遺物が多数出土している。下層は灰黄褐色微砂層で、1区南東部に堆積する。下層の範囲であるが、1区北側では上層に切られ、西は1区端まで、南は調査区外へ伸びる。この層は10世紀前半までの遺物を大量に含んでいた。2区では中世包含層除去後、1区では古代包含層除去後に古代の溝9・10を検出した。溝9・10は1区に対し2区の残りがよくなかった。古代溝の下では弥生～古墳時代の溝群を検出した。2区では古墳時代前期の溝7・8が川入大溝上層と同様の砂層で埋没し注目されよう。1区は古墳前期の溝4が弥生後期の溝2を踏襲している。(氏平)



第5図 調査区北壁土層柱状図 (1/1,500・1/150)

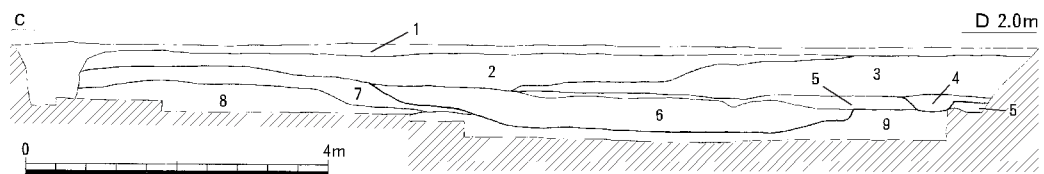


第6図 1・2区主要遺構配置図 (1/250)



- | | |
|------------------------------------|---|
| 1 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 土ほか (表土・現代掘削) | 6 暗褐色 (10YR3/3) ~ 黒褐色 (10YR3/1) 微砂 (古墳時代溝4埋土) |
| 2 灰黄褐色 (10YR5/2) 微砂 (中世包含層) | 7 黒褐色 (10YR3/2) 微砂 (弥生時代溝2埋土) |
| 3 黒褐色 (10YR3/2) 微砂 (平安時代包含層) | 8 暗褐色 (10YR3/3) 微砂 |
| 4 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 微砂 (古代溝9埋土) | 9 黒褐色 (10YR3/2) 微砂 |
| 5 にぶい黄褐色 (10YR6/3) 粗砂 (古墳時代溝7・8埋土) | 10 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土 (基盤層) |

第7図 1・2区北壁土層断面図 (1/100)

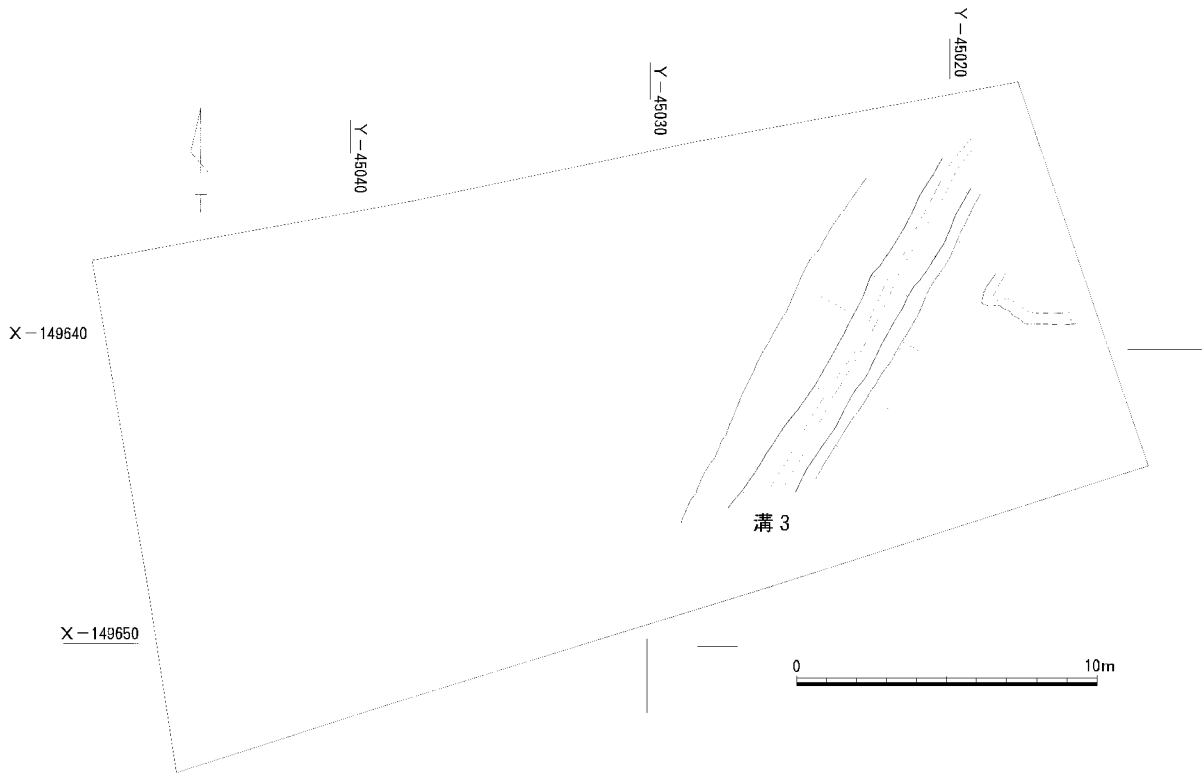


- | | |
|--------------------------------|------------------------------|
| 1 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 土ほか (表土・現代掘削) | 6 灰黄褐色 (10YR4/2) 微砂 (弥生時代溝1) |
| 2 黒褐色 (10YR3/2) 微砂 (古代包含層上層) | 7 暗褐色 (10YR3/3) 微砂 (弥生包含層) |
| 3 灰黄褐色 (10YR4/2) 微砂 (古代包含層下層) | 8 黒褐色 (10YR3/1) 微砂 (弥生包含層) |
| 4 褐灰色 (10YR4/1) 微砂 (古代溝10) | 9 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土 (基盤層) |
| 5 黒褐色 (10YR2/2) 微砂 | |

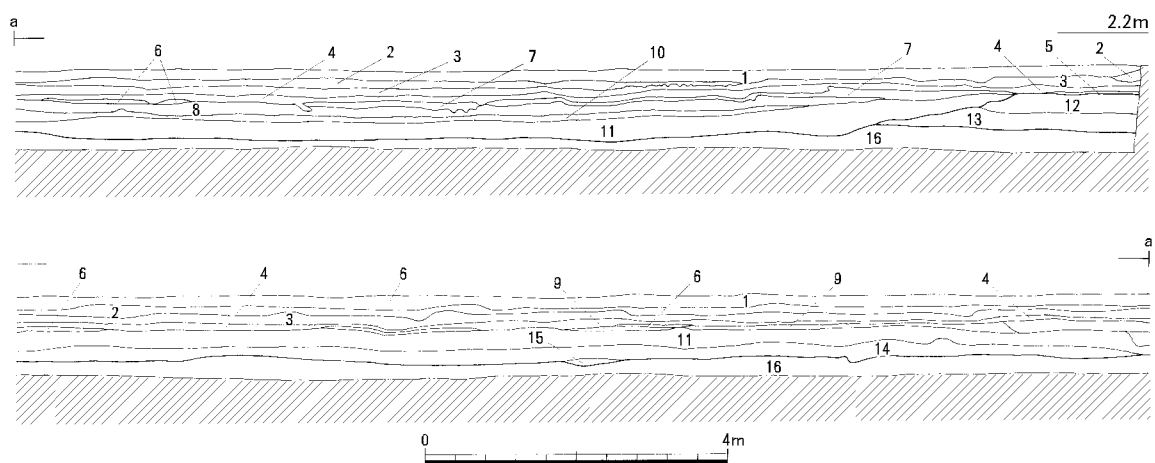
第8図 1区東壁土層断面図 (1/100)

2 3区の概要

3区は2本の用水路の間でもっとも東側の調査区で、耕作痕と溝3および下がりを確認した。表土下は近世・中世包含層で、遺物は小片が少量ある。その下の耕作痕は進行方向に対し横長の楕



第9図 3区主要遺構配置図 (1/250)



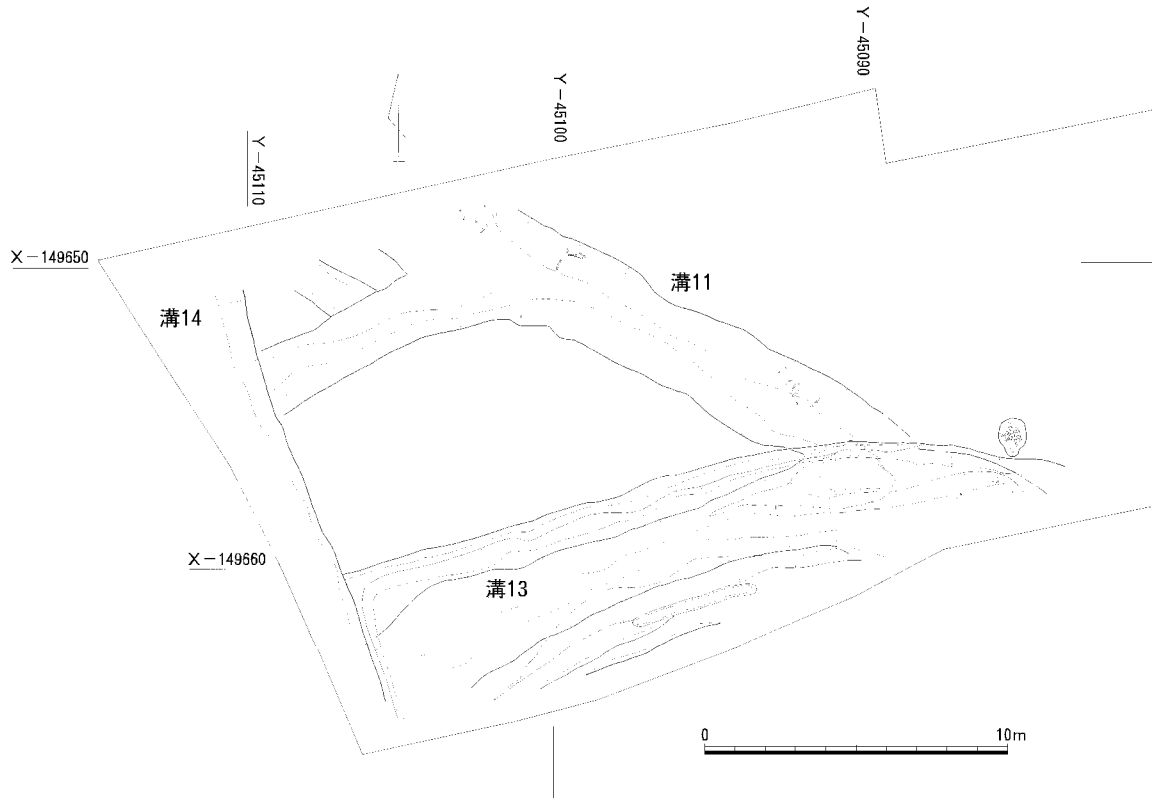
- | | | |
|----------------------------|-------------------------|---------------------------|
| 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 微砂 | 7 暗褐色 (10YR3/3) 粘性微砂 | 12 黒褐色 (10YR3/2) 粘性微砂 |
| 2 黄灰色 (2.5Y4/1) 微砂 (砂・小礫多) | 8 灰黄褐色 (10YR4/2) 微砂 | 13 黒褐色 (10YR2/3) 粘性微砂 |
| 3 黄褐色 (2.5Y5/4) 粘性微砂 | 9 におい黄褐色 (10YR4/3) 粘性微砂 | 14 黒色 (10YR2/1) 粘性シルト |
| 4 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘性微砂 | 10 黒褐色 (10YR3/1) 粘性微砂 | 15 黒褐色 (10YR3/2) 粘性シルト |
| 5 におい黄褐色 (10YR5/3) 粘性微砂 | 11 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土 | 16 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘土 (基盤層) |
| 6 褐色 (10YR4/4) 粘性微砂 | | |

第10図 3区北壁土層断面図 (1/100)

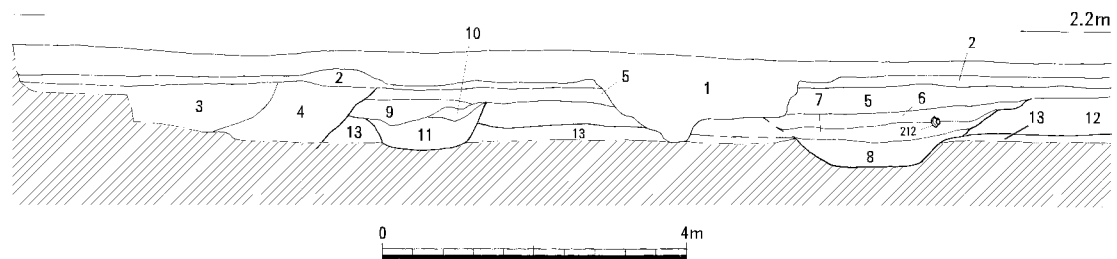
円形がほぼ等間隔で連なる形状で、東西方向と北東から南西方向のものが存在する。

耕作痕と同じ検出面で、溝3と下がりの線を検出した。下がりは溝3を挟んで東西にあり、その上端の線は溝3と平行である。西側下がりの層位は3層で、第10図第8層と第11層の間に第10層の黒褐色層を挟む。黒褐色層は炭化物を含む層で、ほぼ水平に堆積している(巻頭図版1-2)。西側下がり出土の遺物は時期不明の土師器のみである。西側下がり部分の底面の海抜高は0.80mで、下がりの肩から約13m西で緩やかに上がり、海抜高1.10mで水平になる。東側下がりも同様の堆積状態であった。

このような下がりは、人工的な遺構とは考えにくく、自然の湿地とするのが妥当であろう。東西の



第11図 4区西端・5区主要遺構配置図 (1/250)



- | | |
|--|----------------------------------|
| 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 土 (表土、攪乱) | 8 におい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土 (溝11埋土) |
| 2 明黄褐色 (10YR6/6) 微砂 (近世耕作土) | 9 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 微砂 |
| 3 褐色 (10YR4/6) 微砂~灰黄褐色 (10YR4/2) シルト (近世溝14埋土) | 10 におい黄褐色 (10YR4/3) 微砂 (溝12埋土) |
| 4 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 微砂~灰色 (7.5Y4/1) 微砂 (近世溝14埋土) | 11 褐灰色 (10YR5/1) 微砂混じり粘土 (溝12埋土) |
| 5 褐灰色 (10YR5/1) 微砂 (中世包含層) | 12 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト |
| 6 灰黄褐色 (10YR4/2) 微砂 (溝11埋土) | 13 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘土 (基盤層) |
| 7 黄褐色 (10YR5/6) ・灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土斑状混合土 (溝11埋土) | |

第12図 5区北壁土層断面図 (1/100)

下がりや溝3と一体にして水田であるとも考えられるが、畦畔や水口が見られないこともあって可能性の指摘に止めたい。
(氏平)

3 4・5区の概要

中撫川遺跡の今回の調査は、東西に長い調査区が2本の南北の用水路で分断される格好である。2本の水路間の調査区は調査の都合上3つに分割した。中央の調査区が4区、西側の用水路に接するのが5区である。3～5区は最初に調査区北端に東西のトレンチを入れた後、全面調査を行っている。

4区全面調査は、排土の関係上西側と東側に分割している。4区は3区から続く下がりやがさらに一旦低くなり、5区へ向かって上がる部分になる。遺構は南西端に中世の溝13・土壇3があるが、それ以外確認できなかった。

4区の土層について東から述べる。3区からは、第10図第14層にあたる基盤層直上の黒色粘性シルトが西へ約23m続く。黒色粘性シルトが切れる地点、3区西端から西へ約38m地点から基盤層はゆっくり下がり、3区西端から西へ約57m地点で上がる。この4区低位部には、海拔高1.10mと1.20mに黒褐色層が2層、約19mの範囲で堆積している(巻頭図版1-3)。4区低位部の出土遺物は土師器か弥生土器の小片で、量も少ない。この低位部が終わり、3区西端から西へ約57m地点から約63mの間に若干の高まりがある。平面では直径約5mの円形の範囲を確認した。そこから5区までは再び低位部になる。基盤層直上の黒褐色層は途切れながら5区まで存在する。

5区では、中世の溝群・土壇、近世の溝・水田・耕作痕を検出した。中世の溝群は中撫川遺跡ではこれまで未確認で、遺跡の広がりとあり方を考える上で重要な遺構である。溝11の埋没時期は埋土出土の土師器碗より室町時代前半、溝13は備前焼すり鉢から室町時代後半と比定できよう。溝13の出土遺物の時期幅が広いため、溝11が室町時代後半になると埋められ、溝13が改修して使用された可能性が高い。その後、近世には溝13の痕跡上に水田1、現在の用水路に並行して溝14が成立する。溝14には土層断面より複数回の改修が想定でき、最終段階では溝14は水田1より新しい。

5区の中世以前であるが、中世溝群以外では層位的には1区と類似し、基盤層上には黒褐色微砂層が存在する。この黒褐色微砂層は、調査区中央部や北東部の溝群が通らない所に残っていた。5区の黒褐色微砂層からは5世紀後半の須恵器(27・28)が出土していて、古墳時代の可能性が高い。1区基盤層直上の黒褐色微砂層が弥生時代後期以前であるのと異なる。
(氏平)

4 6区の概要

6区は今回の調査で最も西端の調査区である。5区の遺構出土を受けて確認調査を実施し、遺構の存在が予想されたため全面調査に踏み切った。

その結果、結論としては平面では遺構が認められなかった。調査区の北・中央・南に東西方向のトレンチを設定し、基盤層まで掘り下げたが遺構は検出できなかった。

土層は、表土の下に造成砂層、さらに中世包含層があって暗灰色～黒褐色粘土、さらに基盤層となる。中世包含層より下は3区～4区と同様湿地の状態である。遺物は小片であるが出土している。第4図T1の第8層からは包含層出土226に似る白磁口縁(素縁)、同じく第11層からは古墳時代の土師器甕口縁片が出土していることから、中世包含層は室町時代を中心とし、暗灰色～黒褐色粘土は古墳時代前期に相当する堆積と言えよう。
(氏平)

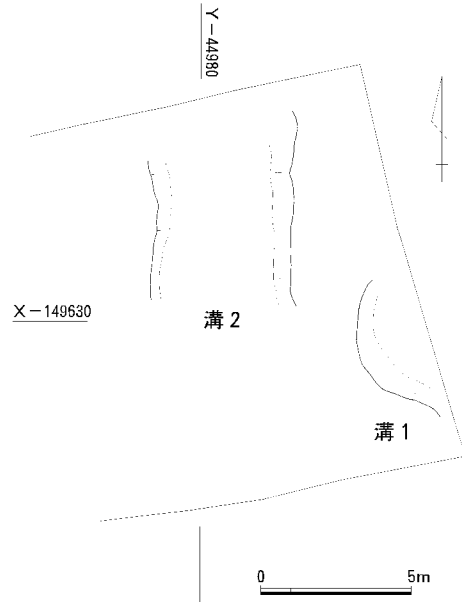
第2節 古墳時代以前の遺構・遺物

1 概要

縄文時代は遺構・包含層は存在せず、1区の石鏃S1と石匙S2の遺物のみである。

弥生時代の遺構は、1～3区に散在している。いずれも溝である。遺物は6区まで出土し、6区包含層から9の甕が出土している。1区基盤層直上の黒褐色微砂層（第8図第8層）は、吉備津松島線の平成13年調査時の弥生時代前期包含層と似るが、今回の調査では前期の土器は見られなかった。

古墳時代は1・2区で砂層で埋まる溝7・8など、古墳時代前期（川入大溝上層併行期）の遺構がある。3区より西では包含層で須恵器が見られる。（氏平）

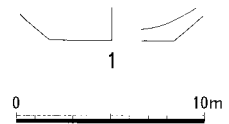


第13図 1区弥生時代遺構配置図（1/250）

2 縄文・弥生時代

溝1（第6・8・13・14図、図版3）

1区東壁土層断面図の通り、1区東端で古代遺構面下に検出した。平面では調査区外から西へ弓状に広がる部分のみである。底部は北から南へ緩やかに下り、深さは調査区東壁で45cmを測る。調査区内で東側への立ち上がりは検出していない。遺物は、1の鉢底部などの土器片が少量存在する。遺構の埋没時期は弥生時代後期であろうか。（氏平）

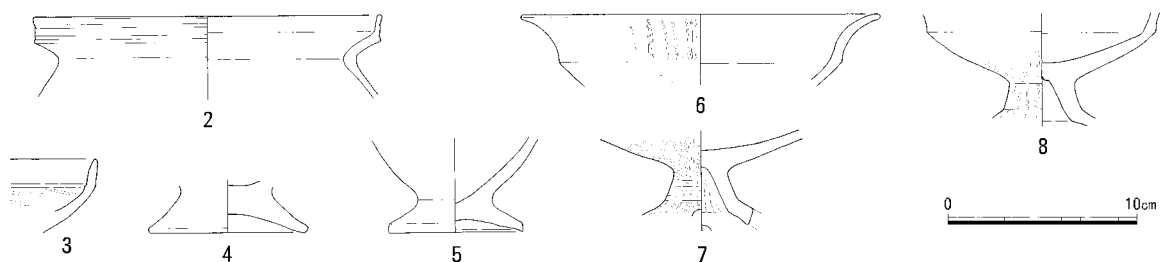


第14図 溝1
出土遺物（1/4）

溝2（第6・7・13・15図、図版3）

第7図1・2区北壁土層断面図で示した通り、1区北側で溝4下層に検出した。北から南へ緩やかに流れるが、中央より南側は古代の溝9・10で削られるため詳細は不明である。長さは約6m、幅は検出面で4.7m、深さは最大35cmを測る。底面はほぼ平らである。埋土は黒褐色微砂、土器より遺構の埋没時期は弥生時代後期後葉である。

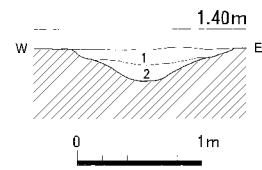
2は甕で、口縁部を直立に拡張させ、2条の凹線を飾る。3～5は台付鉢で、杯部の口縁は内折させる。6～8は高杯で、柱状部は短く、外反する杯部外面には縦方向のヘラミガキが残る。（岡本）



第15図 溝2出土遺物（1/4）

溝3 (第9・16図、図版4)

3区の東側で検出した、北東から南西へ流れる溝である。断面は中央が凹んだ逆凸状を呈する。土層は地山との区別が明瞭で2層に分かれる。幅は検出面で1.3~1.4m、深さは25cm、底面の標高は1.00~0.98mである。遺物は5片の土器片で、磨滅していても器種不明である。遺構の埋没時期は弥生時代としたが、遺物が少ないことや周辺に弥生時代の遺構が存在しないことから断定は避けたい。(氏平)



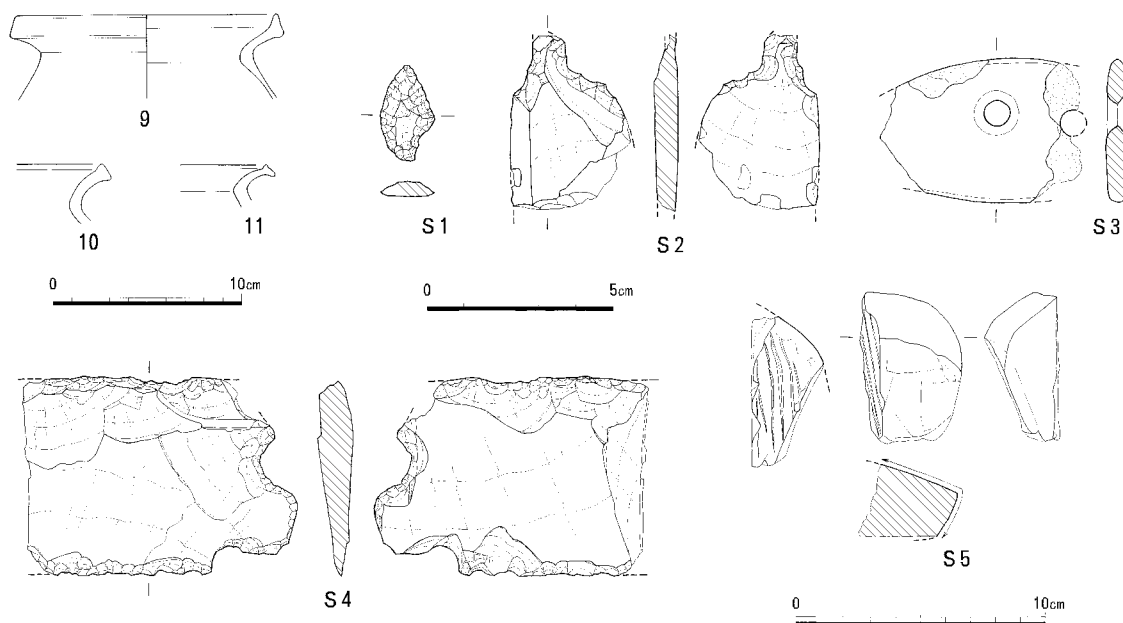
- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 微砂
- 2 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土

第16図 溝3 (1/60)

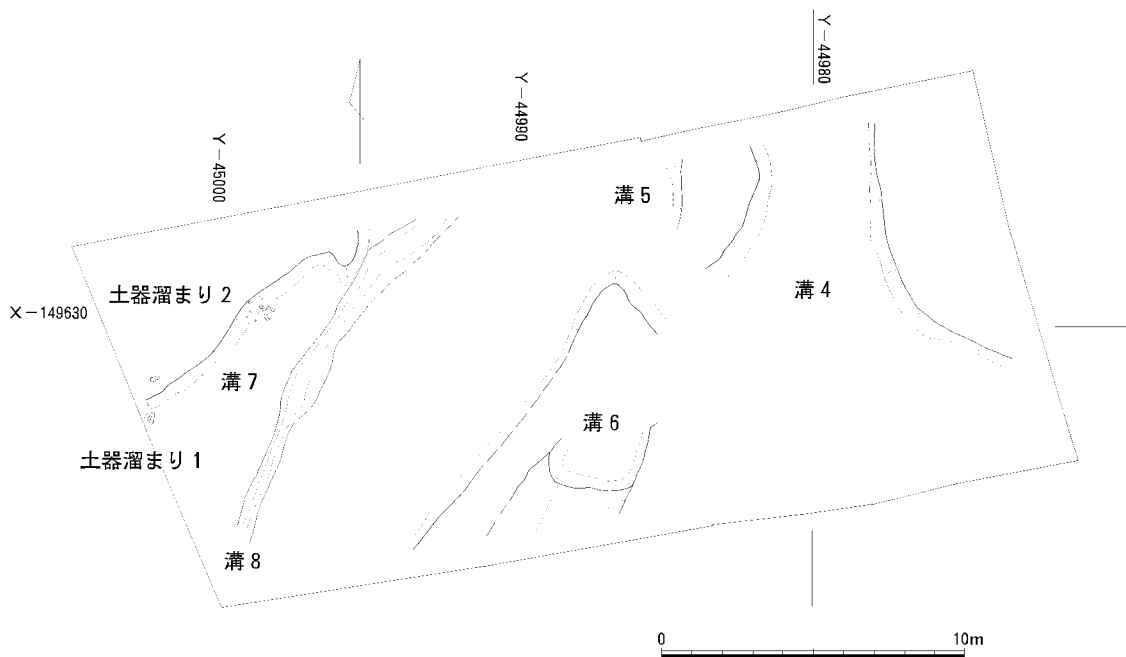
遺構に伴わない遺物 (第17図、図版9)

9~11は弥生土器とみられる。9は6区の中央トレンチから出土した甕である。口縁部を上方へ摘み上げている。器表は剥落している。10も甕で、4W区の中央トレンチから出土した。口縁部をわずかに拡張させる。11は溝6から出土した。やはり甕で、口縁部をすこし拡張させ、沈線を1条巡らせるようである。これらの土器は橙色系の色調を呈する。弥生時代後期後葉のものと考えたい。

石器を5点図示した。S1は1区出土で、打製の石鏃とみられる。舌状の茎部の形状が整わずやや異形である。サヌカイト製で、重量は1.46gを測る。縄文時代の可能性もある。S2は1区の表土下20cmまでの部分から出土した。打製の石匙で、縦長とみられる形状の半分以上を欠損している。片面は大きな剥離面をそのまま残す。サヌカイト製で、縄文時代後期以降のものか。S3は3区の南側溝から出土した。磨製の石包丁で、半分以上を欠失するが、二つの穿孔がかろうじて確認できる。刃部は湾曲し、磨滅したためか鈍い。石材は片岩系で、弥生時代前期のものか。S4は5区の中世以前の包含層(黒褐色土・灰褐色土)から出土した。サヌカイト製の打製石包丁で、半分強の残存かと推測される。短側部に挟りが入られているが、その下の角部分にも挟りが認められる。刃部は鋭く、背部には刃潰しの細かい剥離がなされる。刃部付近には珪酸分が付着する。弥生時代中期のものか。S5は1区の西側溝、地表下60cmまでの掘り下げ中に出土した。1面には線状の傷が複数あり、2面はわずかな凸面で、平滑に磨かれている。器種は不明である。石材は変成岩とみられる。(岡本)



第17図 遺構に伴わない縄文・弥生時代遺物 (1/4・1/2・1/3)



第18図 1・2区古墳時代遺構配置図 (1/250)

3 古墳時代

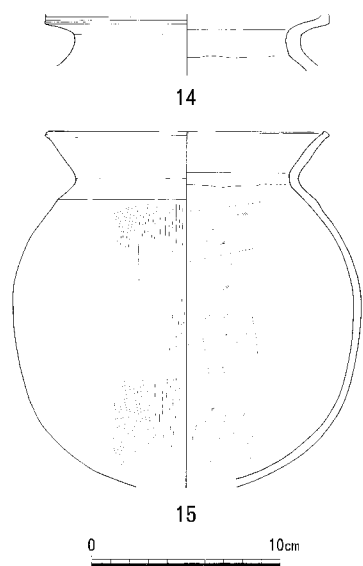
溝4 (第6・7・18図、図版2)

第7図の通り、1区の北側で弥生時代溝2上層に検出した。北から南へ緩やかに流れるが、調査区中央から東西へ広がっている。底面の標高は1.1~1mであった。出土した少量の土器片から、遺構の時期は古墳時代前期と考える。(氏平)

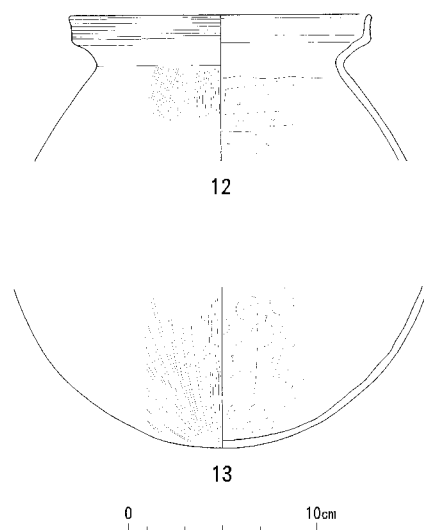
溝5 (第6・18・19図、図版3)

1区北西端で土師器を含む西側への下がりを検出した。埋

土は灰黄褐色微砂、深さは北側が深く30cmを測るが、南側は浅くなり不明瞭になっていた。長さは南北2.4mである。2区でも検出に努めたが、溝7との境が不明瞭で、溝7と一体の溝である可能性が高い。(氏平)



第20図 溝7出土遺物 (1/4)

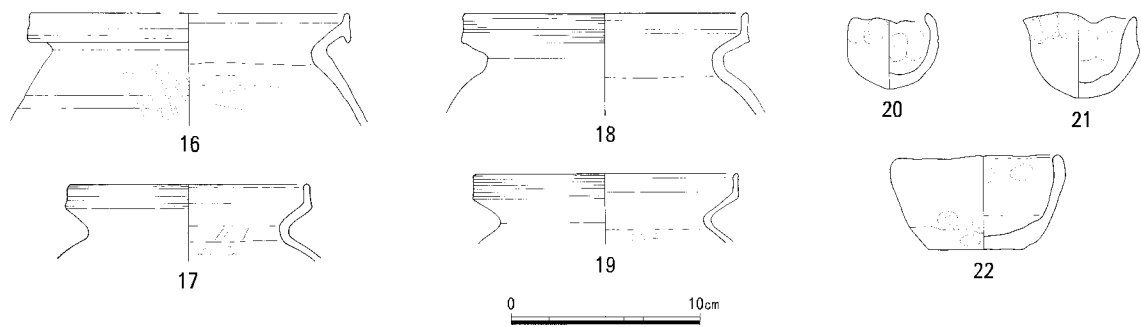


第19図 溝5出土遺物 (1/4)

12と13は古墳時代前期の甕で、同一個体かもしれない。口縁部には櫛描き沈線、肩部はハケ、底部はヘラミガキ調整。(岡本)

溝6 (第6・18図、図版2・3)

2区南東で北東から南西方向に検出した。埋土は褐色微砂で、北側が1段深くなりその部分は黒褐色微砂を呈する。深さは検出面から10~20cm、底面の標高は1.1~1.2mであった。長さは約4mである。中央より北側は古代の溝10で削られるため詳細は不明である。遺物は土師器があり、古墳時代の範疇であろう。(氏平)



第21図 溝8出土遺物 (1/4)

溝7 (第6・7・18・20図、図版2)

2区北東から南西方向に検出した。埋土はにぶい黄橙色細砂で、粘質部分が少ない砂層である。基盤層とは容易に区別できた。深さは10~20cm、底面の標高は1.15~1.2mであった。平面は北西岸は蛇行した状況、南東岸は不明瞭な状況で検出した。溝5が東岸の一部である可能性もある。(氏平)

14・15ともに甕である。14は二重口縁をもち、立ち上がり部分には櫛描き沈線が残る。15は口縁端部をわずかに肥厚させる。どちらも胴部内面はヘラケズリされ、頸部下端に稜線を認める。(岡本)

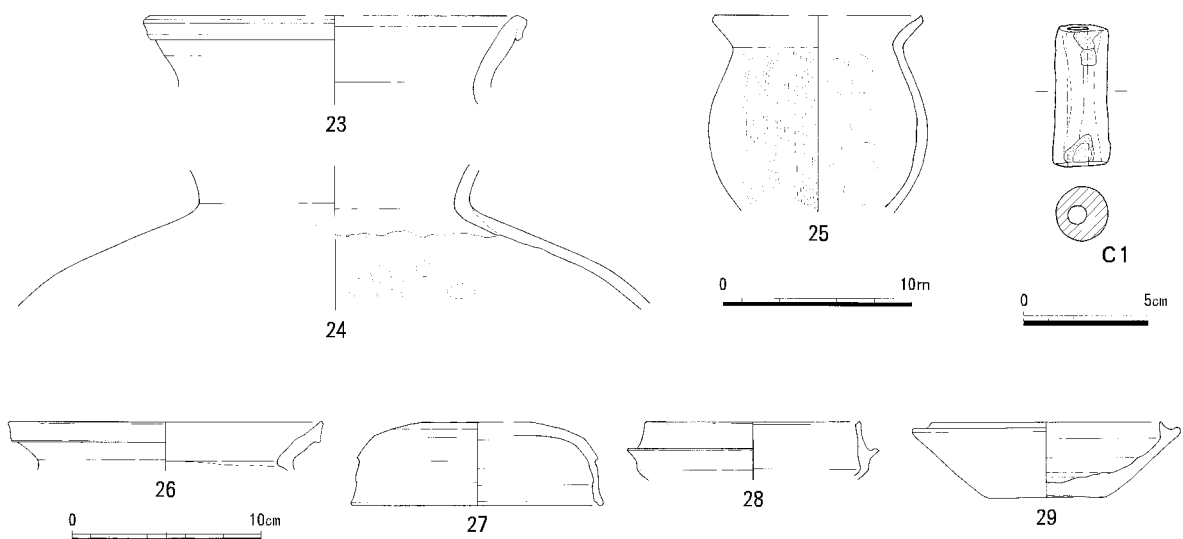
溝8 (第6・7・18・21図、図版2・9)

溝7を掘削中に、さらに砂層が残る部分として検出した。埋土は溝7と区別がつかなかった。幅は0.43~1.25m、深さは検出面から7~10cm、底面の標高はほぼ1.1mであった。底面には凹凸があり、中央付近で掘り方が不明瞭な部分があった。土器は北側で集中して検出した。(氏平)

16~19は甕、20~22は小形の手捏ね土器である。16・19~21は同じ土器集中地点から出土した。17~19は二重口縁の甕で、口縁部には櫛描き沈線を巡らせるが、16の口縁部は上下に拡張させ、凹線状の窪みが巡る。20・21はミニチュア土器で丸底だが、22の底部は平底で安定している。(岡本)

遺構に伴わない遺物 (第22図、図版9・12)

23~26は土師器、27~29は須恵器、C1は円柱状の土錘である。23は2N区、24・25・C1は1区、26は4W区、27・28は5区、29は3区から出土したもので、いずれも包含層に含まれていた。



第22図 遺構に伴わない古墳時代遺物 (1/4・1/3)

23は壺で、口縁部を折り返して強くなでつけ、突帯を形成している。24も壺で、胴部内面はヘラケズリのあとナデとオサエで調整している。頸部を胴部に差し込み、押し広げて内面に張り付けている。25は小形の甕である。内面はナデ・オサエの調整で、口縁端部を摘み上げる。26は甕の口縁部で、直立ぎみの口縁端面を作る。23～26は古墳時代前期のものである。27は杯蓋で、ほぼ1個体分がかたまって出土した。天井部下端の突起は鋭い。28は杯身で、口縁の立ち上がりは高く、端部に凹面をもつ。29も杯身で、立ち上がりはきわめて短い。27・28は5世紀後半、29は6世紀末かと考える。(岡本)

第3節 古代の遺構・遺物

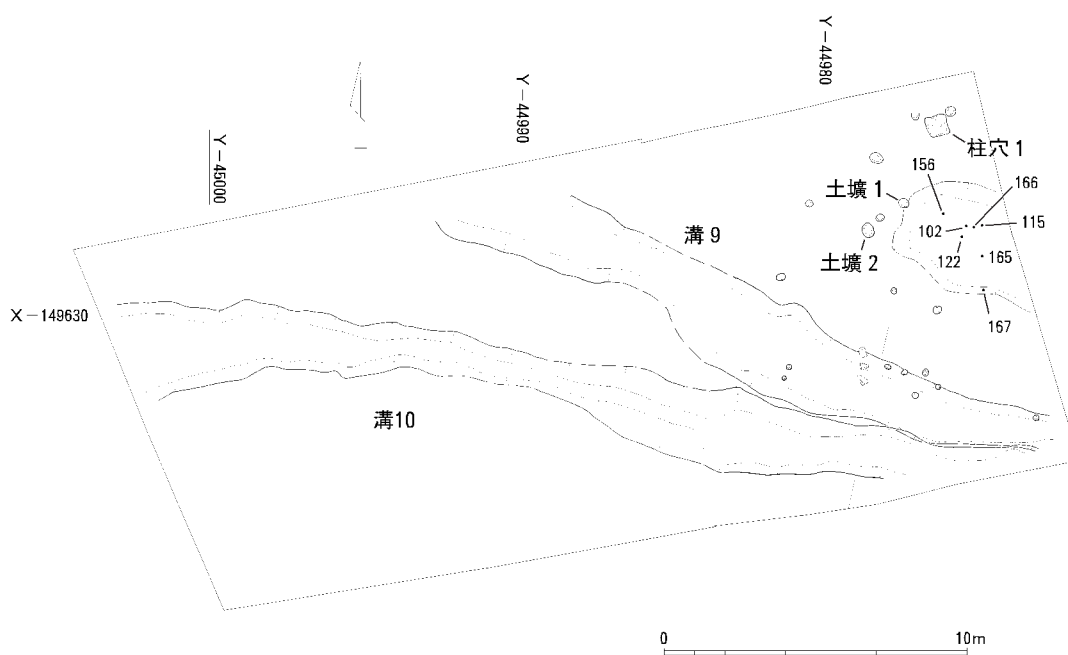
1 概要

古代は1・2区で包含層と遺構を確認した。古代包含層は上層の黒褐色微砂と下層の灰黄褐色微砂の2層に分けられる。上層は1区北東から下層を覆い、1区東端では窪地に堆積する。越州窯系青磁167・168、緑釉陶器156～166など9～10世紀の遺物が注目されるが、下限は11世紀である。下層は1区南東側に広がり、北・西へ薄くなって消失していた。下層は出土遺物より10世紀前半ごろと考えられる。遺構は平安時代の溝・土壌・柱穴がある。溝9は8～9世紀の遺物を含み、溝10が9～10世紀である。遺物からも、平断面の観察からも溝9より10が新しい。柱穴は1つだけ検出したが、建物になる根拠を示せなかった。3区より西では中世以降の包含層に遺物が散見される。(氏平)

2 各遺構

土壌1 (第6・23・24図、図版1)

1区北東に位置する土壌である。古代包含層上層である黒褐色微砂層の上部で検出した。土壌には円礫が充填されていたが、検出面付近で密集する状態であった。掘り方は30～35cmの楕円形、断面

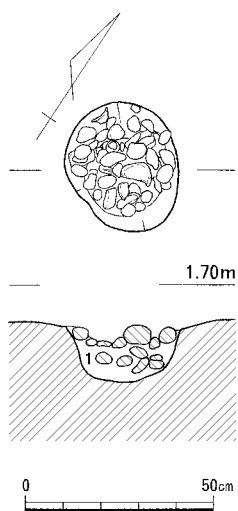


第23図 1・2区古代遺構配置図 (1/250)

はU字形で深さは15cmを測る。遺物は土器で、埋土中も含めて図示した30以外は小片であった。30は黒色土器碗で内面が黒色を呈する。口径は17cmと推定される。遺構は平安時代後半に埋没したと言えよう。(氏平)

土壌 2 (第6・23・25図、図版1)

1区北東に位置する土壌である。古代の包含層上層である黒褐色微砂層上部で検出したが、埋土は包含層と区別が困難であった。礫は検出面では隙間がないように充填していた。掘り方は37~48cmの楕円形、断面はU字形で深さは17cmを測る。遺物は小片の土器であった。遺構は土壌1に近い時期、古代に埋没したのであろう。(氏平)



1 灰黄褐色 (10YR5/3) 微砂

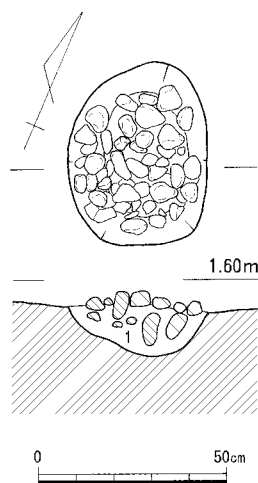
第24図 土壌 1・出土遺物 (1/20・1/4)

柱穴 1 (第6・23図、図版1)

1区北東端に位置する柱穴である。弥生時代以前の包含層の黒褐色微砂層と同じ色調の埋土である。掘り方は65cm四方の方形、断面も方形で深さは約30cmを測る。中央に径約30cmを測る円形の柱痕が存在した。遺物は小片の土器であった。遺構は平安時代の可能性が高い。(氏平)

溝 9 (第6・7・23・26~28図、巻頭図版3・図版1・9・12)

1・2区を北西から南東へ流れる溝である。古代包含層除去後に検出し、埋土は1区の古代包含層下層に似る灰黄褐色微砂である。深さは南側で最大40cmだが、北側では5cm程に浅くなる。幅は1.2~3.2mで長さは約21mを測る。底面の標高は0.97~1.30mであった。断面形は皿状を呈する。溝10と切り合い関係があり、断面でこの溝より溝10のほうが新しいことを確認した。



1 黒褐色 (10YR3/2) 粘性シルト

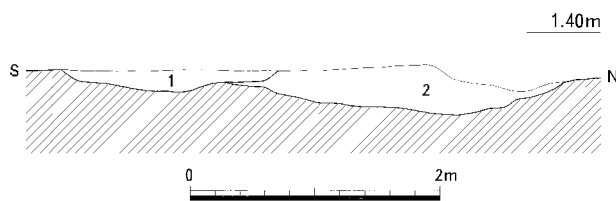
第25図 土壌 2 (1/20)

この溝には、北岸から溝中央にかけて3つの角礫を検出した部分があった。角礫はほぼ真北に1.2m、等間隔で並べられていた。角礫それぞれの大きさは30~40cm、底面は掘り方底面に接していた。(氏平)

溝9からはかなりの遺物が出土した。土器の他にも瓦・土馬・土錘・円盤状土製品・石鍋がみられたが、遺物の年代幅がかなりある。第7図の土層図によると溝9の上には中世の包含層が接し、2N区での溝9はきわめて浅い。石鍋S6や円盤状土製品C6~9は2N区出土であり、中世包含層から

混入した可能性が考えられる。ほかに2N区出土のものでは31・44~46・49~51・53がある。

31~39は須恵器である。31~33は宝珠形の摘みがついた蓋で、口縁部は屈折せず、下方に摘み出している。34・35は杯で、断面方形の短い高台が底面の周縁に付けられる。36は水瓶のような細頸壺で、肩部に櫛描き波状文を飾る。37は壺の底部、38・39は甕の胴部片である。

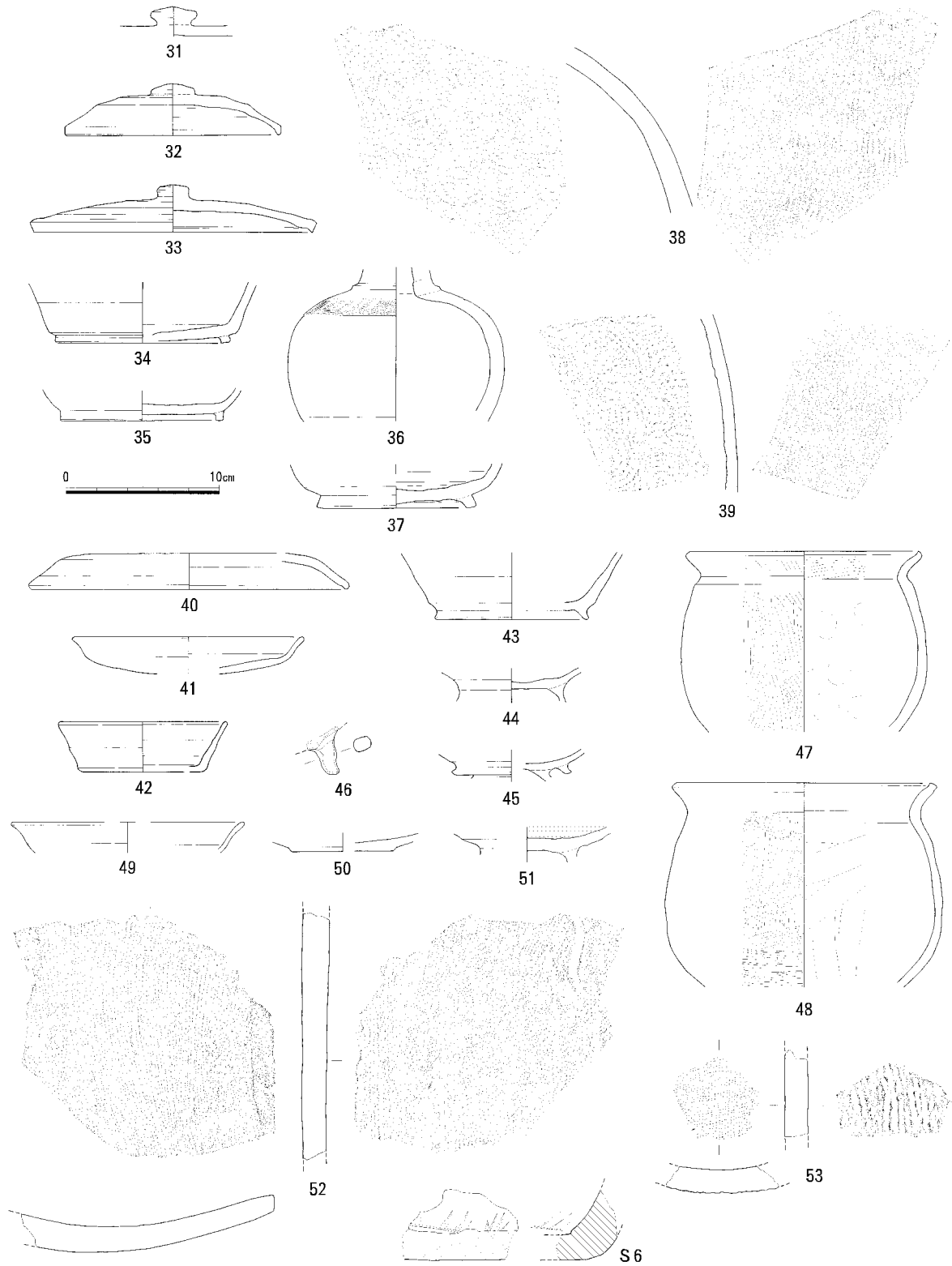


1 灰黄褐色 (10YR5/2) 細砂 (溝10埋上)
2 灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂 (溝9埋上)

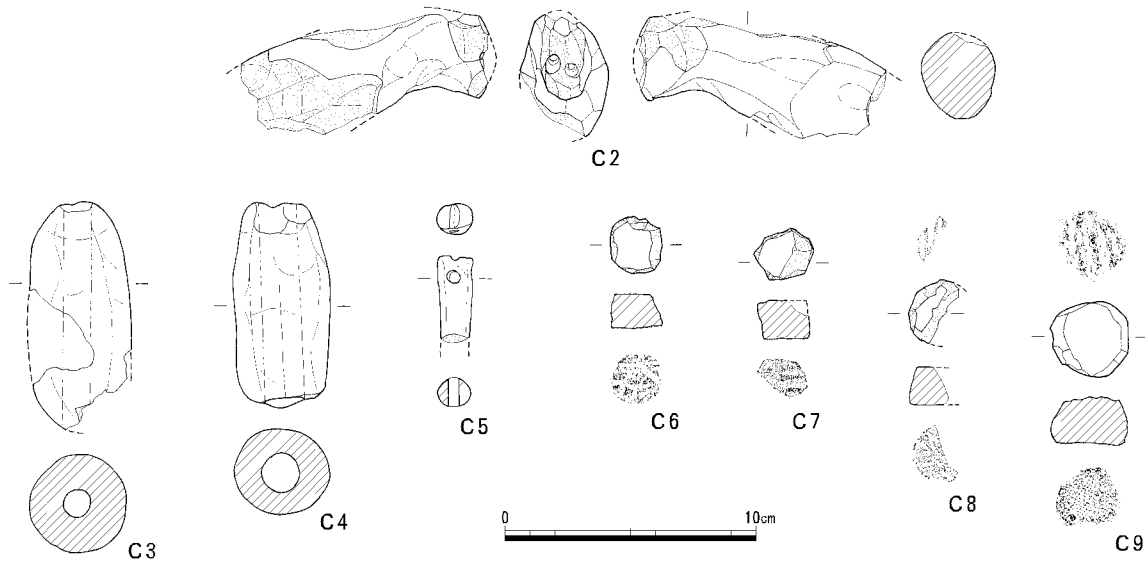
第26図 溝 9・10 (1/60)

40~48は土師器である。40は皿の可能性もあるが、蓋と考える。41は皿、42は杯、43~45は椀である。45は体部の下端に突帯をもつ。46は精良な胎土で、三脚盤の脚の可能性もある。47・48は下膨れの胴部をもつ甕で、口縁端を上方へ拡張させる。内面はヘラケズリの後にナデている。

49は緑釉陶器の椀、50は緑釉陶器の皿で、素地は須恵質である。49は京都府篠栗産で、10世紀前半、



第27図 溝9出土遺物(1)(1/4)



第28図 溝9出土遺物（2）（1/3）

50は洛北窯産で、9世紀前半とされる。図示していないが、愛知県の東海産かとみられる須恵質緑釉片も出土し、9世紀後半から10世紀初頭とされる。51は黒色土器碗で内面が黒色である。

52・53は平瓦の破片で、凸面は縄目タタキである。52には粘土板の糸引きコビキ痕が明瞭に残る。

S 6は滑石製の石鍋の底部で、線状の傷が内面に認められるが、製作時のものかは疑問である。

C 2は土師質の土馬である。破損が著しいが、竹管状工具の刺突による目の存在からかろうじて馬とわかる。たてがみの表現はあるようだが、鞍や轡・引き手はみられず、裸馬のようである。

C 3～5は土錘で、C 3・4は両端のすぼまった土管状、C 5は円柱の両端に穿孔し、木口に糸架けの溝を刻む。C 6～9は円盤状土製品で、C 6・9は平瓦、C 7・8は須恵器片の加工である。

溝9から出土した遺物の年代をみると、8世紀後葉から9世紀前半にかけてのものが多くを占めるが、それ以前や、10世紀前半のもの、さらには中世遺物の混入も認められるようである。（岡本）
溝10（第6・8・23・26・29図、図版1・10・12）

1・2区を北西から南東へ流れる溝である。溝9と同じく古代包含層除去後に検出し、埋土は1区の包含層下層に似る灰黄褐色微砂である。深さは南側では20cm程度だが、北側では3cm程に浅くなる。幅は1.7～2.8mで、長さは約30mを測る。底面の標高は1～1.30mであった。断面形は皿状を呈する。溝9と切り合い関係があり、この溝より溝9のほうが古い。（氏平）

第29図は溝10から出土した遺物である。54～58は須恵器、59～65・68は土師器、69～71は瓦である。土錘や円盤状土製品も出土している。遺物は集中して出土することなく、各地区から等しく出土した。56・60・63・69は2 S区出土、58・61・70・71は2 N区出土、それ以外は1区出土である。

54は長頸瓶と考えられる。胴部下半外面は手持ちのヘラケズリがなされる。肩部には自然釉が多量にかかり、緑色を呈する。55は杯で、底部外面は未調整である。56は高杯、57・58は甕である。58の口縁部は肥厚させ、外面に低い突帯面を作る。頸部には凹線状の窪みが巡る。

59～65は高台をもつ土師器碗である。高台は斜め外方へ短くのびるが、59はやや高めである。65の底面は平らだが、60などは湾曲している。大小の差があり、65の高台径は74mm、61は62mmを測る。

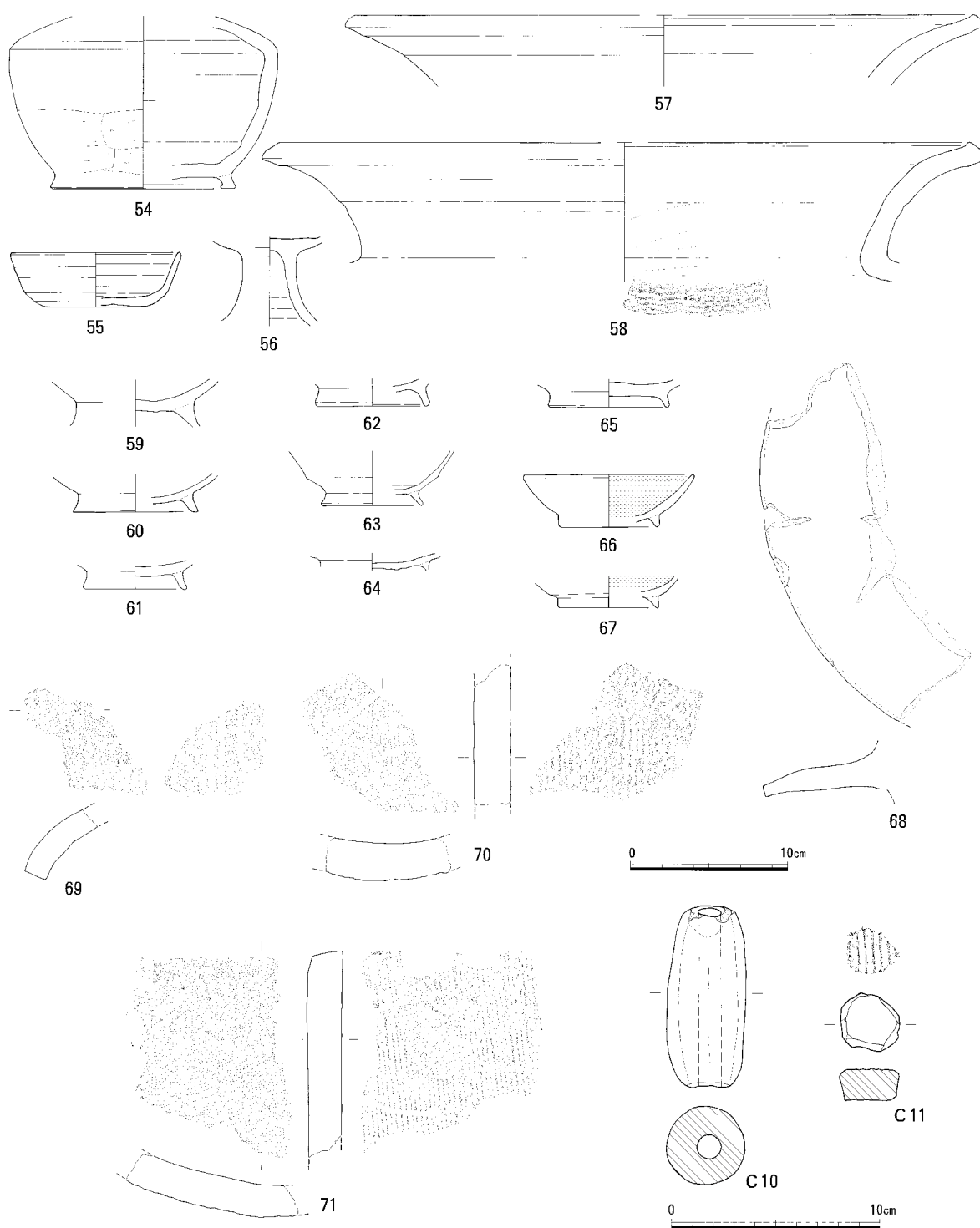
66・67は小形の黒色土器で、内面は炭素が吸着し黒色を呈する。高台は断面が三角形をしている。底面は土師器碗と同じく、湾曲するものと平坦なものがあるようである。口径は66で108mmである。

68はカマドの破片で、焚き口の上部に付くひさしの一部である。被熱による赤色変化が認められる。

69は丸瓦で、凸面は剥落している。70・71は平瓦である。凸面はともに縄目タタキで、内面には粘土板を糸で引き切った痕跡が明瞭に残っている。色調は橙色を呈するが、焼成は良好である。

C10は両端のすぼまった土管状の土錘である。完形で、全長87mm、重量は136.8gを測る。C11は須恵器片を加工した円盤状土製品で、片面には平行タタキ目を残している。

溝10出土遺物の年代もかなり幅をもっているが、中心は9世紀から10世紀前半とみられる。(岡本)



第29図 溝10出土遺物 (1/4・1/3)

3 包含層遺物

古代包含層下層出土遺物（第8・30図、巻頭図版3・図版10・12）

1区では第8図にみられるように、厚い古代の包含層が堆積していた。古代の包含層は色調から分別され、灰黄褐色～灰褐色微砂層が1区の南東部を中心に堆積し、その層を一部覆いながら、北西部に向かって黒褐色微砂が広がっていた。前者を古代包含層下層、後者を古代包含層上層と呼ぶ。

第30図に示した遺物が古代包含層下層から出土したもののだが、80と84は溝8に混入していたもので、層位関係からここに入れている。土器のほかに、鉄器や土錘、羽口片や基石なども出土している。

72～85は須恵器である。72は蓋で、天井部は未調整である。73～76は高杯で、脚端部を拡張させ凹面を形成する。77は把手付きの鉢で、把手の断面は方形に近い。78・79は蓋で、扁平な宝珠形の摘みが付く。80～83は杯である。80は底面の周縁を回転へら切りし、中心は未調整である。81・83の底面はへラケズリだが、82の底面は未調整である。84は甕の口縁で、明瞭な端面をもつ。外面に櫛描き波状文を飾り、下端に沈線を1条巡らせる。85は碗の底部で、底面は回転糸切り痕が明らかである。

86～92は土師器である。86は乳頭状の摘みが付いた蓋である。87は把手の取り付けられた甕で、把手は舌状で平べったい。88～91は杯である。88は内面に赤色顔料の塗布が認められる。88～91の底部外面は、いずれも周縁を回転へら切りし、中心部は指頭による押圧調整をした、いわゆる「底部押圧技法」による「回転台土師器」（武田恭彰「備中に於ける律令期土器様相の諸問題」『古代吉備』第18集 古代吉備研究会 1996年）である。92は小形の碗で、底部内面は湾曲して深くなっている。

93・94は緑釉陶器碗である。素地は須恵質で、釉薬は薄くかけられている。94は京都府の洛西窯か篠窯産とみられ、9世紀後半から10世紀前半のものとする。95は中国から輸入された白磁碗で、口縁部外面を肥厚させた玉縁をもつ。玉縁はあまり大形ではない。11世紀のものと考えられている。

M1～4は鉄製品である。M1～3は小形の釘とみられる。断面は方形で、幅が5～7mmある。M1とM2は頭部が叩き潰されたように見える。M4は錆化が激しいが、刀子の可能性が考えられる。茎と刀身部との間に段をもつようである。

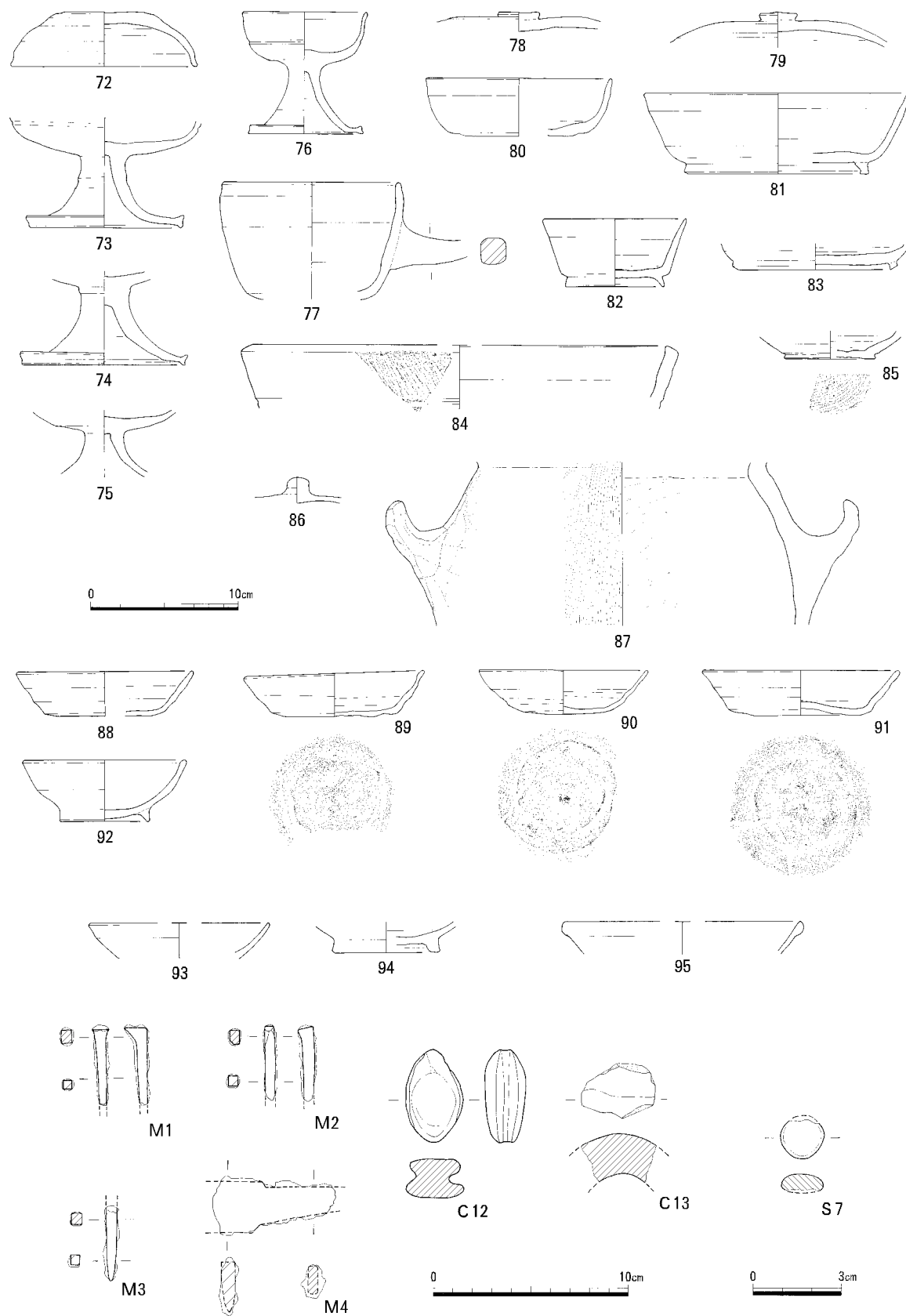
C12は楕円形の扁平な土錘で、周囲に糸を巻く溝が巡らされている。重量は25.9gを測る。C13は鞆の羽口片である。上図の一点鎖線から下は灰黒色を呈している。

S7は基石状の石英の加工品である。直径15mm、厚さ7mm、重量は1.52gである。平面形はほぼ円形で、断面形は長楕円形を呈する。基石とする説が強いが、祭祀具の可能性も指摘される（田中央生・林健亮「岩屋遺跡の玉作について」『岩屋遺跡・平床Ⅱ遺跡』島根県教育委員会 2001年）。

古代包含層下層から出土した遺物の年代をみると、7世紀から8世紀のものが多くを占めるようであるが、「底部押圧技法」の土師器碗や緑釉陶器碗などは9世紀後半から10世紀前半のものである。これらの土師器碗に完形に近いものが多いことや、溝10の上部に位置することからすれば、下層の年代は10世紀前半頃と考えられる。11世紀代の85や95は上層からの混入の可能性が高い。（岡本）

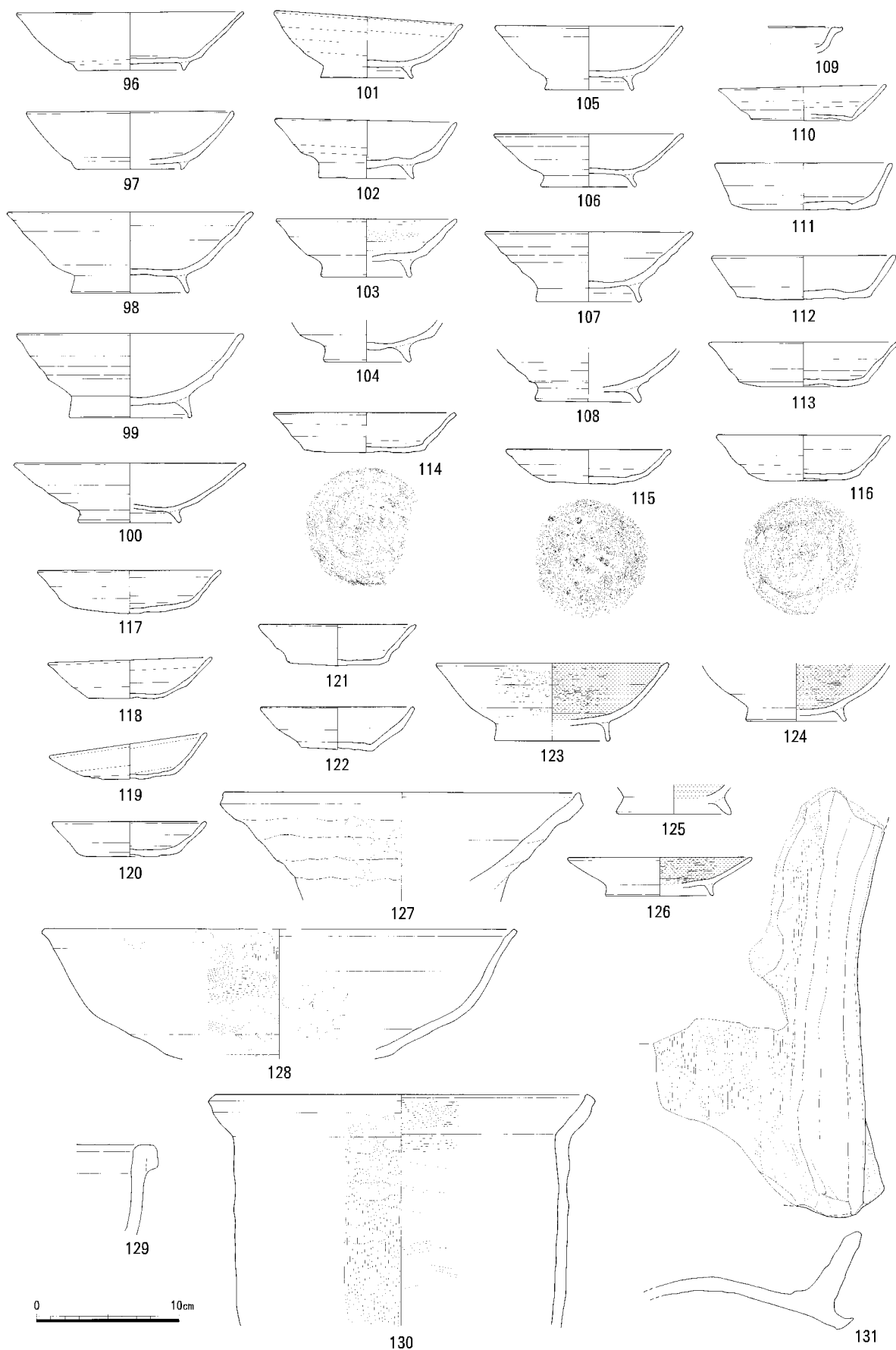
古代包含層上層出土遺物（第7・8・23・31・32図、巻頭図版2・3・図版11・12）

古代包含層上層は黒褐色微砂層で、1区の北東部を中心に広がっていた。第8図では古代包含層下層の上に斜面堆積しているように見えるが、実際は第23図に示したように、調査区の東壁にそって浅い窪地があり、そこに堆積した土と考えることができる。この窪地からは第23図に点で示した地点から完形に近い大形破片がいくつか出土し、中国製の越州窯系青磁碗も含まれていた。

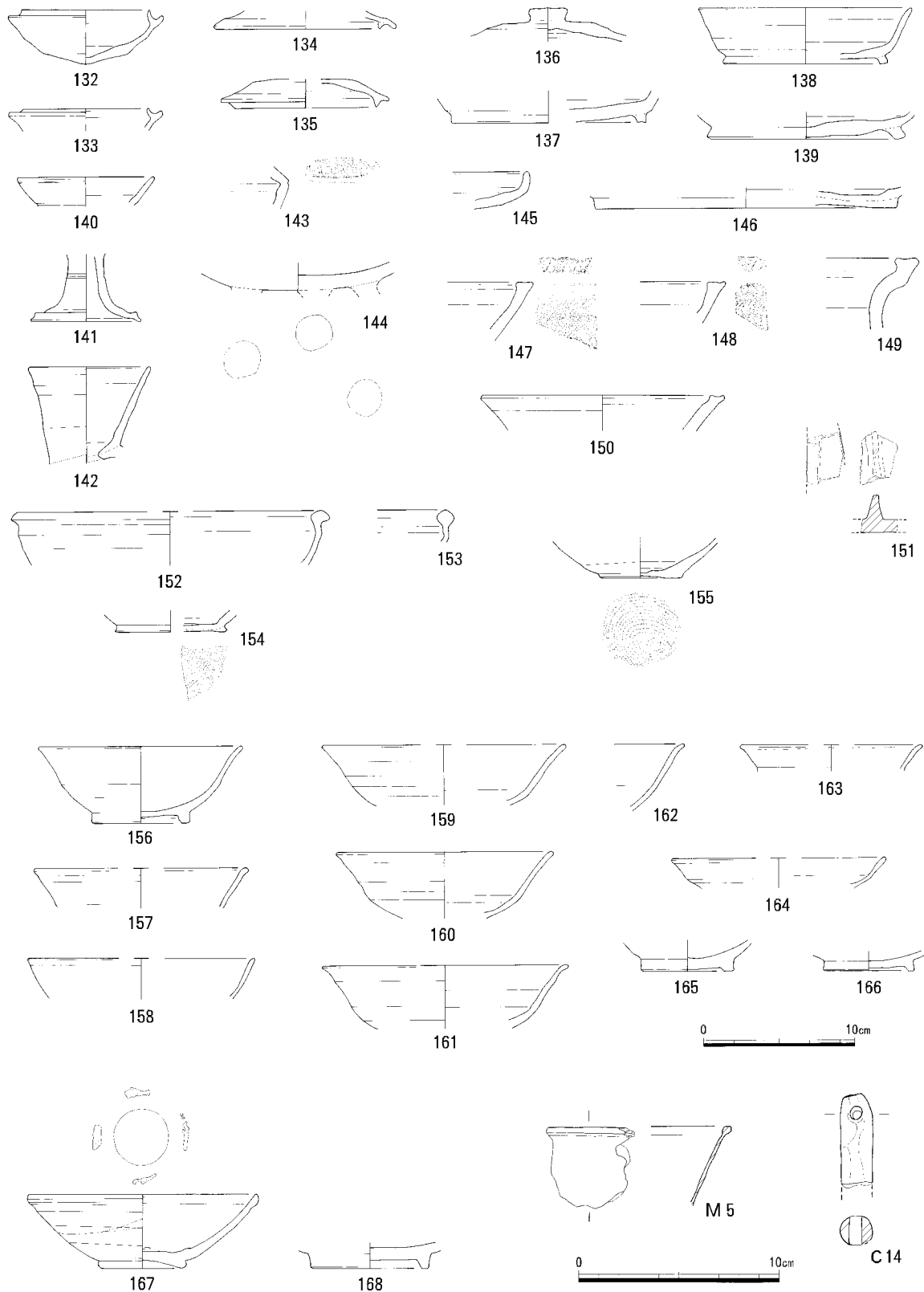


第30図 古代包含層下層出土遺物 (1/4・1/3・1/2)

第31図は土師器と黒色土器である。96～108は土師器椀、109～122は土師器杯、123～125は黒色土器椀、126は黒色土器皿、127～129は土師器鉢、130は土師器甕、131は土師器カマドである。



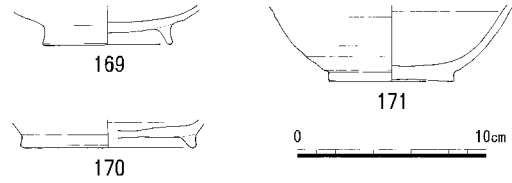
第31図 古代包含層上層出土遺物（1）（1/4）



第32図 古代包含層上層出土遺物（2）（1/4・1/3）

土師器碗は体部や高台の形状により変化が大きく、それらの組み合わせからいくつかの類型化が可能である。96・97は直線的な体部と広く平坦な底面をもち、高台は低い。9世紀代のものとする。102～104は底部と体部の境が屈折的で底面は平坦に近い。武田恭彰の古代後期Ⅱ a 期～Ⅱ b 期（武田恭彰「林崎遺跡出土の古代土器について」『奥坂遺跡群』総社市埋蔵文化財発掘調査報告15 総社市

教育委員会（1999年）あたりに対応するようで、9世紀後半から10世紀前半とされる。98～101・105・106は施釉陶器を模倣した椀で、大小の別があり、また、底面が窪む深椀と平坦に近い浅椀に分けられる。これらは武田古代後期Ⅲ a期、10世紀第3四半期とされよう。107・108は直線的な体部にやや高めの高台をもつ。施釉陶器の模倣からはずれた器形で、武田古代後期Ⅲ b期の後半とみられ、11世紀初頭頃かと考える。



第33図 3～5区出土古代遺物（1/4）

土師器杯も器形の変化が大きい。109は丹塗りで、8世紀代のものである。111～122は底部の周縁を回転ヘラ切りし、中央部分には指頭圧痕を加える「底部押圧技法」によっている。111のように体部と底部の境が屈折的なものから、117のように体部と底部の境が丸くあいまいになってくるもの、さらには121のように底部が突出して平高台に近くなるものまで認められる。武田古代後期Ⅱ期の全般にわたり、9世紀の第2四半期から10世紀の第2四半期に及んでいる。

黒色土器は内黒で、椀は深椀形を呈し10世紀前半、皿は9世紀後半のものかと考えられる。

第32図は須恵器と緑釉陶器、それに越州窯系青磁で、銅器と土錘も各1点出土している。

132～155は須恵器である。132・133は杯身、134～136は蓋、137～139は杯、140は臙、141は高杯、142は平瓶、143は壺、144は脚付壺、145は皿、146は盤、147～150は甕、151は風字硯、152～154は鉢、155は椀とみられる。143の壺の肩部には櫛状工具で列点文が飾られる。144は3脚の存在が確認され、配置から5脚かと推定される。147と148は同一個体の可能性がある。端面に刺突文を飾ることから口縁部とみられ、外面にはヘラで斜線文や斜格子文を施す。132～135・140～144は7世紀のもの、136～146・149・150は8世紀のものと考えたい。147・148の年代はよくわからない。

151は風字硯の中央にある区画突帯かとみられ、その両側の硯面は使用によって滑らかになっている。9世紀後半のものか。152～154は京都府篠窯産の鉢である。前山3号窯期のもので、9世紀後葉から10世紀初頭とされる（石井清司「篠窯の実年代」『京都府埋蔵文化財論集』第4集 京都府埋蔵文化財センター 2001年）。155は底部が回転糸切りで、11世紀前半のものと考えられる。

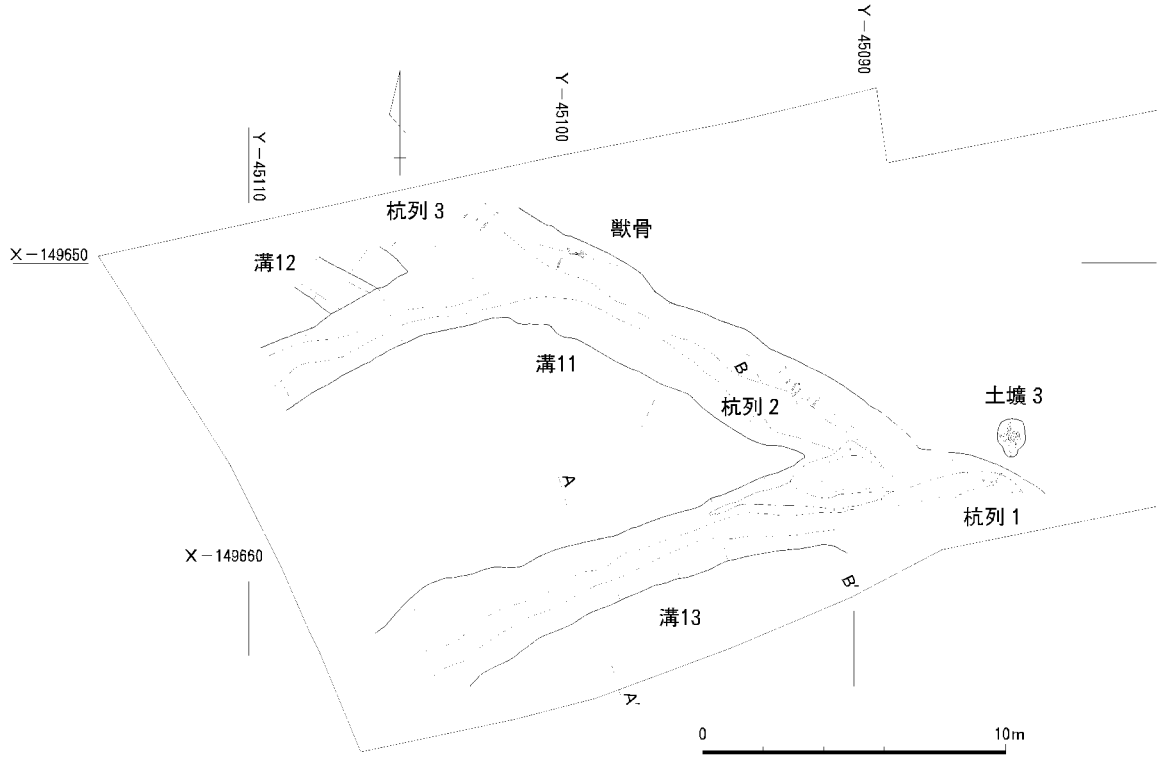
156～166は緑釉陶器である。いずれも素地は須恵質で、削り出し高台をもつ。ほとんど椀で、164のみ皿とみられる。鑑定によれば、156・159～162・164～166はいずれも京都府産で、156・165を除き、篠窯産か、その可能性が高いとされる。年代としては10世紀の前半、前山2・3号窯期である。

167・168は越州窯系青磁碗である。167は上げ底の円盤状高台にわずかに内湾する体部をもち、口縁部はかすかに玉縁状に肥厚する。外面の体部下半から底部にかけては露胎で、施釉部分は化粧土をかけた上で釉薬を塗る。底部内面には融着を防ぐ砂目が4カ所認められる。施釉は薄く、風化のためかかなり剥離が認められる。10世紀前半のものと考えられる。168も外面は露胎で、釉垂れがみられる。

M5は銅製品である。扁平だがわずかに湾曲する。口縁部らしい肥厚がみられ、上端は平面となる。あるいは椀のような製品か。C14は両端に穿孔をもつ丸棒状の土錘である。（岡本）

3～5区出土古代遺物（第33図、巻頭図版3）

169は土師器椀で、5区の中世包含層から出土した。底部外面は押圧調整か。170は須恵器杯、171は緑釉陶器椀で、ともに3区の中世包含層から出土した。170は8世紀後葉のものか。171は素地が須恵質で、平高台の器形をもつ。京都府洛北窯産の可能性が高く、9世紀中頃とされる。なお、4 E区の中・近世包含層から滋賀県の近江窯産の緑釉陶器片が出土し、10世紀後半とされる。（岡本）



第34図 4区西端・5区中世遺構配置図 (1/250)

第4節 中世・近世の遺構・遺物

1 概要

中世の遺構は4区から5区にかけて北西から南東方向の溝群と土壌を確認した。また、2区では南北方向の溝状耕作痕、3区では東西・北東から南西方向の足跡状耕作痕を検出した。

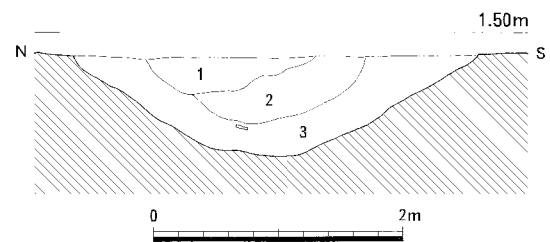
近世の遺構は5区で水田・溝・耕作痕を確認している。溝14は現在の用排水路と重複し、水田用水路であろう。水田1は溝13上の窪地を水田化したもので、現在の水田区画と異なっている。水田北側に東西方向の溝状耕作痕を検出している。さらに、6区と確認調査トレンチで表土直下に近世以降の砂層を確認した。砂層の厚さは30~50cmにわたり、足守川に近くなるに従い厚くなる。この砂層は造成のための砂層であろう。
(氏平)

2 中世

溝11 (第11・12・34~40図、巻頭図版1、図版6~8・13・14)

5区から4区西端へかけて、北西から南東へ流れる溝である。中世包含層下で検出した。

この溝には3か所の切り合い部分が存在する。溝12

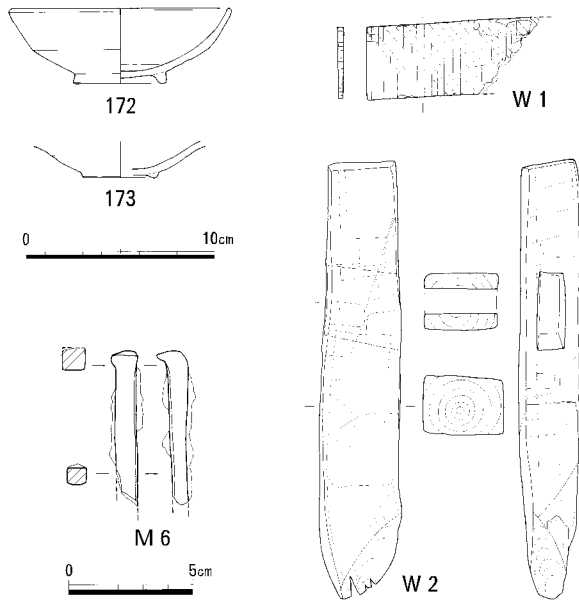


- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 微砂
- 2 黄褐色 (10YR5/6)・灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土塊状混合土
- 3 におい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土

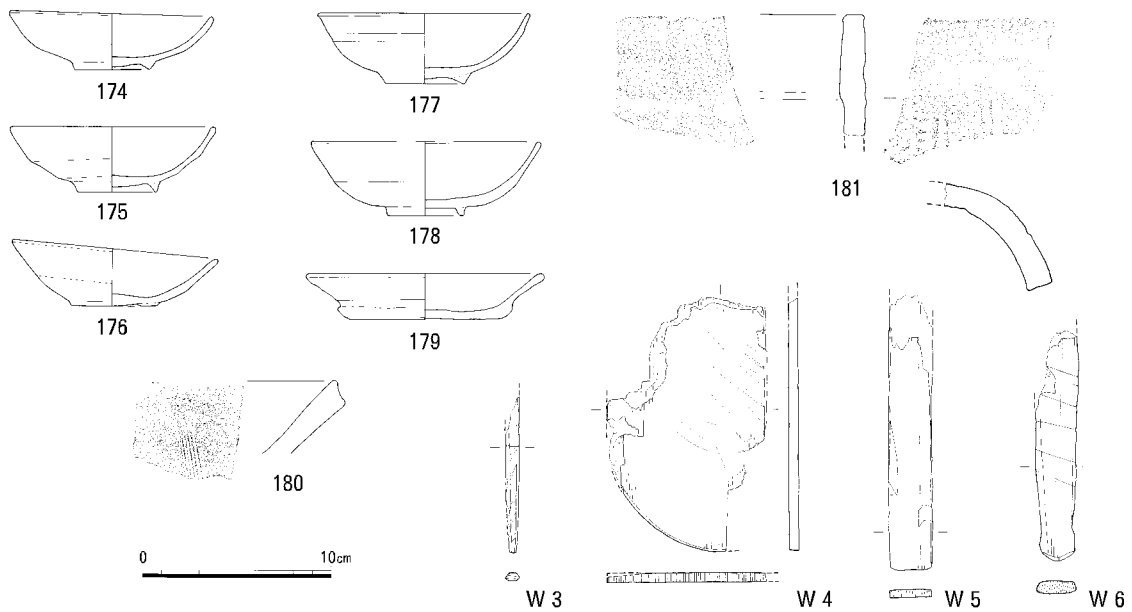
第35図 溝11 (1/60)

と切り合いがある部分では、平面で溝12より新しいことを確認した。5区西側で確認した合流部分では、当初第35図の第2層までは平面で北側より西側が新しいと認識し掘削した。しかし最下層では北・西側のどちらが新しいか判別できず、どちらも溝11として扱っている。溝13との切り合いでは、平面で不明瞭だったため土層で確認したところ溝13の方が新しいことがわかった。

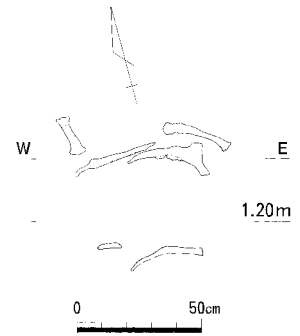
埋土は3層を認識した。大きく上層の第1・2層と下層の第3層に分かれる。第1・2層は西端から溝12との合流地点を經由し溝13との合流



第37図 溝11上層出土遺物 (1/4・1/3)



第38図 溝11下層出土遺物 (1/4)

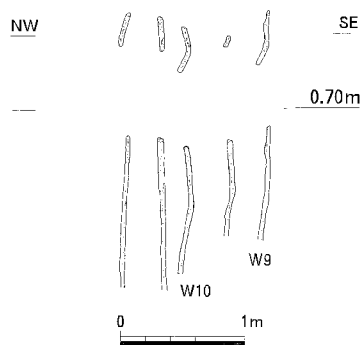


第36図 溝11上層獣骨
出土状態 (1/30)

地点まで認められる。第42図下では第4・5層に相当する。第35図第1・2層は調査区北壁や杭列3周辺では確認できない。これらは溝11の最終埋土で、その際には北側部分は埋没していたのであろう。

埋土中からは土師器・須恵器・木器の他に獣骨が出土している。第36図で示したのは下顎骨などが集中した部分である。下顎骨が東西に分かれて出土していることから原位置は保っていない可能性が高い。歯の形状からウシであろう。

杭列は2か所確認した。杭列3は杭列2と同様に自然木を検出面から深さ60cm程度まで差し込んでいる。本数は6本、岸に沿って2列に並ぶようだ。杭列2は溝13との合流地点付近で



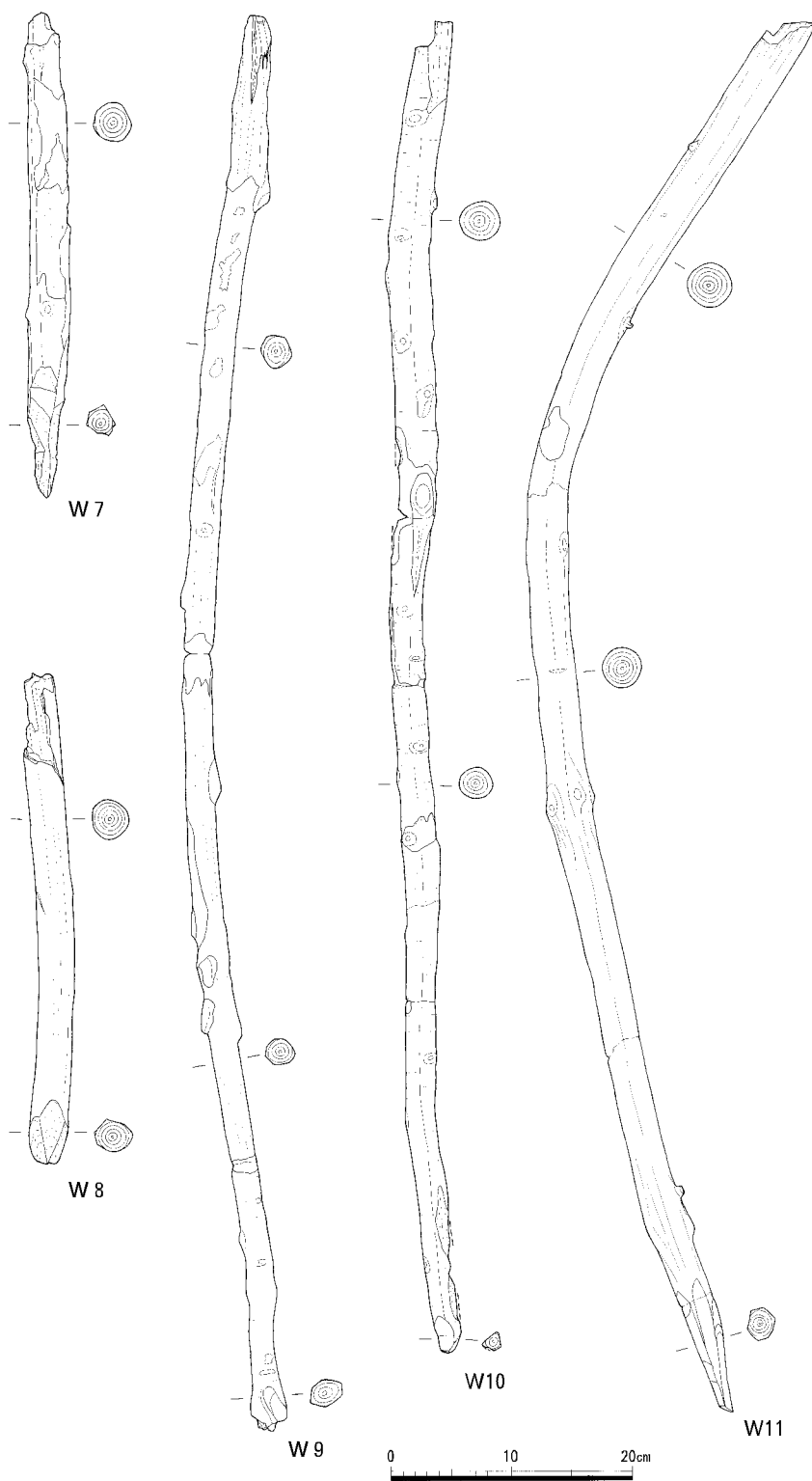
第39図 溝11杭列2平
・立面図 (1/60)

り下げた (図版6-1)。その後さらに第3層の存在が明らかになり、最終的には第34図のような形となった。この第2層までを上層とし、そこから出土した遺物を第37図に示した。第3層は下層とし、第38図に出土遺物を掲載している。

上層から出土した遺物には土師器碗 (172・173) と曲げ物の側板 (W1)、加工木を転用した杭 (W2)、鉄釘 (M6) がある。土師器碗は白色の高台付碗で、いわゆる吉備系土師器碗 (早島式土器) と呼ばれるものだが、高台は低く、173などは張り付け突帯状にひしゃげ、その終末期的な形態を示している。13世紀の末期から14世紀の初頭頃であろうか。W1は縦方向と斜め方向に切れ目が細かく入り、曲げやすくされている。W2は橢穴のあ

検出し、本数は6本、岸に沿って1列に並ぶ。樹皮付きの自然木をほぼ垂直に差し込み、先端は海拔高-0.5mに達する。(氏平)

溝11は、発掘開始時には第35図の第2層までの埋土が杭列3のあたりから西へほぼ直線的に検出されたため、まずこの部分を掘

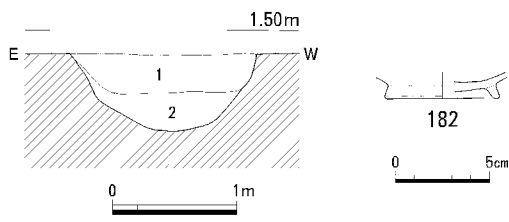


第40図 溝11杭列2・3出土杭 (1/6)

る角材を転用した杭で側面には手斧の痕跡が残る。M 6 は幅 8 mm の角釘で、頭部は叩き潰されている。

下層からは土師器の椀 (174~178) と杯 (179)、備前焼のすり鉢 (180)、丸瓦 (181)、木製品 (W 3~6) が出土した。椀は吉備系土師器椀で、高台の簡略化が進み、上層との年代差はほとんど認められない。杯は外底面の周縁を回転ヘラ切りし、古代最終末の11世紀前半のものか。すり鉢は須恵質で、口縁部はわずかに厚みを増す。13世紀代のものと考える。丸瓦は須恵質で、凸面に格子目のタタキ痕跡を残す。端からすこし下に段があるが、行基葺きの変形だろう。奈良時代以前のものか。木製品のうち、W 3 は箸にもみえるが、糸を巻き付けた痕跡が残る。W 4 は曲げ物の底板、W 5 は札だが、墨書はみられない。W 6 は端を膨らませた籠状だが、糸を巻いた痕が残る。用途は不明。(岡本)

溝12 (第11・12・34・41図、図版6・8)



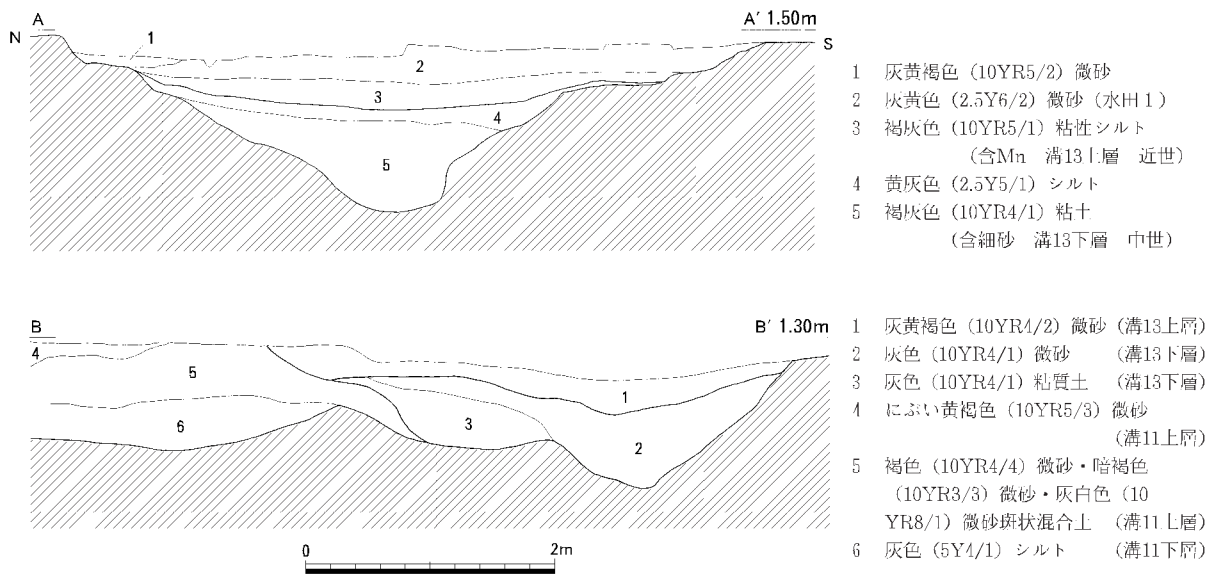
- 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 微砂
- 2 褐灰色 (10YR4/1) 微砂混じり粘土

第41図 溝12・出土遺物 (1/60・1/4)

5区北西端を北から南へ流れる溝である。中世包含層下で検出した。平面で溝11に切られることを確認した。埋土は黒褐色土がブロック状に混ざる上層と粘土質の下層に分かれる。平断面図では明瞭でないが、溝の底中央は幅20cmの範囲でさらにもう1段窪んでいる。182は吉備系土師器椀で、高台は短いながらも歪んではいない。溝11から出土した土師器椀よりは古い傾向を示している。(氏平・岡本)

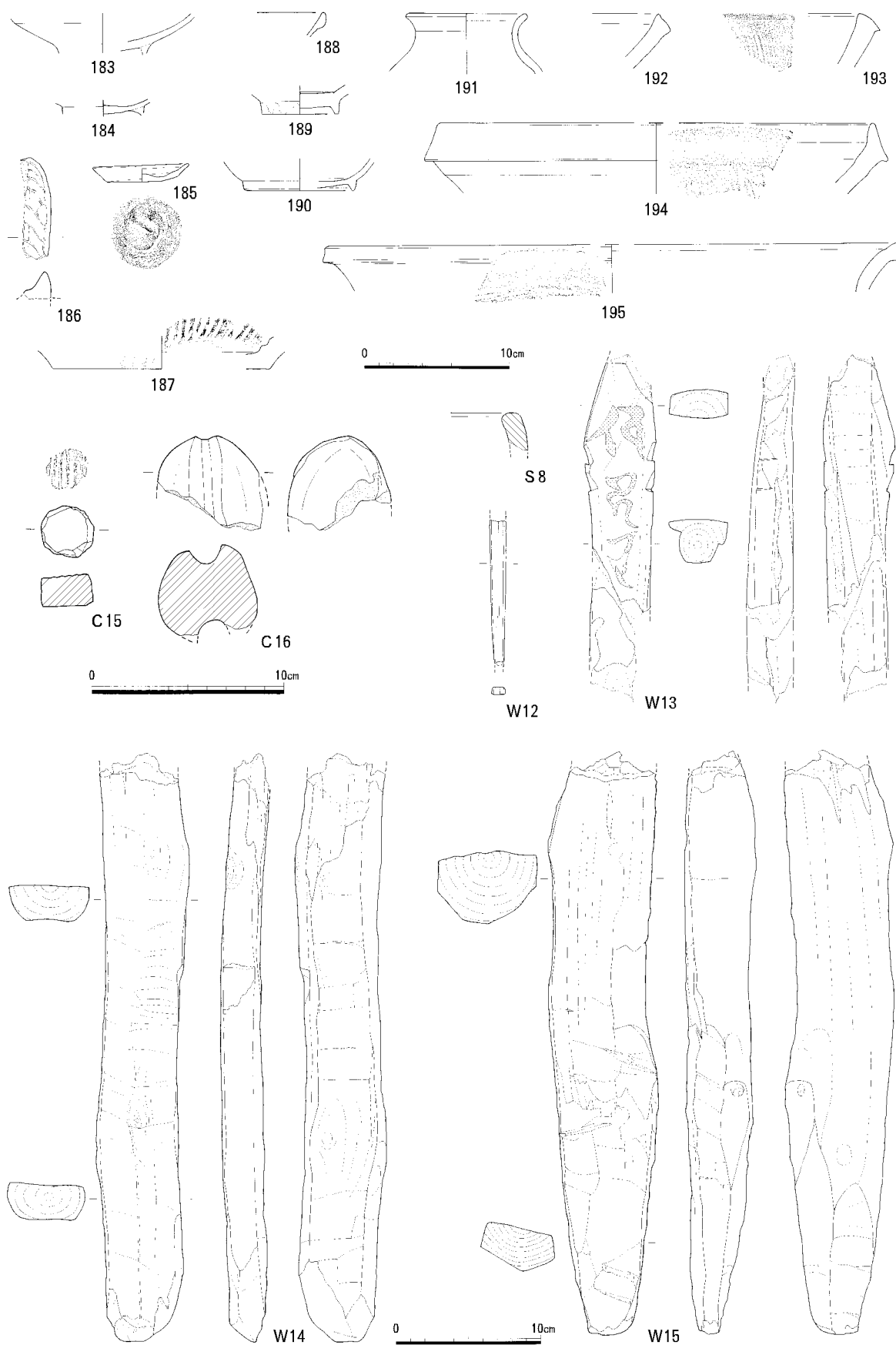
溝13 (第11・34・42~45図、巻頭図版1、図版5~7・12・15・16)

5区南側から4区南西端へかけて、西から東へ流れる溝である。近世水田1下で検出した。溝11との切り合いは、平面で不明瞭だったため土層で確認したところ、第42図下で示した通り溝13の方が新しいことがわかった。埋土は大きく上層の黄灰色系微砂層と下層の灰色シルト~粘土に分かれる。下層は粘質が強く、掘削が困難であった。断面はV字状を呈し、特に溝11との合流地点より西側の壁面はかなり急傾斜である。底面の海拔高はほぼ0mで東西の高低差はほとんどない。底面の形は、溝11との合流地点より西側は単純であるが、合流地点周辺は段や凹凸が多い。



- 1 灰黄褐色 (10YR5/2) 微砂
- 2 灰黄色 (2.5Y6/2) 微砂 (水田1)
- 3 褐灰色 (10YR5/1) 粘性シルト (含Mn 溝13上層 近世)
- 4 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト
- 5 褐灰色 (10YR4/1) 粘土 (含細砂 溝13下層 中世)
- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 微砂 (溝13上層)
- 2 灰色 (10YR4/1) 微砂 (溝13下層)
- 3 灰色 (10YR4/1) 粘質土 (溝13下層)
- 4 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 微砂 (溝11上層)
- 5 褐色 (10YR4/4) 微砂・暗褐色 (10YR3/3) 微砂・灰白色 (10YR8/1) 微砂斑状混合土 (溝11上層)
- 6 灰色 (5Y4/1) シルト (溝11下層)

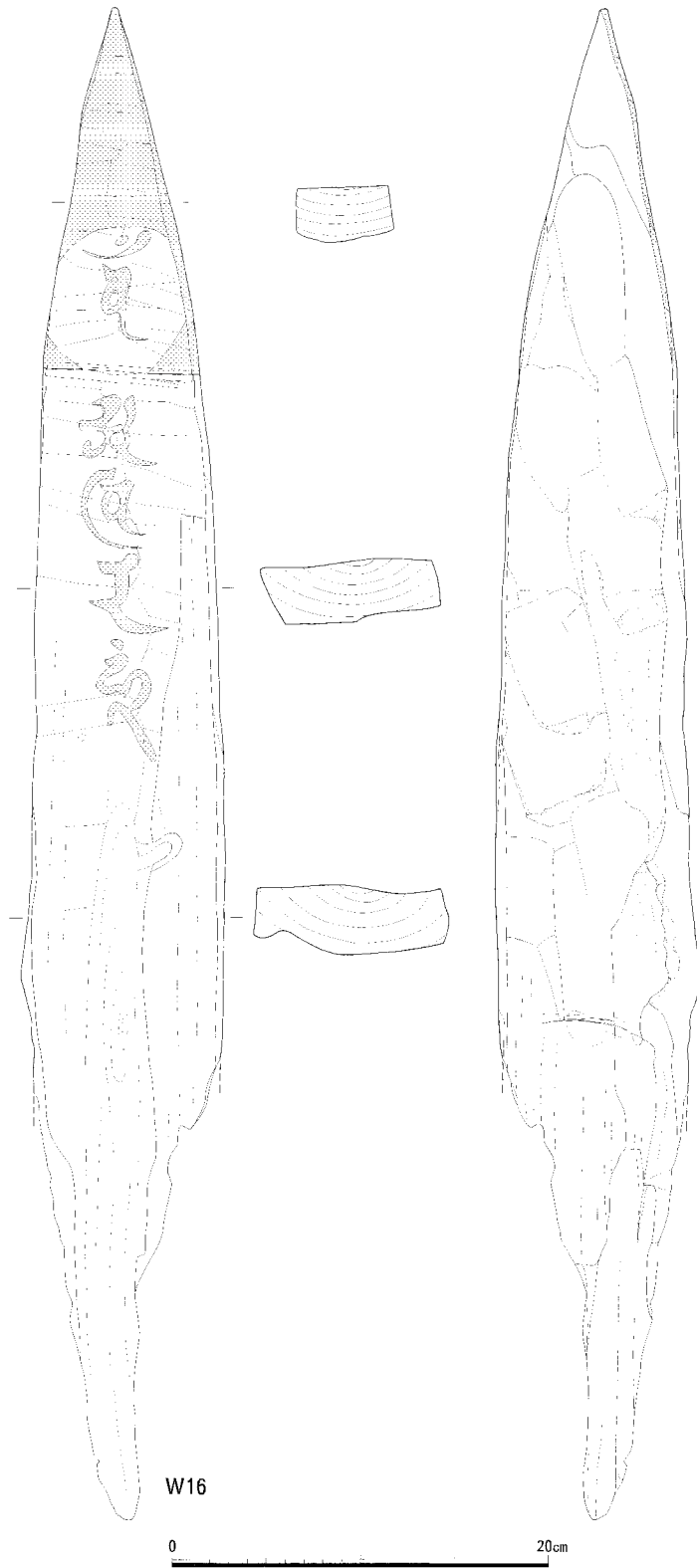
第42図 溝13 (1/60)



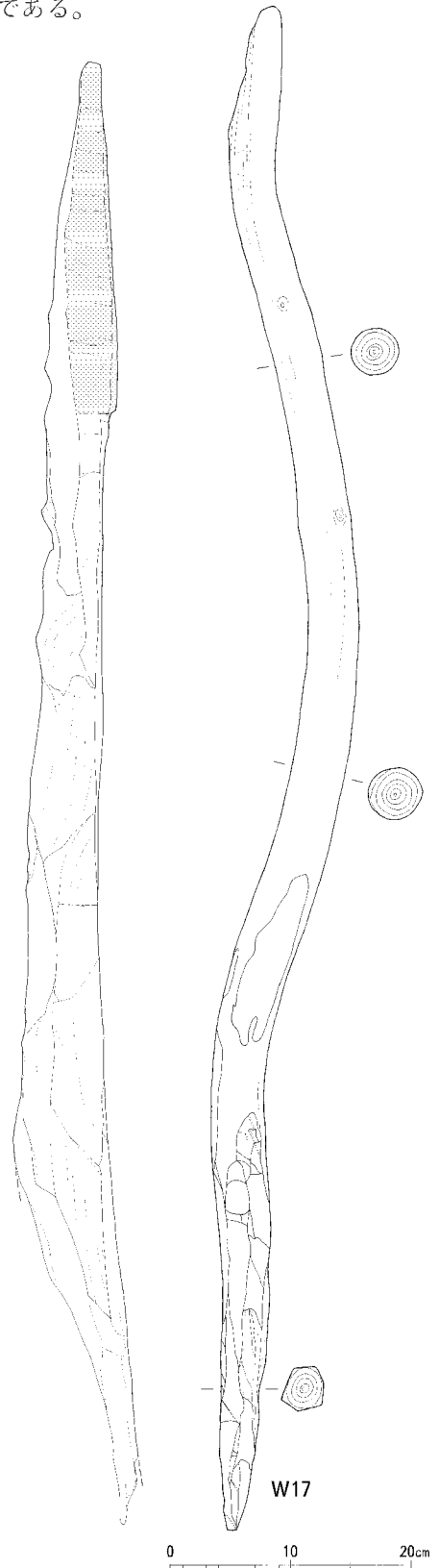
第43図 溝13出土遺物 (1/4・1/3)

杭列を1か所確認した。9本が岸に沿って湾曲して並ぶ。樹皮付きの自然木や転用材を、検出面から深さ1m程度までほぼ垂直に差し込む。杭の先端は長いもので海拔高-0.25mに達する。(氏平)

出土遺物は、土器類と円盤状土製品、土錘、石鍋、木製品である。溝13の埋土は上層と下層に分けられるが、上層出土は土器188と石鍋S 8、その他は下層出土である。



第44図 溝13杭列1 卒塔婆転用杭 (1/4)



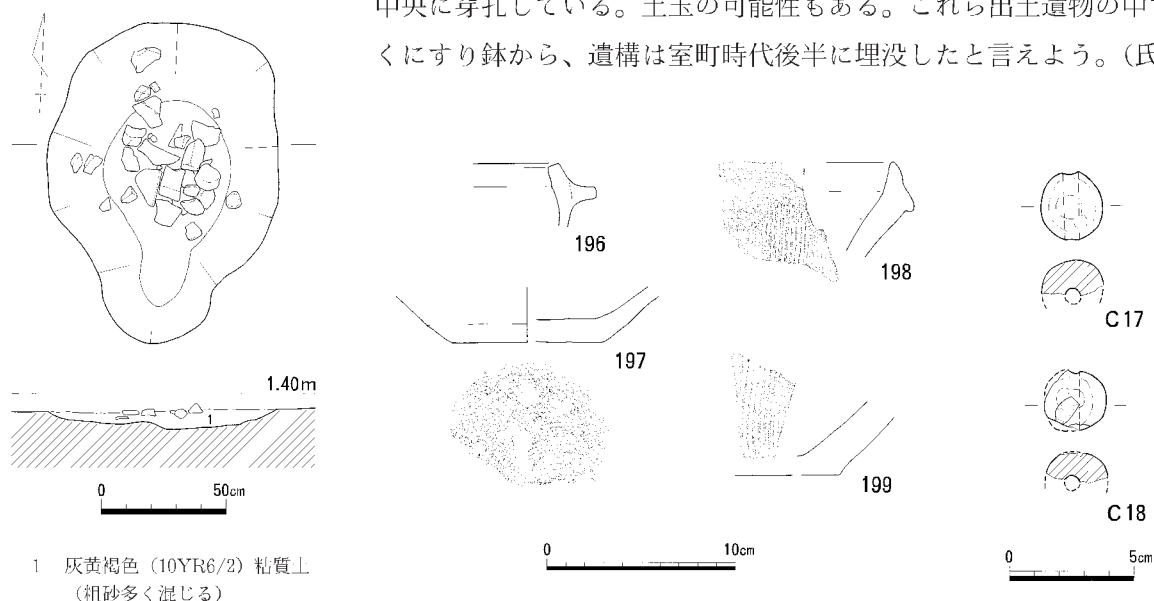
第45図 溝13杭列1 出土杭 (1/6)

土器類では、土師器（183～185・187）、瓦質土器（186）、中国製磁器（188～190）、備前焼（191～194）、亀山焼（195）がみられた。土師器のうち、183・184は吉備系土師器碗、185は外底面を回転ヘラ切りした小皿、187は内面に条線が刻まれ、生焼けのすり鉢の可能性が有る。186は剥離した土器の部品とみられ、ヘラ描きの沈線が数条引かれるが、器種は不明である。舶載磁器は白磁である。188は小さい玉縁をもつ口縁部、189は高台が露胎で、外面に釉垂れがみられる。190は高台端部に釉剥げがある。備前焼には191の小壺と192～194のすり鉢がある。すり鉢の口縁部は少し拡張したものと、上方に高く摘み上げたものがみられ、間壁編年（間壁忠彦『備前焼』ニューサイエンス社 1991年）のⅢ期からⅣ期にあたる。14～15世紀のものであろう。195は亀山焼の甕で、頸部下端に格子目のタキ痕が認められる。土器類の年代は土師器碗の13世紀後半から備前焼の15世紀まで幅がある。

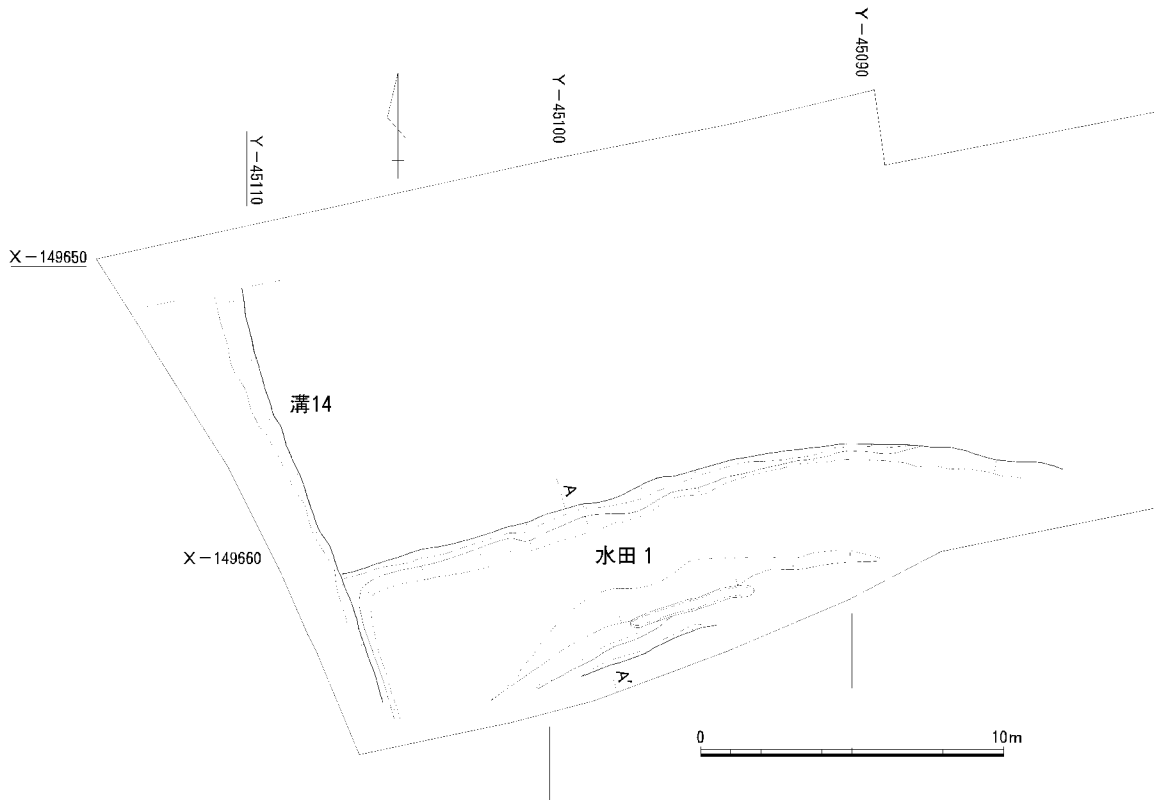
C15は須恵器甕の破片を加工した円盤状土製品、C16は周囲に綱を巻く溝を巡らせた楕円球形の土錘で、重量は88.2gを測る。S8は石鍋の口縁部で内湾するようである。

木製品のうち、W12は籠状の木器であるが、他は杭列1の杭である。W14・15は丸太を半割した杭で、半割面には手斧のはつきり痕が残る。W14は丸太の部分も削ぎ板状にしている。W13は五輪卒塔婆を転用したもので、頭部を杭先としていた。正面にはキャ・カ・ラ・バ・アという五大種字（梵字）が記されている。W16の卒塔婆も頭部を杭先としていた。額部には胎蔵界大日如来の種字を記し、その周囲を丸く残して、黒く塗りつぶしている。その下に浅い段を境にして身部があり、真言のアピラウンケンと梵字を書き入れている。正面、背面ともに手斧による細かい加工がなされている。（岡本）
土壌3（第11・34・46図、図版5・12）

4区西端に位置する土壌である。灰黄褐色土（中世包含層）を除去中、角礫と陶器などが集中していたので遺構と認識した。埋土は粗砂を多く含むため、中世包含層や基盤層と容易に区別できた。掘り方は検出面で1.3～0.9m、深さは7cmを測る。掘り方は楕円形を呈し、断面は皿形のようなが全体に不整形な形状である。角礫と陶器などはいずれも底面からやや浮いた状態で検出した。角礫は3～15cm大であった。遺物は瓦質土器の土鍋196、須恵器の鉢197、備前焼すり鉢198・199、土錘C17・C18と鉄滓及び骨片があった。197は底面に糸切り痕を残し、器種はこね鉢であろう。土錘は球形で、中央に穿孔している。土玉の可能性もある。これら出土遺物の中でとくにすり鉢から、遺構は室町時代後半に埋没したと言えよう。（氏平）



第46図 土壌3・出土遺物（1/30・1/4・1/3）



第47図 4区西端・5区近世遺構配置図 (1/250)

3 近世

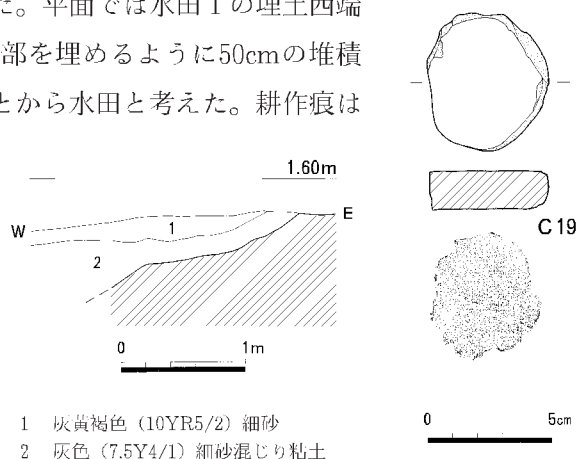
溝14 (第11・12・47・48図、図版6・15・17)

5区西端を北から南へ流れる溝である。近世耕作土直下で検出し、平面で水田1を切ることを確認した。埋土はしまりの弱い細砂と粘土が混ざるものである。遺物は備前焼・瓦などで、遺構の時期は近世であろう。図版17の獣骨は良好な保存状態で、残りは調査区外へ続いているようだ。(氏平)

C19は瓦質の平瓦を加工した円盤状土製品である。中世のものに比べて大きい。埋土下層出土である。獣骨はウシのもので、左右の下顎骨や頸椎骨がみられる。遺体が溝底に埋没したものか。(岡本)

水田1 (第11・42・47図、図版6)

5区から4区西端へかけて調査区南側に検出した。平面では水田1の埋土西端が溝14に切られることを確認している。溝13の上部を埋めるように50cmの堆積があり、溝と南端に基盤層を掘り込む段を伴うことから水田と考えた。耕作痕は平断面を観察したが確認できなかった。埋土は上層の灰黄色系微砂層と下層のマンガンを多く含む微砂層に分かれる。断面は皿状、底面の海拔高は0.86mである。遺物では土師器皿、東播系こね鉢など古代～中世遺物が多い。近世遺物として唐津焼段皿の胎土目を含み、染付は見られない。水田1の時期は近世初頭と言えよう。(氏平)



- 1 灰黄褐色 (10YR5/2) 細砂
- 2 灰色 (7.5Y4/1) 細砂混じり粘土

第48図 溝14・出土遺物 (1/60・1/3)

4 包含層遺物

第49図には各調査区の包含層から出土した中世・近世の遺物を掲載した。200～211は主に1区と2区の中世包含層（灰褐色～灰黄褐色土）から出土したもので、206は北側溝、207は耕作痕、211は近世水田層出土である。212～229は4区と5区から出土したのだが、220は調査排土、223・225・227・228は水田床土から近世耕作土に包含されていたもので、それ以外は中世包含層出土である。

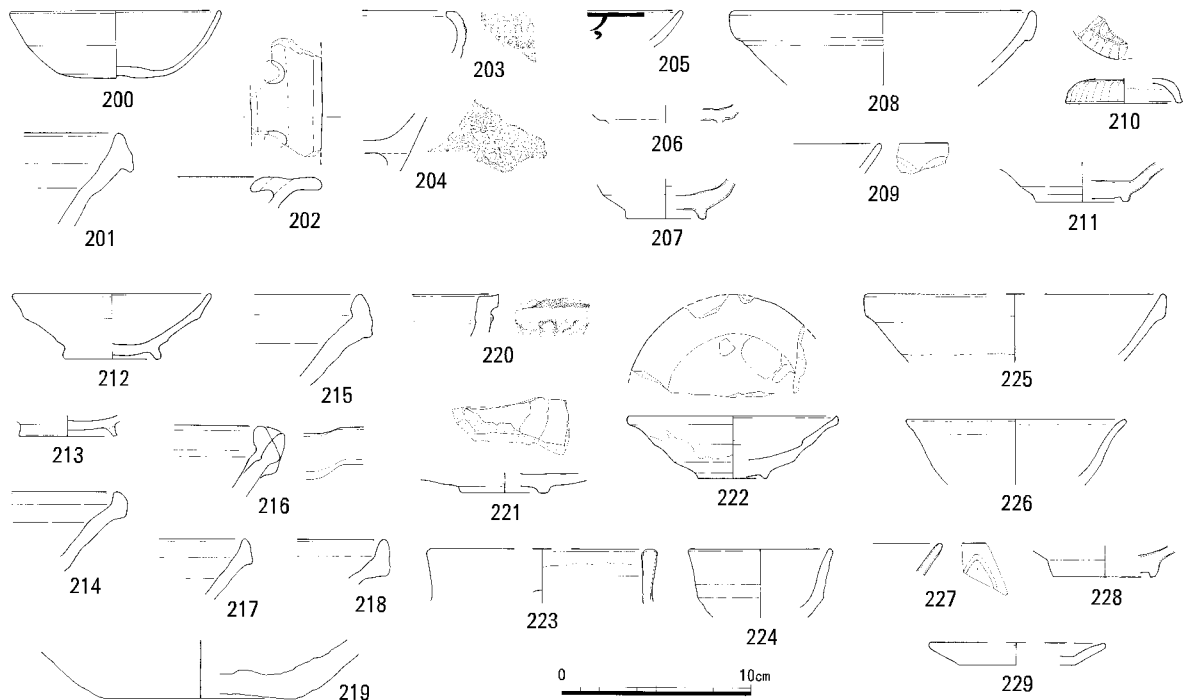
200・212・213は土師器の椀である。212と213は吉備系土師器椀で、200はそれに後続する無高台のへそ椀に近い。13世紀末から14世紀前半のものか。212は第12図の5区北壁から出土している。

201・215～219は須恵器の鉢で、216などは片口をもち、こね鉢とみられる。口縁端部を上方へ引き上げ、口縁部外面と体部の間は段状になるものが多い。東播磨産のものも含まれるか。

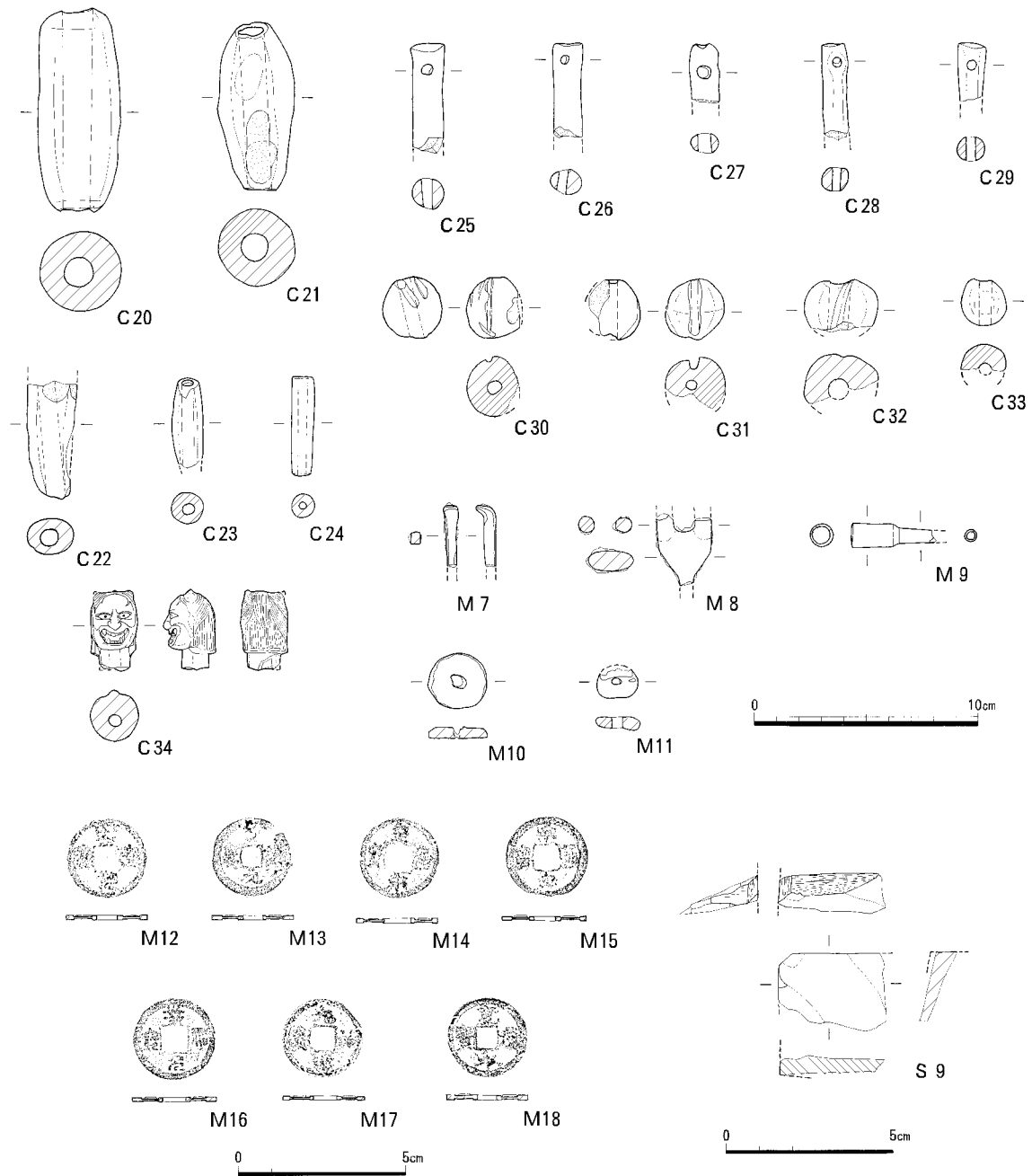
202は瓦質土器の内耳鍋である。口縁部は水平に近く外反する。16世紀のものであろう。214も瓦質土器で鉢とみられる。203・204・220は瓦質土器の火鉢である。203は内湾する口縁部の外面に沈線を3条巡らせ、上段に刺突文、下段に花文のスタンプを押す。204は底部付近の器表全体に菊花文スタンプをいくつも押している。220は突帯状の口縁部の下に模様帯を設け、唐草様の半肉刻文を飾る。

205～207・221～224は国産陶磁器と思われる。205・221は皿、206は椀で、ともに灰釉がかけられる。205は口縁端の釉がはげ、内面に褐釉による文様を描く。206の内底面は露胎である。221は高台部が露胎で、内面に帯状の砂目が残る。207・224は白磁碗、223は青磁の香炉である。222は唐津焼の段皿で、体部下半から高台部にかけては露胎である。内底面には釉剥げや砂目の掻き取り痕が残る。

208～211・225～229は中国製の舶載磁器とみられる。208・225・226は白磁、210・228は青白磁、他は青磁である。208・225は玉縁口縁の碗、209・227は蓮弁文の碗で、211・226・228も碗である。210は合子の蓋で、天井部には花文を描き、口縁部には花卉を連ねている。



第49図 遺構に伴わない中世・近世遺物（1）（1/4）



第50図 遺構に伴わない中世・近世遺物 (2) (1/3・1/2)

第50図には土製品・金属製品・石製品を掲載した。土製品ではC20・21・23・30が1・2区出土、金属製品ではM12が1区出土、石製品ではS9が2区出土で、他は3～5区出土である。

土製品では多様な形態の土錘が出土している。大形で土管状のもの(C20)、両端のすぼまった筒状のもの(C21・23)、チューブ状のもの(C24)、丸棒の両端に穿孔したもの(C25)、球の中央に穿孔し、一側面に溝を刻んだもの(C30)などである。C34は陶器で、般若の頭部である。下に棒を通す穴がある。玩具の人形として使われたものであろうか。

金属製品では、M7・8が鉄器で釘と鋸、M9は銅のキセル、M10・11は鉛の円盤で、中央に穿孔するようである。M12～18は銅銭貨で、図版18に字体を記している。北宋銭が多い。

S9は方形硯の破片で、側面は磨かれ、上開きに少し傾斜するようである。赤間石か。(岡本)

第5節 小結

1 越州窯系青磁について

今回の中撫川遺跡の調査において、中国南部、現在の浙江省付近で製作された越州窯系青磁が2点出土した。第51図8(本文167)は1区古代包含層上層出土である。土橋理子氏の型式分類(註1)で、椀ⅡD1類に該当する。胎土は168と比べ粗雑で、黒い粒子が混ざる。口縁～胴部を欠損するが全体の2/3が残る。第51図7(本文168)は2S区灰黄褐色粘質土(中世包含層)出土である。椀底部で、椀ⅠB2類に分類される。時期は9世紀後半～10世紀に相当し、良品ではなく中程度の製品である(註2)。

ⅡD類は体部外面下半～底面が露胎で、化粧掛けがあり、素地が粗雑で黒い粒子が入るといった特徴がある。実際に167を鴻臚館跡・観世音寺出土の越州窯系青磁ⅡD類と対照し、特徴が同じであることを確認した。鴻臚館跡の対照遺物は平成15年度調査の土壌でSK15014・SK15027・SK15017などである。うちSK15014は瓦の廃棄土壌で、多数の鴻臚館式軒丸・軒平瓦と共に土師器・内黒黒色土器・新羅陶器・褐釉陶器・越州窯系青磁・白磁などと「開元通寶」が出土した。時期は9世紀中頃である(註3)。観世音寺は大宰府史跡群の一画にあり、8世紀中頃に完成した九州でも有数の古代寺院である。SE1800は寺域北部にある素堀り井戸で、墨書のある土師器・黒色土器椀(内面黒色・両面黒色)・緑釉陶器皿(輪花)と共に越州窯系青磁椀・皿が出土した。青磁はⅠ類とⅡ類がある(註4)。

岡山県内で167の越州窯系青磁椀ⅡD1類は初出である。中四国地方では山口県周防国府・秋根遺跡で出土例があるようだ(註5)。

なお、国内出土の越州窯系青磁椀Ⅱ類は9世紀末から10世紀初頭に相当する、という。初期貿易陶磁器では第3の画期にあたり、越州窯系青磁では粗製品である。中でもⅡD類は最も粗悪で、日本国内出土の95%は九州に存在するようだ。越州窯系青磁Ⅱ類は粗製で低価格のため大量に輸入され、国産の緑釉・灰釉陶器が入手しにくい九州で主に消費されたということである(註1)。

さて、岡山県内でこれまで出土した越州窯系青磁を集成し一覧表を作成した。出土遺跡を取り上げ、出土の背景に近づくべく論じてみたい。一覧には遺漏もあるかと思われるが、ご容赦願いたい。

中撫川遺跡から直線距離で約5km、穴海を隔てて南側の島に位置していた岡山市妹尾住田遺跡からは椀ⅠA類が1点出土している。ここでは南に海岸を望む建物群が検出され、中撫川遺跡へ向かう船舶の中継地点の可能性もある。椀ⅠA類は、建物を巡る溝4の東側土器溜まりから緑釉陶器・灰釉陶器等と共に発見された。土器溜まりの時期は9世紀末である(註6)。

旭川東岸の岡山市ハガ遺跡では、Ⅰ類が1点出土した。発掘調査では、区画溝による内外の2つの方形区画と掘立柱建物群を検出した。これらは8～12世紀の間存続していた。遺物も三彩陶器や羊形硯といった特殊遺物が出土し、備前国府関連の遺構と考えられている。また、ハガ遺跡の西側に隣接の南古市場遺跡では9～10世紀の大量の遺物と共に越州窯産輪花皿が出土したらしい(註7)。

赤磐市馬屋遺跡は備前国分僧寺・国分尼寺推定地に近接し古代備前国の中心地に属する。ここでは五輪花椀など9～10世紀に該当する3個体分が認められた。平安時代前～中期の馬屋遺跡は、遺構は建物が散在する程度だが、遺物は他に定窯系白磁も出土し、奈良時代に続き公的な色彩が強い(註8)。

総社市窪木遺跡では県立大学建設に伴う調査で口縁3片が出土した。9世紀から11世紀に相当する。

奈良～平安前期の掘立柱建物群が検出され、公的な倉庫の可能性が指摘されている(註9)。

総社市北溝手遺跡では椀 I B 類、金井戸遺跡で口縁片の出土例がある。両遺跡は隣接していて、金井戸遺跡微高地では平安時代(9世紀後半～10世紀後半)の掘立柱建物群を検出した。地元の豪族賀陽氏と強く結びついた遺跡であるとされている(註10)。

また総社駅南の再開発に伴い発掘調査された上三本松遺跡では、体部1片が包含層から出土している。遺構は方形の掘り方の柱穴を持つ建物や井戸などが確認された。遺物としては他に円面硯・風字硯・石帯・緑釉陶器・灰釉陶器瓶などが見られた(註11)。

津山市美作国府跡では椀 I 類が1点出土している。中国自動車道建設に伴う調査では、9～10世紀の遺構は東西・南北方向の区画溝程度であるが、緑釉陶器を伴う(註12)。また久米廃寺でも椀 I 類が1点出土している(註12)。

これらの遺跡の中で、他の遺物との共伴関係が明確なのは妹尾住田遺跡の溝4土器溜まりである。この土器溜まりは須恵器杯身、土師器の椀・杯 A・皿、内黒の黒色土器椀・皿、緑釉陶器椀・皿・香炉・瓶、灰釉陶器椀・皿と越州窯系青磁椀 I A 類で構成される。埋没状況から一括性が高く、時期は9世紀末である。備中における越州窯系青磁導入時期の器種組成を表す資料として重要である。

出土状況に着目すると、各遺跡・1回の調査で1～3点程度の出土と少量である。出土位置は包含層や河道など二次堆積が主である。器種はほとんどが椀で、残存状況は破片で底部か口縁がほとんど、完形品は皆無である。一次堆積として出土した例が妹尾住田遺跡の溝4土器溜まりの他は未確認のため、越州窯系青磁の廃棄に際し特殊性があるかどうかは判断を留保したい。

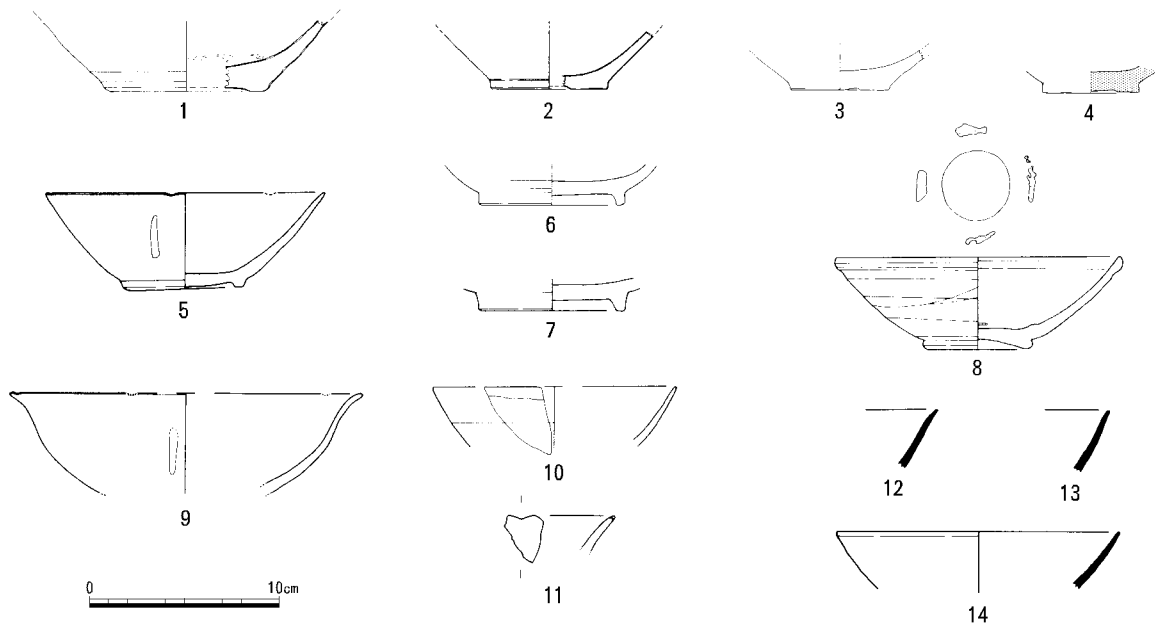
以上見てきたように、岡山県内出土の越州窯系青磁は、9世紀後半から10世紀まで、ごく少量の優品が国衙・官衙関連、古代寺院、港湾関係といった国の主要施設で出土している。ここで今回出土の167と168を振り返ると、粗製品と中程度の製品であったというのは偶然ではないように思える。つまり、これらは公的に配布されたというよりは私的交易でもたらされた可能性がある。古代の中撫川遺跡を備中国の「津」と解釈する意見がある(註13)が、ならば青磁 I 類で良品の出土が望まれよう。これまでの発掘調査で、中撫川遺跡が公的な港の機能を果たしていた蓋然性は高い。越州窯系青磁 II 類の出土は、中撫川遺跡の一部での私的交易の存在を表しているのではないだろうか。(氏平)

註

- 1 土橋理子「11.貿易陶磁器(初期貿易陶磁器)」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社 1995年
- 2 大阪大学高橋照彦准教授による。
- 3 福岡市教育委員会大庭康時氏にご教授いただいた。大庭康時「鴻臚館跡16 ー平成15年度発掘調査報告書ー」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第875集 福岡市教育委員会 2006年
- 4 九州歴史資料館の加藤和歳氏に実見する機会をいただいた。岡寺良ほか『観世音寺 ー遺物編 I ー』九州歴史資料館 2007年、小田和利ほか『観世音寺 ー寺域編ー』九州歴史資料館 2006年
- 5 檀原考古学研究所編『貿易陶磁 ー奈良・平安の中国陶磁ー』由良大和古文化研究協会 1993年
- 6 草原孝典『妹尾住田遺跡』岡山市教育委員会 2003年
- 7 草原孝典『ハガ遺跡』岡山市教育委員会 2004年
- 8 横山定ほか「馬屋遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』99 岡山県教育委員会ほか 1995年
- 9 平井泰男「窪木遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』124 岡山県教育委員会 1998年
- 10 江見正己ほか「総社遺跡 金井戸遺跡 北溝手遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』209 岡山県教育委員会ほか 2007年
- 11 総社市教育委員会平井典了氏のご教授による。平井典了ほか「駅南区画整理事業に伴う発掘調査」『総社市埋蔵文化財年報7(平成8年度)』総社市教育委員会 1997年、平井典子『総社市埋蔵文化財年報8(平成9

第3章 発掘調査の概要

- 年度) 総社市教育委員会 1998年
- 12 栗野克己「久米廃寺 美作国府」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』24 岡山県教育委員会 1978年
- 13 岡田博「第9章まとめ 第1節発掘調査の成果」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』182 岡山県教育委員会 2004年
- 14 矢掛町毎戸遺跡では平安時代の掘立柱建物3棟が検出され、包含層から「馬」と線刻のある奈良時代の土師器杯が出土した。掘立柱建物周囲の土器堆積層から土師器に混じり青磁が出土した、とされている。下澤公明「毎戸遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』5 岡山県教育委員会 1974年



第51図 岡山県内出土の越州窯系青磁 (1/4) ※遺物番号は一覧表の番号と一致する。

岡山県内出土の越州窯系青磁一覧表

所在地	遺跡名	報告書	調査区等	出土遺構	掲載番号	器種	分類(土橋)	残存	特徴
1	岡山市妹尾	妹尾住田遺跡		溝4	424	碗	碗 I A2	底部	出土遺構は9世紀末。
2	岡山市国府市場	ハガ遺跡		包含層	136	碗	碗 I A1	底部	見込みに重ね焼き痕なし。
3	津山市総社	美作国府		包含層?	第9図	碗	碗 I A	底部	
4	津山市宮尾	久米廃寺		包含層?	第9図-(3)3	碗	碗 I A	底部	
5	赤磐市馬屋	馬屋遺跡	盛土部	包含層	j5	碗	碗 I B1a0	1/2	9~10世紀。五輪花。豊付露胎。
6	総社市北溝手	北溝手遺跡	2区	河道2	472	碗	碗 I B2	底部	9世紀後半~10世紀前半。全面施釉。内面に日跡。最上級品ではない。
7	岡山市中撫川	中撫川遺跡(本報告)	2S区	中世包含層	168	碗	碗 I B2	底部	9世紀後半~10世紀。良品ではなく、中程度の製品。内面に日跡。
8	岡山市中撫川	中撫川遺跡(本報告)	1区	古代包含層上層	167	碗	碗 II D1	2/3	上げ底円蓋状高台。胴部わずかに内挽する。口縁部わずかに肥厚。外面下半~底部露胎、内面全面~外面上半化粧掛け、施釉は薄い。底部内面日跡4ヶ所。
9	赤磐市馬屋	馬屋遺跡	盛土部	包含層	j8	碗	碗 c0	口縁~体部	9~10世紀。五?輪花。口縁外反。
10	総社市金井戸	金井戸遺跡		包含層	175	碗		口縁	全面施釉。直線的に立ち上がる。
11	赤磐市馬屋	馬屋遺跡	盛土部	包含層	j6	碗		口縁	9~10世紀。
12	総社市窪木	窪木遺跡		包含層	2719	碗		口縁	9~11世紀。全面施釉。
13	総社市窪木	窪木遺跡		包含層	2720	碗		口縁	全面施釉。口唇部はげる。
14	総社市窪木	窪木遺跡		包含層	2721	碗		口縁	10世紀初頭~前葉。全面施釉。
岡山市	南古市場遺跡	岡山市教委『ハガ遺跡』				皿			越州窯産輪花皿。図面掲載なし。文章のみ。
総社市三輪	上三本松遺跡	総社市年報8		包含層		碗		体部	小片とのこと。
小田郡矢掛町浅海	毎戸遺跡	県報告5		包含層					図面掲載なし。文章に青磁とのみ記載。(註14)

2 古代の中撫川・川入遺跡について

中撫川・川入遺跡では、山陽新幹線の建設に伴う発掘調査が昭和47年(1972年)に開始されて以来、新幹線の側道となる都市計画道路や市道、また、これに直交する県道・市道の建設に伴う発掘調査が繰り返し実施され、膨大な成果が蓄積されている(註1)。遺跡の立地する足守川中流域は、岡山県内における遺跡密集地域の代表であり、その中において、中撫川・川入遺跡はもっとも実態解明の進んだ遺跡として注目される。ここでは、今回の発掘調査成果がどのような意義をもつかを検討したい。

草原孝典氏によると中撫川・川入遺跡は三つの微高地からなり、東から第1微高地、第2微高地、第3微高地と仮称される。小字名は第1・2微高地が大道西、第3微高地は法万寺である。それぞれの微高地の間は足守川の旧河道とみられ、第2微高地と第3微高地の間を流れる現在の法万寺川は、古代においては備中国賀夜郡と都宇郡との郡境であったとされる。古代の中撫川・川入遺跡を検討した草原氏は、三つの微高地は、検出された遺構や出土遺物から判断して、それぞれに性格の異なった利用のされ方をしていて、第1微高地は約60m四方の区画をもつ寺院を中心とした地区、第2微高地は官人の居住する館地区、第3微高地は官衙本体の施設が存在した地区とする(註2)。

第1微高地では平城宮6225式軒丸瓦・6663式軒平瓦の垂式軒瓦(註3)が多量に出土していて、その建立は8世紀の後葉と考えられる。軒丸瓦には2類型があり、第2類は6225式がくずれた単弁型式のものに変化していて、修理に伴う差し替え瓦とみられる。このことから、第1微高地の寺院は9世紀代には確実に存続していたとみられ、区画溝から出土した土器の年代も9世紀後半のものが含まれているという(註2)。

第2微高地から出土した土器の年代は8世紀中葉から9世紀後半とされる。主体は9世紀後半にあり、検出された建物群の年代もそのころである可能性がもっとも高いという(註2)。微高地の東端で検出された土器溜まりは土師器の食膳具が主体であったが、京都府産がほとんどを占める緑釉陶器も含まれ、9世紀後半の年代が与えられる。

このように、第1微高地と第2微高地では9世紀代に活動の中心があるようだが、今回の調査地区が含まれる第3微高地ではどのような状況が認められるだろうか。

第3微高地は南北に細長い形をしているが、その中心部を市道中撫川平野線と県道吉備津松島線が南北に縦走することとなったため、事前の発掘調査が広範囲に及び、古代の状況がかなり明らかとなった。微高地の中央付近を幅3m前後のA溝(溝25・2・3・312・313)が南北に走り、このA溝の東側に掘立柱建物群が溝に沿うような形で検出された。建物群は3群にかたまるようで、吉備津松島線調査の中撫川1区から3区(註4)北端にかけて、吉備津松島線中撫川4区(註5)から中撫川平野線法万寺I区(註6)と市道2号線法万寺区(註7)にかけて、それに中撫川平野線法万寺IV区(註8)である。A溝の存続年代は出土遺物から7世紀から8世紀までとされるが、建物群では棟方向に変化がみられ、やや西偏するものとはほぼ真北のものが混在し、年代幅があるようである。中撫川1・2区の大形建物は8世紀とされるが、同じ調査区の建物4は8～9世紀、建物10は10世紀以降とされ、市道2号線法万寺区の建物1は9世紀後半とされる。市道2号線法万寺区と法万寺IV区では井戸が検出されていることから、これら建物群に井戸が備えられていた可能性が高い。

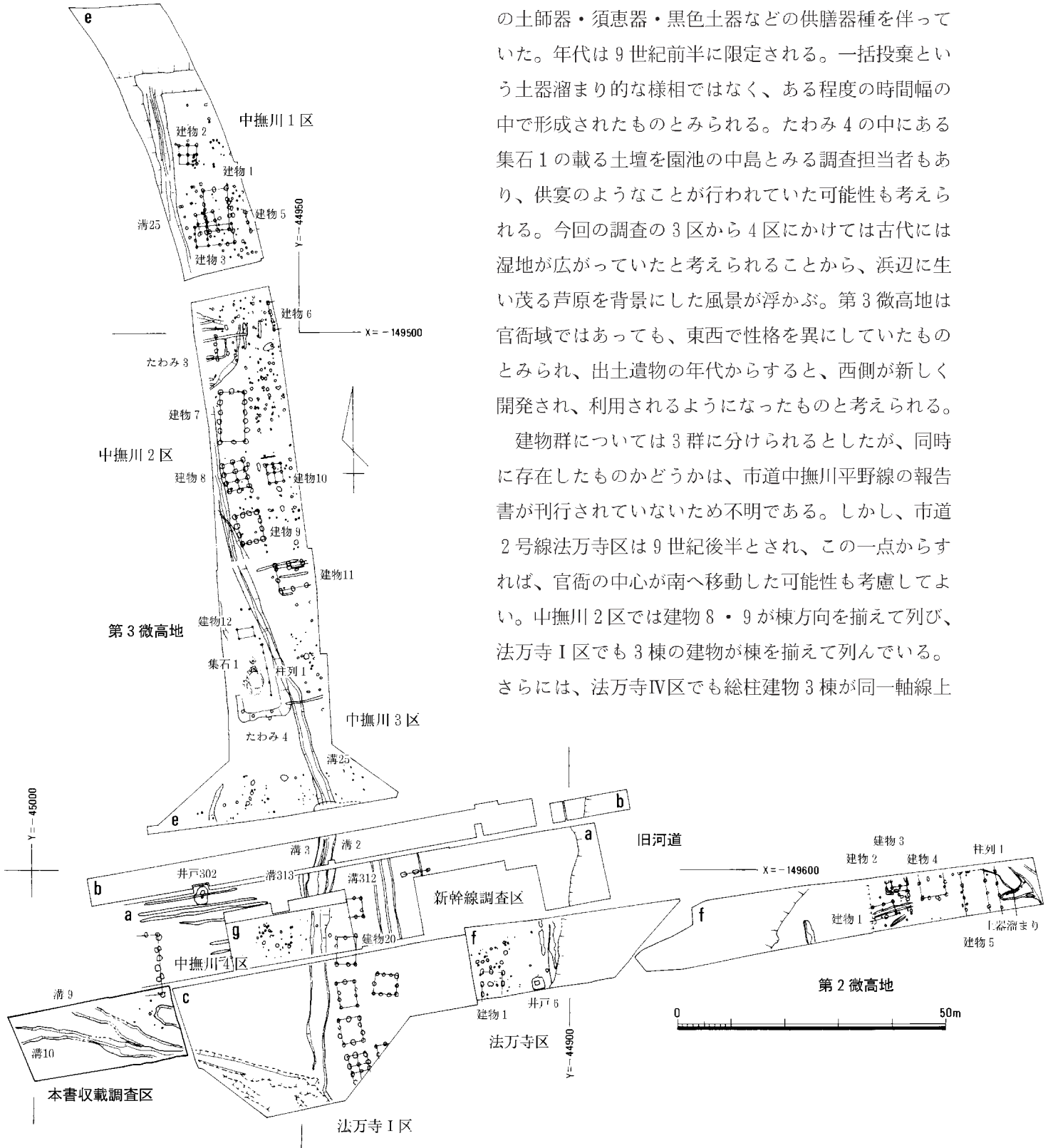
A溝から西側では、微高地の縁辺部に近づくこともあってか、柱穴が散在するものの掘立柱建物の存在は明瞭ではなく、わずかに新幹線調査区の大形建物が今回の調査区で検出された柱穴1とつながっ

てさらに大形化する可能性があるのと、中撫川3区で9世紀前半の建物12が認められただけである。しかし、新幹線調査区には井戸302があることから、さらに建物の存在した可能性も無視できない。

この第3微高地の西部部で注目されるのがたわみ3とたわみ4から出土した多量の京都府産緑釉陶

器である。たわみ内の全域から散在して出土し、多量の土師器・須恵器・黒色土器などの供膳器種を伴っていた。年代は9世紀前半に限定される。一括投棄という土器溜まり的な様相ではなく、ある程度の時間幅の中で形成されたものとみられる。たわみ4の中にある集石1の載る土壇を園池の中島とみる調査担当者もあり、供宴のようなことが行われていた可能性も考えられる。今回の調査の3区から4区にかけては古代には湿地が広がっていたと考えられることから、浜辺に生い茂る芦原を背景にした風景が浮かぶ。第3微高地は官衙域ではあっても、東西で性格を異にしていたものとみられ、出土遺物の年代からすると、西側が新しく開発され、利用されるようになったものと考えられる。

建物群については3群に分けられるとしたが、同時に存在したのかどうかは、市道中撫川平野線の報告書が刊行されていないため不明である。しかし、市道2号線法万寺区は9世紀後半とされ、この一点からすれば、官衙の中心が南へ移動した可能性も考慮してよい。中撫川2区では建物8・9が棟方向を揃えて並び、法万寺I区でも3棟の建物が棟を揃えて列んでいる。さらには、法万寺IV区でも総柱建物3棟が同一軸線上



第52図 中撫川・川入遺跡古代遺構配置図 (1/1,000)

に南北に列ぶという。このような類似から官衙の移動を考えるのであるが、微高地が南北に細長いために1か所に大規模な官衙群を作れなかったこともありうる。

それでは今回調査した1・2区の状況は、前述のようなこれまでの第3微高地の理解に対して、どのような変化をもたらすだろうか。今回調査の3～6区までの間に明瞭な微高地の端部は検出されなかったが、3区から4区にかけては地形のたわみがあり、薄い黒色土層が複数水平堆積するという土層断面観察(巻頭図版1-2・3)から湿地が広がっていたと推定している。遺構が検出されたのは1・2区のみであったが、古代の遺物では、4E区まで緑釉陶器片が出土したことから、第3微高地は草原氏が想定した(註2)以上に西側へ広がっていたと考えられる。

1・2区の調査成果でもっとも注目されるのは、1区の東端部に形成されていた上下2層の古代包含層から緑釉陶器片がかなり出土したことである。この包含層には土師器・須恵器・黒色土器の椀・杯・皿という供膳具も多く出土し、完形に近い越州窯系青磁碗も含まれていた。このような状況は中撫川2・3区のたわみ3・4と類似した状況である。ただ異なるのは、年代で、たわみ3・4が9世紀前半であるのに対し、1・2区は10世紀前半を中心とする。また、越州窯系青磁碗も10世紀前半とされる。さらに、土師器椀のなかに10世紀後半から11世紀にかかるものも認められているが、4E区から出土した近江産の緑釉陶器片も10世紀後半とされる。

このようなことから考えると、第3微高地の西部部では緑釉陶器を含む供膳具を多く使用する行事が1世紀以上継続して行われていたとみられる。そして、年代差から緑釉陶器を使用する行事を開く場所が南へ移動した可能性が強いように考えられる。1・2区で検出された溝9・10は切り合い関係にあって、同じ機能をもった溝が掘り直されたものとみられるが、その方向は都市計画道路調査区(b)の溝2・3以南のA溝と直交するかのようにはみられる。溝9・10は10世紀前半と考えられるので、A溝はすでに埋没していたとみられるが、わずかな窪みは残存していたかもしれず、法万寺I区の建物群の存在も区画を意識させたかもしれない。溝9・10は、10世紀前半において、緑釉陶器を使用する行事を開く場所の南限を区画する溝として考えたいが、出土遺物には8・9世紀代のものもあり、その初現がどこまで遡るのかは明瞭ではない。(岡本)

註

- 1 a：正岡睦夫・大谷猛・枝川陽「川入遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』2 岡山県教育委員会 1974年 b：柳瀬昭彦・江見正己・中野雅美「川入遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16 岡山県教育委員会 1977年 c：高橋伸二・安川満「川入・中撫川(市道)遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1999(平成11)年度 岡山市教育委員会 2001年 d：河田健司・安川満「川入・中撫川(市道)遺跡」『岡山市埋蔵文化財センター年報』1 岡山市教育委員会 2002年 e：岡田博・井上弘・氏平昭則「中撫川遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』182 岡山県教育委員会 2004年 f：草原孝典「川入・中撫川遺跡」岡山市教育委員会 2006年 g：岡本寛久・稲谷知子「仏生田遺跡2 中撫川遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』202 岡山県教育委員会 2006年
- 2 草原孝典「第四章 結語」『川入・中撫川遺跡』岡山市教育委員会 2006年
- 3 中野雅美「古備における平城宮型式瓦について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16 岡山県教育委員会 1977年
- 4 註1のe文献
- 5 註1のg文献
- 6 註1のc文献
- 7 註1のf文献
- 8 註1のd文献

掲載遺構一覧表

遺構名	地区名	年代	旧遺構名	規模(m)			出土遺物	備考
				長さ	幅	深さ		
溝 1	1区	弥生時代後期	Na12	(5.0)	1.7	0.45	土器	
溝 2	1区	弥生時代後期後葉	Na10	(6.5)	4.7	0.35	土器	
溝 3	3区	弥生時代?	Na12	(14.7)	1.4	0.25	土器	
溝 4	1区	古墳時代中期	Na 9	(6.5)	7.0	0.52	土器	
溝 5	1区	古墳時代前期	Na11	(2.4)	(1.0)	0.30	土器	溝 7 と一体か
溝 6	2 S区	古墳時代	Na15, 16	(4.0)	3.3	0.20	土器	
溝 7	2 S, N区	古墳時代前期	Na18	(18.0)	9.3	0.20	土器	土器溜まり伴う
溝 8	2 S, N区	古墳時代前期	Na14	(12.9)	1.25	0.10	土器	
土壇 1	1区	平安時代後半	Na 4	0.35	0.30	0.15	土器	円礫を充填する
土壇 2	1区	平安時代後半?	Na 5	0.48	0.37	0.17	土器	円礫を充填する
柱穴 1	1区	平安時代?		0.73	0.65	0.30	土器	径30cmの柱痕
溝 9	1, 2 N区	平安時代前半	Na 8, 17	(21.0)	3.2	0.40	土器・瓦・土馬・土製円盤・土錘・石鍋	溝10より古い
溝10	1, 2 S, N区	平安時代前半	Na 7, 13	(30.0)	2.8	0.20	土器・瓦・土製円盤・土錘・獣骨	
溝11	5区	鎌倉時代後半	Na 5, 8, 10	(21.0)	3.0	0.86	土器・木製品・鉄器	杭列 2カ所
溝12	5区	鎌倉時代後半?	Na11	(2.5)	1.5	0.62	土器	溝11より古い
溝13	4 W, 5区	室町時代後半	Na 3 下層	(22.5)	3.5	1.42	土器・土製円盤・土錘・木製品・石鍋	杭列 1カ所
土壇 3	4 W区	室町時代後半	Na15	1.3	0.9	0.07	土器・土錘・鉄滓・骨片	角礫・陶器片集中
溝14	5区	江戸時代	Na 6	(14.5)	(1.9)	0.72	土器・土製円盤・獣骨	
水口 1	5区	江戸時代前半	Na 3 上層	(23.5)	5.0	0.40	土器	

()内の数値は検出値または残存値

土器観察表

掲載 番号	出土 遺構名	地区名	旧遺構・層位名	種別	器種	計測値(cm)			色調(外面)	残存状況	備考	実測 番号
						口径	器高	底径				
1	溝 1	1区	Na12溝 (南東端)	弥生土器	鉢		(1.8)	6.5	にぶい橙(5YR6/4)	底部1/5		121
2	溝 2	1区	Na10溝	弥生土器	甕	18.2	(4.5)		橙(5YR6/8)	口縁部~肩部1/8		112
3	溝 2	1区	Na10溝	弥生土器	台付鉢				橙(5YR7/6)	小片		98B
4	溝 2	1区	Na10溝	弥生土器	台付鉢		(2.9)	8.1	にぶい橙(5YR6/4)	脚部2/3		119
5	溝 2	1区	Na10溝	弥生土器	台付鉢		(5.0)	7.0	橙(5YR7/6)	1/3		98
6	溝 2	1区	Na10溝	弥生土器	高杯	18.6	(3.8)		にぶい黄橙(7.5YR7/3)	口縁部1/5		97
7	溝 2	1区	Na10溝	弥生土器	高杯		(5.2)		にぶい橙(7.5YR7/4)	杯部1/5~脚柱部1/1		117
8	溝 2	1区	Na10溝	弥生土器	高杯		(6.0)		橙(5YR6/6)	杯部~脚柱部1/3		118
9	包含層	6区	中央トレンチ掘り下げ中	弥生土器	甕	13.8	(4.4)		橙(7.5YR6/8)	口縁部1/5		223
10	包含層	4W区	中央トレンチ-20cmまで(1段目)	弥生土器	甕		(3.2)		にぶい橙(7.5YR6/4)	口縁部破片		181
11	包含層	2S区	Na16溝	弥生土器	甕		(2.3)		にぶい黄橙(10YR7/3)	口縁部破片		133
12	溝 5	1区	Na11溝	土師器	甕	15.8			にぶい橙(7.5YR7/3)	口縁部~肩部1/2	13と同一か	116
13	溝 5	1区	Na11溝	土師器	甕				にぶい橙(7.5YR7/3)	底部2/3		116
14	溝 7	2N区	Na18溝	土師器	甕		(3.1)		にぶい黄橙(10YR7/3)	口縁部1/8		160
15	溝 7	2N区	Na18溝	土師器	甕	14.6	(18.8)		にぶい橙(7.5YR7/4)	口縁部1/4, 胴部1/5		163
16	溝 8	2N区	Na14溝 西側土器集中区	土師器	甕	16.6	(5.9)		赤(10YR5/6)	口縁部~肩部1/8		150
17	溝 8	2S区	Na14溝	土師器	甕	12.4	(4.0)		橙(7.5YR6/6)	口縁部~肩部1/5		127
18	溝 8	2N区	西側溝	土師器	甕	14.8	5.4		にぶい橙(7.5YR6/3)	口縁部~肩部1/5		152
19	溝 8	2N区	Na14溝 西側土器集中区	土師器	甕	13.7	(3.6)		灰黄褐(10YR6/2)	口縁部1/5		151
20	溝 8	2N区	Na14溝 西側土器集中区	手捏ね土器	鉢	4.0	4.0		にぶい黄橙(10YR7/3)	完形		133
21	溝 8	2N区	Na14溝 西側土器集中区	手捏ね土器	鉢	5.9	4.5		にぶい黄橙(10YR7/3)	2/3		137
22	溝 8	2S区	砂層中	手捏ね土器	鉢	8.4	5.0	4.9	明赤褐(2.5YR5/8)	底部全形、杯部1/4		125
23	包含層	2N区	古代包含層 黒褐色土	土師器	壺	(19.2)	(4.7)		にぶい橙(7.5YR7/4)	口縁部1/10		149
24	包含層	1区	弥生包含層 灰褐色土	土師器	壺		(7.7)		にぶい橙(7.5YR7/4)	頸部~肩部1/4		99
25	包含層	1区	古代包含層 黒褐色土	土師器	甕	10.8	(10.4)		明赤褐(5YR5/6)	口縁~胴部1/6		52
26	包含層	4W区	北側溝 主に中世より下	土師器	甕	16.6	(1.6)		にぶい黄橙(10YR7/2)	口縁部1/4		171
27	包含層	5区	古代包含層	須恵器	杯蓋	(13.1)	4.4		灰白(N7/)~灰(N4/)?	底部1/4, 口縁~胴1/2		19
28	包含層	5区	弥生包含層 黒褐色土	須恵器	杯身	11.2	(3.1)		灰(N6/)	口縁部~杯部1/7		216
29	包含層	3区	中世包含層 灰黄褐色土	須恵器	杯身	12.0	4.0	6.1	灰白(N7/)	底部3/4		166
30	土壇 1	1区	Na 4 集石土壇	土師器	椀	(17.0)	(5.9)	8.0	橙(5YR7/6)	底部1/4と口縁~杯部	内黒	84
31	溝 9	2N区	Na17溝	須恵器	蓋		(1.9)		灰(N6/)	つまみ部分1/1		148
32	溝 9	1区	Na 8 溝 掘下	須恵器	蓋	13.8	(3.3)		灰白(5Y7/1)	つまみ完形、天井部1/3		110
33	溝 9	1区	Na 8 溝 掘下	須恵器	蓋	18.2	3.0		灰(N6/)	1/2		96
34	溝 9	1区	Na 8 溝 掘下	須恵器	杯		(4.0)	11.2	灰(N4/)	底部3/4		94
35	溝 9	1区	Na 8 溝 掘下	須恵器	杯		(2.0)	10.4	黄灰(2.5Y6/1)	底部2/3		100
36	溝 9	1区	Na 8 溝 掘下	須恵器	細頸壺		(10.0)		灰(N6/)	頸部~胴部1/4		109
37	溝 9	1区	Na 8 溝 掘下	須恵器	瓶?		(2.8)	9.1	灰白(N8/0)	底部1/2		107
38	溝 9	1区	Na 8 溝 掘下	須恵器	甕		(10.3)		黄灰(2.5Y5/1)	破片		89
39	溝 9	1区	Na 8 溝	須恵器	甕		(11.5)		灰(N6/)	破片		104
40	溝 9	1区	Na 8 溝 掘下	土師器	蓋	20.4	2.4	12.4	橙(5YR6/6)	1/4		92
41	溝 9	1区	Na 8 溝 掘下	土師器	皿	14.7	(2.4)		橙(5YR6/6)	口縁部1/3		111
42	溝 9	1区	Na 8 溝 掘下	土師器	杯	10.8	3.3	7.7	明赤褐(5YR5/6)	杯部1/4		90
43	溝 9	1区	Na 8 溝 掘下	土師器	椀		(4.3)	9.7	明赤褐(2.5YR5/8)	底部~杯部1/4		91
44	溝 9	2N区	Na17溝	土師器	椀		(2.2)		にぶい黄橙(10YR7/2)	底部1/1		159

土器観察表

掲載 番号	出土 遺構名	地区名	旧遺構・層位名	種別	器種	計測値(cm)			色調(外面)	残存状況	備考	実測 番号
						口径	器高	底径				
45	溝9	2N区	Na17溝	土師器	椀		(2.2)		にぶい黄橙(10YR7/2)	底部1/4		142
46	溝9	2N区	Na17溝	土師器	鉢?		(3.1)		橙(5YR6/6)	脚部のみ	三脚?	143
47	溝9	1区	Na8溝 掘下	土師器	壺	14.8	(11.7)		橙(5YR6/6)	11縁部~胴部1/6		95
48	溝9	1区	Na8溝 掘下	土師器	壺	16.1	(13.2)		にぶい橙(7.5YR5/4)	口縁部~胴部1/1		108
49	溝9	2N区	Na17溝	緑釉陶器	椀	15.0	(2.0)		釉:灰(10Y4/1) 露胎:灰(10Y5/1)	口縁部1/12	京都、篠塚、10C前半 須恵質	199
50	溝9	2N区	Na17溝	緑釉陶器	皿		(1.2)		釉:灰白(5Y7/2) 露胎:灰白(5Y8/1)	底部1/5	京都、洛北宮、9C前半 須恵質	192
51	溝9	2N区	Na17溝	黒色土器	椀		(2.3)		灰褐(7.5YR5/2)	底部1/1	内黒	158
52	溝9	1区	Na8溝 掘下		平瓦				灰白(10YR7/1)			79
53	溝9	2N区	Na17溝		平瓦				灰(N4/)			156
54	溝10	2S区	Na13溝	須恵器	長頸瓶		(10.9)	11.5	褐灰(10YR6/1)	胴部~底部2/3		113
55	溝10	1区	Na7溝 清掃土手	須恵器	杯	10.6	3.4	7.0	灰(N5/0)	1/2		65
56	溝10	2S区	Na13溝	須恵器	高杯		(5.7)		灰白(N7/)	脚柱部1/2		124
57	溝10	1区	Na7溝 掘下	須恵器	壺	(38.0)	(4.5)		灰(N6/)	11縁部1/12		93
58	溝10	2N区	Na13溝 掘下	須恵器	壺	(43.8)	(8.8)		灰白(N7/)	口頸部1/9		138
59	溝10	1区	Na7溝 西端	土師器	椀		(3.0)		にぶい橙(7.5YR7/3)	底部1/1,脚端欠		80
60	溝10	2S区	Na13溝	土師器	椀		(2.4)	7.5	にぶい黄橙(10YR7/1)	底部~杯部1/5		123
61	溝10	2N区	Na13溝 掘下	土師器	椀		(1.8)	6.2	灰白(10YR8/2)	底部1/1		134
62	溝10	1区	Na7溝	土師器	椀		(1.8)	7.0	褐灰(5YR4/1)	底部1/1		81
63	溝10	2S区	Na13溝	土師器	椀		(3.5)	6.2	にぶい橙(7.5YR7/4)	底部~杯部1/4		132
64	溝10	2N区	Na13溝 底面	土師器	椀		(1.0)		橙(5YR6/8)	底部3/1		157
65	溝10	1区	Na7溝	土師器	椀		(1.7)	7.4	灰白(10YR8/2)	底部1/2		82
66	溝10	1区	Na7溝 掘下	黒色土器	椀	10.8	3.3	6.0	にぶい黄橙(10YR7/3)	1/3残	内黒	103
67	溝10	1区	Na7溝 掘下	黒色土器	椀		(2.0)	6.2	灰白(10YR8/2)	底部3/4	内黒	102
68	溝10	1区	Na8溝 中央東西手巾層	土師器	かまど				橙(5YR6/6)	胴部分		115
69	溝10	2S区	Na13溝 トレンチ内		丸瓦				褐灰(7.5YR4/1)			155
70	溝10	2N区	Na13溝		平瓦				にぶい橙(7.5YR7/3)			154
71	溝10	2N区	Na13溝 掘下		平瓦				橙(2.5YR6/6)			153
72	包含層	1区	古代包含層 灰褐色土	須恵器	杯蓋	12.6	3.7	5.6	灰白(N7/0)	1/3		64
73	包含層	1区	古代包含層 灰褐色土	須恵器	高杯		(6.5)	10.1	灰(N6/)	杯部~脚部1/2		88
74	包含層	1区	古代包含層 灰褐色土	須恵器	高杯		(6.3)	10.9	灰(N6/)	脚部2/3		60
75	包含層	1区東~中央	古代包含層 灰褐色土	須恵器	高杯		(4.6)		灰(N4/)	杯部~脚柱部1/1		61
76	包含層	1区南	古代包含層 灰褐色土	須恵器	高杯	8.3	8.2	7.8	灰(N5/)	2/3		59
77	包含層	1区	古代包含層 灰褐色土	須恵器	把手付鉢	11.8	(7.9)		灰(N5/)	口縁部~杯部1/5	把手部分	74
78	包含層	1区南	古代包含層 灰褐色土	須恵器	蓋		(1.3)		灰(N5/)	つまみと天井部のみ		75
79	包含層	1区北東~北西	古代包含層 灰褐色土	須恵器	蓋		(2.4)		灰(N5/)	大井部1/4とつまみ		83
80	包含層	2N区	Na14溝	須恵器	杯	12.1	3.9	5.0	黄灰(2.5Y6/1)	1/3		135
81	包含層	1区	古代包含層 灰褐色土	須恵器	杯	17.7	5.5	11.5	灰(N6/0)	底部3/4		106
82	包含層	1区北	古代包含層 灰褐色土	須恵器	杯	9.7	4.6	6.6	灰(N6/0)	底部1/2,底体部1/4		62
83	包含層	1区西	古代包含層 灰褐色土	須恵器	杯		2.7	9.6	灰(N6/0)	底部1/4		71
84	包含層	2N区	Na14溝	須恵器	壺	(28.0)	(4.2)		灰(5Y5/1)	口縁部1/14		133
85	包含層	1区北	古代包含層 灰褐色土	須恵器	椀		(1.8)	6.0	灰白(N7/0)	底部1/4		63
86	包含層	1区北~北西	古代包含層 灰褐色土	土師器	蓋		(1.8)		橙(5YR6/6)	つまみ部分のみ		69
87	包含層	1区東~中央	古代包含層 灰褐色土	土師器	壺		(10.9)		にぶい赤褐(5YR5/4)	把手部分のみ	把手付き	70
88	包含層	1区	古代包含層 灰褐色土	土師器	杯	11.7	3.0	8.2	にぶい橙(7.5YR7/4)	1/2		58
89	包含層	1区	古代包含層 灰褐色土	土師器	杯	12.0	3.1	8.5	にぶい黄橙(10YR7/4)	11縁部1/5,底部4/5		2
90	包含層	1区北東	古代包含層 灰褐色土	土師器	杯	11.7	3.0	6.1	浅黄橙(10YR8/1)	ほぼ完形		9
91	包含層	1区北東~北西	古代包含層 灰褐色土	土師器	杯	13.1	3.1	9.7	浅黄橙(7.5YR8/3)	ほぼ完形		8
92	包含層	1区南	古代包含層 灰褐色土	土師器	椀	11.0	4.1	5.8	橙(7.5YR7/6)	1/5		72
93	包含層	1区北西	古代包含層 灰褐色土	緑釉陶器	椀	(10.0)	(2.4)		釉:明丹+灰(2.5GY7/1) 露胎:灰白(N7/)	口縁部~杯部1/9	須恵質	224
94	包含層	1区南	古代包含層 灰褐色土	緑釉陶器	椀		(2.1)	6.8	釉:明丹+灰(5GY7/1) 露胎:灰白(N7/0)	底部1/3	京都、洛西か篠、 9C後半~10C前半 須恵質	191
95	包含層	1区西	古代包含層 灰褐色土	白磁	碗	12.8	(2.2)		釉:灰白(10Y8/1) 露胎:灰白(N8/0)	口縁部約1/16	11C、船載	227
96	包含層	1区	古代包含層 黒褐色土	土師器	椀	15.7	4.1	8.2	灰黄(2.5Y7/2)	1/2		50
97	包含層	1区	表土~20cm	土師器	椀	14.4	4.0	7.4	橙(5YR7/6)	1/4		36
98	包含層	1区北東	古代包含層 黒褐色土	土師器	椀	(17.0)	5.6	8.0	橙(7.5YR6/6)	底部ほぼ完、約1/6以上		13
99	包含層	1区北東	古代包含層 黒褐色土	土師器	椀	(15.5)	5.9	(8.3)	橙(7.5YR6/6)	約1/4以下		6
100	包含層	1区北東	古代包含層 黒褐色土	土師器	椀	(15.8)	4.2	6.9	にぶい橙(7.5YR6/4)	1/3		53
101	包含層	1区東	古代包含層 黒褐色土	土師器	椀	13.0	4.7	6.3	浅黄橙(10YR8/4)	11縁~胴部約1/2以上		22
102	包含層	1区	古代包含層 黒褐色土	土師器	椀	12.7	4.1	6.6	浅黄橙(7.5YR8/3)	約2/3	土器5	3
103	包含層	1区	古代包含層 黒褐色土	土師器	椀	12.5	4.0	6.2	にぶい橙(7.5YR7/4)	1/4		25
104	包含層	1区東	古代包含層 黒褐色土	土師器	椀		(2.9)	6.0	橙(5YR6/8)	底部1/1		30
105	包含層	1区東	古代包含層 黒褐色土	土師器	椀	(13.0)	4.5	5.9	浅黄橙(10YR8/4)	11縁~胴約3/8 底部全		21
106	包含層	1区北東	古代包含層 黒褐色土	土師器	椀	13.2	3.7	6.1	にぶい橙(7.5YR7/4)	1/4		26

土器観察表

掲載番号	出土遺構名	地区名	旧遺構・層位名	種別	器種	計測値(cm)			色調(外面)	残存状況	備考	実測番号	
						口径	器高	底径					
107	包含層	1区東	古代包含層	黒褐色土	土師器	椀	(14.4)	4.9	7.1	浅黄緑(7.5YR8/3)	11縁~胴1/2、底部全	20	
108	包含層	1区北東	古代包含層	黒褐色土	土師器	椀	(3.8)	7.0	明赤褐(5YR5/6)	高台1/1		54	
109	包含層	1区	中央東西中層		土師器	杯	(1.9)		橙(2.5YR6/6)	11縁部破片		101	
110	包含層	1区東	古代包含層	黒褐色土	土師器	杯	11.1	2.4	7.1	にぶい橙(7.5YR7/4)	3/5		49
111	包含層	1区東	古代包含層	黒褐色土	土師器	杯	12.2	3.3	7.4	灰白(10YR8/2)	1/3		66
112	包含層	1区東	古代包含層	黒褐色土	土師器	杯	12.8	3.0	5.5	灰黄褐(10YR5/2)	1/2		67
113	包含層	1区北東	古代包含層	黒褐色土	土師器	杯	(13.0)	3.1	(9.0)	橙(5YR7/8)	約1/2以上		12
114	包含層	1区北東	古代包含層	黒褐色土	土師器	杯	12.1	2.8	8.9	橙(5YR6/8)	2/3		48
115	包含層	1区	古代包含層	黒褐色土	土師器	杯	11.3	2.5	8.1	にぶい橙(7.5YR7/4)	ほぼ完形	土器 4	5
116	包含層	1区北東	古代包含層	黒褐色土	土師器	杯	11.9	3.2	(7.7)	にぶい橙(7.5YR6/3)	約1/2以上		18
117	包含層	1区	古代包含層	黒褐色土	土師器	杯	12.7	3.0	8.0	にぶい橙(7.5YR7/4)	1/2		57
118	包含層	1区	古代包含層	黒褐色土	土師器	杯	11.3	2.9	5.2	にぶい橙(7.5YR6/4)	1/2		120
119	包含層	1区北東	古代包含層	黒褐色土	土師器	杯	11.0	3.2	6.4	にぶい黄緑(10YR7/4)	4/5		32
120	包含層	1区東	古代包含層	黒褐色土	土師器	杯	10.8	2.4	7.2	橙(7.5YR6/6)	口縁部1/1、底部4/5		31
121	包含層	1区東	古代包含層	黒褐色土	土師器	杯	10.9	2.9	7.1	橙(2.5YR6/6)	約2/3		56
122	包含層	1区	古代包含層	黒褐色土	土師器	杯	10.6	3.1	1.9	灰白(10YR8/2)	完形	土器 6	4
123	包含層	1区東	古代包含層	黒褐色土	黒色土器	椀	16.1	5.4	8.0	にぶい橙(7.5YR7/4)	1/2	内黒	51
124	包含層	1区北東	古代包含層	黒褐色土	黒色土器	椀	(4.0)	7.0	7.0	にぶい橙(7.5YR7/3)	杯部~底部1/3	内黒	78
125	包含層	1区東	古代包含層	黒褐色土	黒色土器	椀	(2.1)	7.8	7.8	明赤褐(2.5YR5/8)	底部1/2	内黒	79
126	包含層	1区北東	古代包含層	黒褐色土	黒色土器	台付皿	12.8	2.7	7.5	橙(5YR7/6)	1/1	内黒	28
127	包含層	1区東	古代包含層	黒褐色土	土師器	鉢?	24.8	(7.5)		暗赤褐(5YR5/6)	11縁部~杯部1/5		68
128	包含層	1区	東側溝掘下		土師器	鉢?	(32.8)	(9.0)		赤褐(5YR4/6)	口縁部~杯部1/10		105
129	包含層	2N区	古代包含層	黒褐色土	土師器	鉢?							162
130	包含層	1区東	古代包含層	黒褐色土	土師器	甕	26.0	(16.0)		橙(7.5YR1/3)	口縁部~胴部1/5		55
131	包含層	1区東	古代包含層	黒褐色土	土師器	かまど				にぶい橙(7.5YR5/3)	焚き11の破片		40
132	包含層	1区北東	古代包含層	黒褐色土	須恵器	杯身	8.1	3.6		灰白(N7/)	1/5		77
133	包含層	1区北東	古代包含層	黒褐色土	須恵器	杯身	8.2	(1.5)		灰(5Y6/1)	11縁部1/9		44
134	包含層	1区東	古代包含層	黒褐色土	須恵器	杯蓋	11.8	(2.2)		灰白(10YR8/1)	口縁部1/8		38
135	包含層	1区東	古代包含層	黒褐色土	須恵器	杯蓋	9.3	(1.9)		灰白(2.5Y7/1)	1/5		24
136	包含層	1区南東	古代包含層	黒褐色土	須恵器	蓋		(2.3)		灰白(N7/)	天井部1/1		23
137	包含層	1区	古代包含層	黒褐色土	須恵器	杯		(2.2)	12.6	灰(N5/)	底部1/4		114
138	包含層	1区南東	古代包含層	黒褐色土	須恵器	杯	13.9	3.7	10.8	灰(N6/)	1/1		37
139	包含層	1区北東	古代包含層	黒褐色土	須恵器	壺?		(1.8)	13.0	灰(N6/)	底部1/9		41
140	包含層	2N区	中世包含層	灰黄褐色土	須恵器	甌	9.0	(1.9)		灰(N5/)	口縁部1/6		147
141	包含層	1区北東	古代包含層	黒褐色土	須恵器	高杯		(4.5)	7.1	灰(N6/)	脚部部1/2		35
142	包含層	1区北東	古代包含層	黒褐色土	須恵器	平瓶	7.9	(6.4)		灰白(N7/)	口頸部1/3		34
143	包含層	1区東	古代包含層	黒褐色土	須恵器	長頸瓶		(2.7)		灰(N5/)	破片		86
144	包含層	1区南東	古代包含層	黒褐色土	須恵器	脚付壺		(1.8)		灰(N6/)	底部1/1		39
145	包含層	1区東	古代包含層	黒褐色土	須恵器	皿		(3.0)		灰白(N81)	11縁~杯部破片		42
146	包含層	1区南東	古代包含層	黒褐色土	須恵器	盤?		(1.3)	19.8	灰(N6/)	底部1/9		47
147	包含層	2N区	中世包含層	灰黄褐色土	須恵器	壺?		(3.9)		赤灰(2.5YR5/1)	11縁部破片		140
148	包含層	1区東	古代包含層	黒褐色土	須恵器	壺?		(2.8)		橙灰(5YR4/1)	口縁部破片		85
149	包含層	1区北東	古代包含層	黒褐色土	須恵器	壺		(4.8)		灰(N5/)	11縁部破片		33
150	包含層	1区東	古代包含層	黒褐色土	須恵器	甕	15.8	(2.4)		灰(N6/)	口縁部1/10		43
151	包含層	1区北東	古代包含層	黒褐色土	須恵器	風字硯				灰(N5/)	破片		87
152	包含層	1区北東	古代包含層	黒褐色土	須恵器	鉢	20.0	(3.6)		灰(N6/)	口縁部1/8	京都、篠窯	76
153	包含層	1区東	古代包含層	黒褐色土	須恵器	鉢		(2.0)		灰(N6/)	11縁部破片	京都、篠窯	45
154	包含層	1区	古代包含層	黒褐色土	須恵器	鉢		(1.4)	7.1	灰(5Y6/1)	底部1/5	京都、篠窯	46
155	包含層	1区東	古代包含層	黒褐色土	須恵器	椀		(2.7)	5.5	灰白(N7/)	底部1/1		27
156	包含層	1区	古代包含層	黒褐色土	緑釉陶器	稜椀	13.4	5.1	6.0	釉:ピスタチオグリーン(8.5GY7.5/3.5)	底部4/5	京都、9C末~10C初 須恵質露胎:(2.5Y8/2)	186
157	包含層	1区東	古代包含層	黒褐色土	緑釉陶器	椀	(13.8)	(2.8)		釉:灰オリブ(5Y5/2)露胎:灰(N6/)	口縁部~杯部1/14	須恵質	226
158	包含層	1区	古代包含層	黒褐色土	緑釉陶器	椀	14.9	(2.6)		釉:オリブ灰(10Y4/2)露胎:灰(N6/0)	口縁部1/12	須恵質	228
159	包含層	1区東	古代包含層	黒褐色土	緑釉陶器	椀	(15.9)	(4.0)		釉:オリブ灰(10Y5/2)露胎:灰(N5/)	口縁部~杯部1/8	京都、篠窯、10C前半 須恵質	197
160	包含層	1区北東	古代包含層	黒褐色土	緑釉陶器	稜椀	14.2	(4.4)		釉:オリブ灰(10Y6/2)露胎:灰(N7/0)	口縁部~杯部1/7	京都、篠窯(前山2・3号窯)、10C前半 須恵質	190
161	包含層	1区	古代包含層	黒褐色土	緑釉陶器	稜椀	16.0	(4.1)		釉:オリブ灰(10Y4/2)露胎:灰(N6/0)	口縁部1/14	京都、篠窯、10C前半	189
162	包含層	1区北東	古代包含層	黒褐色土	緑釉陶器	稜椀		(4.5)		釉:オリブ灰(10Y5/2)露胎:灰(10Y5/1)	口縁部~杯部	京都、篠窯(可能性大)、11C前半(9C?) 須恵質	195
163	包含層	1区東	古代包含層	黒褐色土	緑釉陶器	椀?	(11.8)	(1.8)		釉:オリブ灰(10Y6/2)	口縁部1/10	須恵質 露胎:灰(N6/)	225
164	包含層	1区北東	古代包含層	黒褐色土	緑釉陶器	皿	(14.0)	(2.0)		釉:オリブ灰(10Y5/2)露胎:灰(N5/)	口縁部1/14	京都、篠窯(前山2・3号窯)、10C前半 須恵質	196
165	包含層	1区	古代包含層	黒褐色土	緑釉陶器	稜椀		(2.1)	5.8	釉:赤色(5Y6/4)露胎:明黄褐(10YR7/6)	底部1/2	10C前半	187
166	包含層	1区	古代包含層	黒褐色土	緑釉陶器	椀		(1.3)	6.0	釉:灰オリブ(7.5Y5/3)露胎:灰(10Y6/1)	底部4/5	京都立、篠窯の可能性大、10C前半	188

土器観察表

掲載 番号	出土 遺構	地区名	旧遺構・層位名	種別	器種	計測値(cm)			色調(外面)	残存状況	備考	実測 番号
						口径	器高	底径				
167	包含層	1区	古代包含層 黒褐色土	青磁	碗	15.0	4.9	5.3	釉：灰オリーブ(7.5Y6/2) 露胎：灰褐(7.5YR6/2)	約2/3以上	越州窯系 土器 7	1
168	包含層	2S区	中世包含層 灰黄褐色粘質土	青磁	碗		(1.7)	7.2	釉：オリーブ黄(5Y6/3) 露胎：浅黄橙(5Y8/3)	底部2/3	9C後半～10C、高級では なく中程度 越州窯系	223
169	包含層	5区	中世包含層 灰褐色粘質土	土師器	椀		(2.1)	6.6	にぶい黄橙(10YR7/4)	底部1/1		201
170	包含層	3区	中世包含層 黄褐色土	須恵器	杯		(1.5)	8.8	灰白(N8/0)	底部1/3		167
171	包含層	3区	中世包含層 灰黄褐色土	緑釉陶器	椀		(4.0)	6.4	釉：灰白(5Y7/2) 露胎：灰白(5Y7/1)	底部1/1～杯部1/4	京都産、洛北窯 (可能性大)or洛内窯、 9C中頃 須恵質	193
172	溝11	5区	Na 8 溝	土師器	椀	11.6	3.9	4.8	灰白(2.5Y8/1)	底部1/1		203
173	溝11	5区	Na 8 溝	土師器	椀		(2.0)	3.7	浅黄橙(10YR8/3)	底部1/3		210
174	溝11	5区	Na10溝 Na 5・8 溝下層	土師器	椀	(10.8)	3.2	3.9	灰白(2.5Y8/1)	底部完、口縁～胴約1/2		15
175	溝11	5区	Na10溝 東側	土師器	椀	10.7	3.5	4.0	灰白(5Y8/1)	ほぼ完形		11
176	溝11	5区	Na10溝 Na 5・8 溝合流地点	土師器	椀	(11.0)	(3.1)	4.5	灰白(10YR8/2)	底部全、口縁～胴約1/1		16
177	溝11	5区	Na10溝 Na 5・8 溝合流地点	土師器	椀	(11.0)	3.4	4.1	灰黄(2.5Y7/2)	底部全、口縁～胴約1/2		14
178	溝11	5区	Na10溝 Na 5・8 溝合流地点	土師器	椀	(12.0)	3.9	4.0	暗灰(3/)	底部全、口縁～胴1/12		17
179	溝11	5区	Na10溝 Na 5・8 溝下層	土師器	杯	12.4	2.4	8.4	にぶい橙(7.5YR7/4)	底部3/4		211
180	溝11	5区	Na10溝 Na 5・8 溝下層	備前焼	すり鉢		(3.8)		黄灰(2.5Y6/1)	口縁部破片	須恵質	217
181	溝11	5区	Na10溝 Na 5・8 溝下層	須恵質	丸瓦				灰(N5/)	破片		213
182	溝12	5区	Na11溝	土師器	椀		(1.4)	5.8	灰(5Y6/1)	底部1/1		219
183	溝13	5区	Na 3 溝 下層	土師器	椀		(2.7)	(6.0)	灰白(10YR8/2)	底部1/5		208
184	溝13	4W区	Na 3 溝 最下層	土師器	椀		(1.1)		灰白(7.5Y8/1)	底部1/1		173
185	溝13	5区	Na 3 溝 下層	土師器	皿	6.5	1.2	4.3	にぶい橙(2.5YR6/4)	完形		10
186	溝13	5区	Na 3 溝	瓦質土器	不明				黄灰(2.5Y4/1)	焼き口の部		203
187	溝13	5区	Na 3 溝	土師器?	すり鉢		(2.2)	14.8	灰白(10YR8/2)	底部1/6	須恵器生焼け?	202
188	溝13	4区	Na 3 溝 上層	白磁	碗		(1.7)		釉：灰白(7.5Y7/)	口縁部破片	露胎：灰白(Y8/) 舶載	163
189	溝13	5区	Na 3 溝 下層	白磁	碗		(2.0)	5.2	釉：灰白(5Y7/2) 露胎：灰白(5Y7/1)	底部1/3	舶載	207
190	溝13	5区	Na 3 溝 下層	白磁	碗		(2.2)	7.0	釉：灰白(N8/) 露胎：灰白(N8/)	底部1/5	舶載	206
191	溝13	5区	Na 3 溝 下層	備前焼	壺	8.0	(4.2)		灰赤(2.5YR4/2)	口縁部～肩部1/8		214
192	溝13	5区	Na 3 溝 下層	備前焼	すり鉢		(3.7)		にぶい橙(2.5YR6/4)	口縁部破片		222
193	溝13	4W区	Na 3 溝 下層	備前焼	すり鉢		(3.7)		赤灰(2.5YR5/1)	口縁部破片		177
194	溝13	5区	Na 3 溝 下層	備前焼	すり鉢	(30.0)	(4.9)		赤灰(2.5YR1/1)	口縁部1/10		220
195	溝13	5区	Na 3 溝 下層	龜山焼	甕	(39.0)	(3.3)		灰(N4/)	口縁部1/18		221
196	1 塚 3	4W区	Na15集石 1 塚	瓦質土器	羽釜		(3.4)		灰(N4)	口縁部破片		175
197	1 塚 3	4W区	Na15集石 土壇	須恵器	こね鉢		(3.5)		灰白(7.5Y7/1)	底部4/5	土器 1	174
198	1 塚 3	4W区	Na15集石 1 塚	備前焼	すり鉢		(5.0)		灰(N6/)	口縁部破片	Na 2 土器	176
199	1 塚 3	4W区	Na15集石 土壇	備前焼	すり鉢		(4.0)		灰(N6/)	底部破片		179
200	包含層	2S区	中世包含層 灰褐色土	土師器	椀	11.0	3.6	(6.0)	にぶい黄橙(10YR7/3)	1/1		131
201	包含層	2S区	中世包含層 灰褐色土	須恵器	こね鉢		(4.9)		灰白(N7/)	口縁部破片		130
202	包含層	2N区	中世包含層 灰黄褐色土	瓦質土器	内耳鍋		(2.9)		暗灰(N3/)	口縁部破片		141
203	包含層	2S区	中世包含層 灰褐色土	瓦質土器	火鉢		(2.5)		灰白(5Y7/1)	口縁部破片		129
204	包含層	2S区	中世包含層 灰褐色土	瓦質土器	火鉢		(3.0)		褐灰(10YR4/1)	底部破片		122
205	包含層	2S区	中世包含層 灰褐色土	灰釉土器	皿?		(2.0)		釉：灰オリーブ(5Y6/2) 露胎：灰白(5Y7/1)	口縁部破片	国産	161
206	包含層	2N区	北側溝掘下	灰釉土器	碗		(0.9)	(5.9)	釉：オリーブ黄(7.5Y6/3) 露胎：灰白(7.5Y8/1)	底部	国産、中世?	145
207	包含層	2N区	中世耕作痕掘下	白磁	碗		(2.2)	4.2	釉：灰白(2.5GY8/1) 露胎：灰白(N8/)	底部1/1	国産、近世?	144
208	包含層	2S区	中世包含層? 灰黄褐色粘質土	白磁	碗	15.8	(4.0)		釉：灰白(5Y7/1) 露胎：(5Y8/1)	口縁部～杯部1/7	舶載	123
209	包含層	2N区	中世包含層 灰黄褐色土	青磁	碗		(1.6)		釉：オリーブ灰(5GY6/1) 露胎：灰白(N7/)	口縁部破片	舶載	146
210	包含層	2S区	中世包含層? 灰黄褐色粘質土	青白磁	合子蓋	6.2	(1.3)		釉：灰白(7.5Y7/1)	口縁部1/5	露胎：灰白(N7/) 舶載	128
211	包含層	1区	近世水田層 灰褐色土	青磁	鉢?		(2.1)	4.8	釉：オリーブ灰(10Y5/2) 露胎：(5YR7/4)	底部1/1	舶載	23
212	包含層	5区	東西トレンチ北壁断面黒褐色土	土師器	椀	(10.1)	3.5	4.6	にぶい黄橙(10YR7/2)	約1/2以下		7
213	包含層	5区	Na12Pit?	土師器	椀		(1.1)	4.8	浅黄橙(10YR8/3)	底部1/2		212
214	包含層	4E区	南トレンチ I=20cm	瓦質土器	鉢		(4.7)		灰白(5Y7/1)	口縁部破片		184
215	包含層	4W区	中世包含層 灰黄褐色土	須恵器	こね鉢		(4.8)		灰(N6/)	口縁部破片		180
216	包含層	4E区	中世包含層上層 灰褐色土	須恵器	こね鉢		(3.8)		灰(N6/)	口縁部破片		182
217	包含層	4E区	中世包含層 灰褐色土	須恵器	こね鉢		(3.3)		灰(N6/)	口縁部破片		185
218	包含層	4E区	中世包含層 灰褐色土	須恵器	こね鉢		(2.8)		灰白(N7/)	口縁部破片		183
219	包含層	5区	中世包含層	須恵器	こね鉢		(3.1)	10.2	灰(N6/0)	底部1/4	東播磨?	218
220	包含層	4E区	排土	瓦質土器	火鉢		(2.2)		灰白(2.5Y7/1)	口縁部破片		170
221	包含層	4W区	中世包含層 灰黄褐色土	灰釉土器	皿		(1.1)	4.0	釉：オリーブ黄(5Y6/3)	底部1/3	露胎：灰白(5Y7/1)	172
222	包含層	4W区	中・近世包含層 灰黄褐色土	唐津焼	皿	11.0	3.3	3.7	釉：オリーブ灰(5GY6/1)	1/3	露胎：褐(10YR6/2)	168
223	包含層	5区	最下層 床1～灰褐色粘質シルト	青磁	香炉	11.8	(2.9)		釉：干草色(10G7/2.5) 露胎：灰白(10Y8/1)	口縁部1/8	16C中頃、国産 近世磁器	204
224	包含層	3～5区	東西トレンチ中世、古代包含層	白磁	碗?	7.6	(3.6)		釉：灰白(10Y7/1) 露胎：灰白(N8/)	口縁部～杯部1/8	国産?	165
225	包含層	5区	北トレンチ表上、近世耕作上	白磁	碗	(15.8)	(3.6)		釉：灰白(7.5Y7/1) 露胎：灰白(N8/)	口縁部1/12	舶載	205
226	包含層	5区	中世包含層 灰色粘質土	白磁	碗	11.4	(3.5)		釉：明オリーブ(5GY7/1) 露胎：灰白(N8/)	口縁部～杯部1/8	舶載	200

土器観察表

掲載 番号	出土 遺構名	地区名	旧遺構・層位名	種別	器種	計測値(cm)			色調(外面)	残存状況	備考	実測 番号
						口径	器高	底径				
227	包含層	3・4区	東西トレンチ 表十掘下	青磁	碗	(1.8)			釉：灰オリーブ(7.5Y6/2) 露胎：灰白(N8/0)	口縁部破片	舶載	164
228	包含層	5区	北トレンチ 衣土、近世耕作土	青白磁	碗	(2.1) 5.4			釉：明緑灰(10GY8/1) 露胎：灰白(N8/0)	底部1/7	舶載	215
229	包含層	4W区	中世包含層 灰黄褐色土	青磁	皿	9.1	(1.2)	6.0	釉：灰オリーブ(10Y6/2) 露胎：灰白(10Y7/1)	1/7	舶載	178

金属製品観察表

掲載 番号	遺構名	地区名	旧遺構名	器種	計測値(mm)			重量 (g)	材質	残存状況	備考	実測 番号
					最大長	最大幅	最大厚					
M 1	包含層	1区北東-北西	灰褐色土	釘	41.1	5.8	7.6	4.2	鉄	ほぼ完形	古代包含層	M15
M 2	包含層	1区北東-北西	灰褐色土	釘	38.9	5.9	7.0	4.1	鉄	ほぼ完形	古代包含層	M16
M 3	包含層	1区北東-北西	灰褐色土	釘	37.9	6.5	6.5	3.1	鉄	3/4?	古代包含層	M17
M 4	包含層	1区北東側	灰褐色土	刀子?	63.2	26.0	6.6	22.7	鉄	1/3?	古代包含層	M12
M 5	包含層	1区東側	黒褐色土	鍔?	41.0	37.0	1.5	6.9	銅	口縁部小片	古代包含層	M 8
M 6	溝11	5区	No.8 1層	釘	61.6	8.2	8.0	12.1	鉄	ほぼ完形	中世	M13
M 7	包含層	4 E区	灰黄褐色土	釘	27.8	6.3	5.3	2.2	鉄	2/3?	中近世包含層	M18
M 8	包含層	4 E区	灰黄褐色土	鍔?(雁股)	32.0	24.5	9.0	11.4	鉄	2/3?	中近世包含層	M14
M 9	包含層	5区	床上~灰褐色粘質土	キセル(吸口)	37.6	10.5	1.0	4.6	銅	ほぼ完形	近世包含層	M11
M10	包含層	5区	近世下層	紡錘車?	26.0	21.2	5.0	16.8	鉛	穿孔径5mm		M 9
M11	包含層	4 E区	灰黄褐色土	紡錘車?	18.6	13.5	7.5	8.1	鉛	3/4残 穿孔径4mm		M10
M12	包含層	1区北西端	灰褐色土	銭貨	24.4	24.4	1.2	2.7	銅	完形	慶寧元寶 古代包含層	M 1
M13	包含層	4 E区	灰黄褐色土	銭貨	21.1	21.1	1.0	2.8	銅	完形	淳化元寶 中近世包含層	M 3
M14	包含層	4 E区	南トレンチ	銭貨	24.1	24.1	1.0	2.4	銅	完形	皇宋通寶	M 2
M15	包含層	5区	灰黄褐色粘質土	銭貨	24.9	24.9	1.3	2.8	銅	完形	阜宋通寶 近世包含層	M 6
M16	包含層	5区北側	灰色粘質土	銭貨	21.9	21.9	1.4	2.9	銅	完形	嘉祐元寶 中世包含層	M 5
M17	包含層	5区	排土表探	銭貨	24.4	24.4	1.3	2.2	銅	完形	元祐通寶	M 4
M18	包含層	5区	床上~灰褐色粘質土	銭貨	24.7	24.7	1.7	4.0	銅	完形	寛永通寶 近世包含層	M 7

石製品観察表

掲載 番号	遺構名	地区名	旧遺構名	器種	計測値(mm)			重量 (g)	材質	残存状況	備考	実測 番号
					最大長	最大幅	最大厚					
S 1	包含層	1区北東端	古墳包含層?	鎌	25.4	4.7	4.2	1.5	サヌカイト	完形	縄文時代?	S 6
S 2	包含層	1区	衣土~20cm	石匙	(46.5)	(31.8)	6.5	10.7	サヌカイト	2/3残?	縄文時代	S 9
S 3	包含層	3区	南側溝	石包丁	(51.0)	38.0	6.0	16.1	片岩系	1/2弱	弥生時代 磨製	S 5
S 4	包含層	5区	中世以前包含層 (黒褐色土・灰褐色土)	石包丁	(73.0)	53.5	9.0	45.5	サヌカイト	1/2強	弥生時代 打製	S 7
S 5	包含層	1区	西側溝 -60cmまで	砥石?	(60.5)	(40.0)	(29.0)	82.1	変成岩?	?	弥生時代 以前?	S 3
S 6	溝 9	2 N区	No.17	石鍋	(45.0)	(71.0)	26.0	120.7	滑石	底部小片	中世混入品	S 4
S 7	包含層	1区	灰褐色土	基石	15.0	15.0	7.0	1.5	石英	ほぼ完形	古代	S 1
S 8	溝13	5区	No.3 1層(近世水口)	石鍋	(29.0)	(48.1)	14.2	25.5	滑石	口縁部小片	中世	S 2
S 9	包含層	2 S区	灰褐色土	硯	32.0	23.0	12.0	4.8	?	剥離底部	中世 赤間石?	S 8

木製品観察表

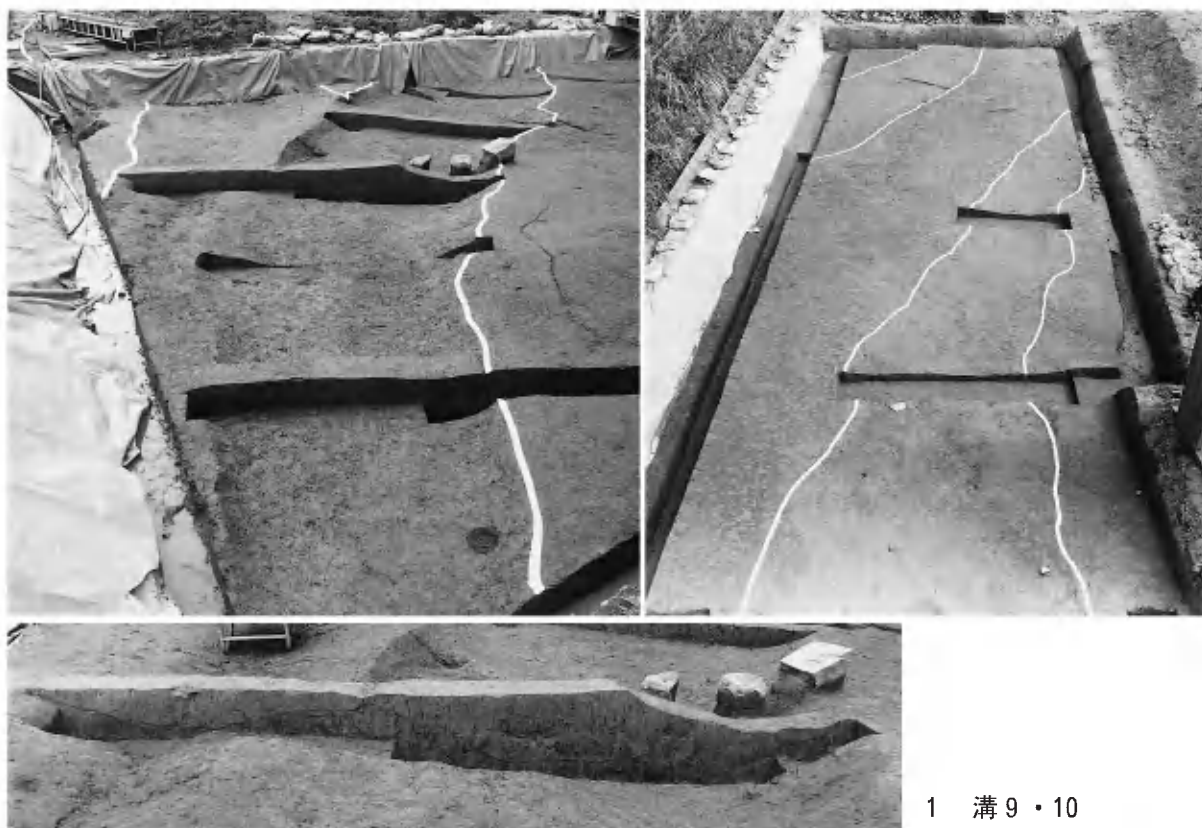
掲載 番号	遺構名	地区名	旧遺構名	器種	計測値(cm)			樹種	残存状況	備考	実測 番号
					最大長	最大幅	最大厚				
W 1	溝11上層	5区	No.8 下層	曲げ物側板	9.2	3.9	0.3	?	小片	縦・斜平切込線	W 7
W 2	溝11上層	5区	No.5	杭	23.1	4.4	3.2	?	?	摘穴 建築部材転用?	W 5
W 3	溝11下層	5区	No.10束上手	箸?	8.3	0.7	0.5	?	?	糸を巻いた痕跡?	W 3
W 4	溝11下層	5区	No.10束下	曲げ物底板	13.3	8.4	0.5	?	1/2弱		W 9
W 5	溝11下層	5区	No.10束上手	札?	14.7	2.2	0.45	?	1/2以上?		W 4
W 6	溝11下層	5区	No.10	紡錘車?	9.9	1.1	0.6	?	?	糸を巻いた圧痕	W 1
W 7	溝11杭列2	5区	No.10杭5	杭	40.3	3.7	3.3	モミ属	?	樹皮付	W13
W 8	溝11杭列3	5区	No.10杭11	杭	40.8	3.1	3.8	アカマツ	?	樹皮剥落	W12
W 9	溝11杭列2	5区	No.10杭1	杭	116.0	3.6	2.7	コナラ類	?	樹皮付	W15
W10	溝11杭列2	5区	No.10杭3	杭	110.5	3.7	3.7	クヌギ類	?	樹皮付	W14
W11	溝11杭列3	5区	No.10杭9	杭	113.5	4.0	3.8	アカマツ	?	樹皮剥落	W11
W12	溝13	5区	No.3 下層	鍔?	9.9	1.1	0.6	?	?		W 2
W13	溝13杭列1	4 W区	No.3 下層	杭	23.9	4.9	3.2	アカマツ	?	五輪卒塔婆転用	W 6
W14	溝13杭列1	4 W区	No.3 下層	杭	40.3	6.0	2.9	アカマツ	?	半割丸太加工	W 8
W15	溝13杭列1	4 W区	No.3 下層	杭	40.0	7.3	5.0	アカマツ	?	半割丸太加工	W10
W16	溝13杭列1	4 W区	No.3 下層杭1	杭	80.0	10.8	5.2	アカマツ	?	卒塔婆転用	W16
W17	溝13杭列1	4 W区	No.3 最下層杭3	杭	126.5	4.6	4.4	アカマツ	?	樹皮付	W17

土製品一覧表

No.	掲載番号	遺構名	地区名	旧遺構名	器種	計測値(mm)			孔径	重量(g)	色調	残存状況	備考	実測番号
						最大長	最大幅	最大厚						
1	C 1	包含層	1 区	表土-20cm	土鍾	56.5	23.0	23.0	8.0	33.4	灰黄褐10YR6/2	完形	円筒形	C 17
2	C 3	溝 9	1 区	No.8	土鍾	(89.0)	(41.0)	(42.0)	11.0	113.9	灰黄褐10YR5/2	1/3残	先細円筒形	C 12
3	C 4	溝 9	1 区	No.8	土鍾	81.0	38.5	34.0	15.0	108.5	橙5YR6/6	完形	先細円筒形	C 7
4	C 5	溝 9	1 区	No.8	土鍾	(34.0)	(14.0)	(12.2)	4.0	7.1	にぶい黄橙10YR6/3	1/2残	双孔丸棒形	C 5
5	C 10	溝10	1 区	No.7	土鍾	87.0	37.5	37.5	11.5	136.8	にぶい黄橙10YR6/3	完形	先細円筒形	C 6
6	C 12	古代包含層	1 区	灰褐色土	土鍾	48.0	29.2	20.0	-	25.9	にぶい褐7.5YR6/3	完形	周溝楕円盤	C 15
7	C 14	古代包含層	1 区	黒褐色土	土鍾	(45.2)	16.0	16.0	6.0	15.0	にぶい橙7.5YR6/4	1/2残	双孔丸棒形	C 16
8	C 16	溝13	5 区	No.3 下層	土鍾	(47.0)	(53.0)	(43.0)	-	88.2	にぶい橙2.5YR6/4	1/4残	周溝楕円球	C 31
9	C 17	土壇 3	4 W区	No.15	土鍾?	(26.0)	(24.0)	(11.0)	(6.0)	8.0	灰黄褐10YR5/2	1/2残	数珠玉形	C 13
10	C 18	土壇 3	4 W区	No.15	土鍾?	(24.0)	(25.0)	(10.0)	(6.5)	6.6	にぶい黄橙10YR6/4	1/2残	数珠玉形	C 14
11	C 20	包含層	1 区	西側溝	土鍾	91.0	36.5	35.5	18.5	122.6	にぶい褐7.5YR6/3	ほぼ完形	先細円筒形	C 18
12	C 21	中世包含層	2 S区	灰黄褐色土	土鍾	73.0	34.0	34.5	12.5	74.8	灰白N8/0	ほぼ完形	先細円筒形	C 21
13	C 22	中世包含層	3 区	灰黄褐色土	土鍾	(52.5)	(22.0)	(18.0)	8.5	19.3	にぶい橙7.5YR6/4	3/4残	先細円筒形	C 25
14	C 23	近世包含層	2 S区	灰黄褐色土	土鍾	(40.0)	14.0	15.0	5.0	8.8	にぶい橙7.5YR6/4	3/4残	長紡錘形	C 20
15	C 24	中世包含層	4 W区	灰黄褐色土	土鍾	44.0	10.0	11.0	4.0	5.9	にぶい橙7.5YR7/4	完形	円筒形	C 25
16	C 25	中世包含層	5 区	灰褐色土	土鍾	(47.0)	13.5	13.0	5.0	12.0	にぶい黄褐10YR5/4	3/5残	双孔丸棒形	C 30
17	C 26	中世包含層	5 区	灰褐色土	土鍾	(40.5)	13.0	11.5	4.0	8.4	にぶい黄橙10YR6/4	3/5残	双孔丸棒形	C 29
18	C 27	中世包含層	4 W区	灰黄褐色土	土鍾	(25.5)	13.0	8.5	6.5	4.0	明黄褐10YR7/6	1/3残	双孔丸棒形	C 27
19	C 28	中世包含層	4 ~ 5 区	灰褐色土	土鍾	(41.5)	10.5	10.0	4.0	7.3	明褐7.5YR5/6	3/5残	双孔丸棒形	C 28
20	C 29	近世包含層	5 区	灰褐色土	土鍾	(26.0)	13.0	11.0	4.0	4.4	にぶい褐7.5YR6/3	1/4残	双孔丸棒形	C 32
21	C 30	包含層	2 N区	西側溝	土鍾	26.0	26.5	26.5	6.5	12.7	浅黄橙10YR8/4	ほぼ完形	周溝数珠球形	C 22
22	C 31	包含層	3 区	表土・中世包	土鍾	26.0	26.0	(24.0)	5.0	10.1	灰黄褐10YR5/2	2/3残	周溝数珠球形	C 23
23	C 32	中世包含層	5 区	灰褐色土	土鍾	(23.0)	33.0	(16.0)	9.0	14.1	灰黄褐10YR6/2	1/2残	周溝数珠球形	C 33
24	C 33	中世包含層	3 区	灰黄褐色土	土鍾	19.5	19.5	(8.0)	5.0	3.9	にぶい黄橙10YR7/2	1/2残	数珠玉形	C 24
25		古代包含層	1 区	灰褐色土	土鍾	(30.4)	12.6	(11.4)	4.0	4.6	浅黄橙7.5YR8/6	1/2残	長紡錘形	
26		中世包含層	2 S区	灰褐色土	土鍾	(18.3)	9.3	9.1	4.5	1.3	橙5YR6/6	1/4残	長紡錘形	
27		包含層	2 N区	北・西側溝	土鍾	(16.1)	(21.7)	(11.9)	7.5	3.5	灰白2.5Y8/2	1/4残	周溝数珠球形	
28		包含層	2 N区	北側溝	土鍾	(42.8)	(30.6)	(18.3)	(16)	19.5	黒N2/0	1/5残	先細円筒形	
29		中世包含層	2 N区	灰黄褐色土	土鍾	(27.9)	22.1	(16.3)	7.0	5.8	橙5YR7/6	1/3残	周溝数珠球形	
30		中世包含層	4 W区	灰黄褐色土	土鍾	(18.4)	8.1	8.3	4.0	0.7	橙5YR7/6	1/5残	長紡錘形	
31	C 6	溝 9	2 N区	No.17	土製円盤	23.5	20.0	13.5	-	7.8	灰N6/0	完形	平瓦片	C 9
32	C 7	溝 9	2 N区	No.17	土製円盤	24.0	21.0	15.0	-	6.9	灰白N7/0	3/4残	須臾器片	C 10
33	C 8	溝 9	2 N区	No.17	土製円盤	25.0	17.5	15.5	-	5.3	灰白N7/0	1/3残	須臾器片	C 11
34	C 9	溝 9	2 N区	No.17	土製円盤	32.0	31.0	18.5	-	23.0	灰白N7/0	完形	平瓦片	C 8
35	C 11	溝10	1 区	No.7	土製円盤	30.5	28.5	15.0	-	13.7	灰N6/0	完形	須臾器片	C 3
36	C 15	溝13	5 区	No.3 下層	土製円盤	28.0	27.0	17.0	-	13.7	灰N6/0	完形	須臾器片	C 2
37	C 19	溝14	5 区	No.3 下層	土製円盤	56.0	48.0	15.5	-	43.5	黒N1.5/0	完形	平瓦片?	C 1
38		包含層	1 区	床土	土製円盤	26.0	23.2	8.8	-	6.3	青灰5B5/1	完形	須臾器片	
39		古代包含層	1 区	黒褐色土	土製円盤	24.2	19.9	11.2	-	7.6	灰N5/0	完形	須臾器片	
40		古代包含層	1 区	黒褐色土	土製円盤	22.2	20.0	11.0	-	6.4	灰5Y6/1	完形	須臾器片	
41		古代包含層	1 区	黒褐色土	土製円盤	20.2	19.0	10.6	-	5.5	灰N4/0	完形	須臾器片	
42		古代包含層	1 区	黒褐色土	土製円盤	22.0	19.6	13.3	-	7.0	灰N4/0	3/4残	須臾器片	
43		中世包含層	2 S区	灰褐色土	土製円盤	29.3	27.4	12.4	-	12.9	灰白N7/0	完形	須臾器片	
44		中世包含層	2 S区	灰黄褐色土	土製円盤	24.8	21.1	12.5	-	6.9	灰白N7/0	完形	須臾器片	
45		中世包含層	2 S区	灰黄褐色土	土製円盤	26.2	19.8	14.4	-	10.0	青灰5B5/1	完形	須臾器片	
46		包含層	2 N区	北側溝	土製円盤	22.8	21.6	10.8	-	6.1	灰N6/0	完形	須臾器片	
47		中世包含層	2 N区	灰黄褐色土	土製円盤	22.6	21.7	11.7	-	6.8	青灰5B6/1	完形	須臾器片	
48		古代包含層	2 N区	黒褐色土	土製円盤	23.1	17.3	13.4	-	6.9	灰白N7/0	完形	須臾器片	
49		中世包含層	3 区	灰黄褐色土	土製円盤	25.2	19.0	13.4	-	8.0	灰10Y6/1	完形	須臾器片	
50		中世包含層	3 区	灰黄褐色土	土製円盤	23.4	18.3	13.2	-	6.9	灰白7.5Y7/1	完形	須臾器片	
51		中世包含層	3 区	灰黄褐色土	土製円盤	21.3	19.6	14.2	-	6.5	灰白10Y7/1	完形	須臾器片	
52		中世包含層	4 E区	灰褐色土	土製円盤	18.5	16.4	9.4	-	3.8	灰N6/0	完形	須臾器片	
53		中世包含層	4 E区	灰褐色土	土製円盤	22.4	19.4	9.3	-	4.6	灰白N7/0	完形	須臾器片	
54		中世包含層	4 W区	灰黄褐色土	土製円盤	20.4	20.2	12.4	-	6.6	灰白N8/0	完形	平瓦片?	
55		中世包含層	4 W区	灰黄褐色土	土製円盤	25.1	24.4	8.7	-	7.0	暗青灰10BG4/1	完形	須臾器片	
56		近世包含層	5 区	表土・近世包	土製円盤	23.1	19.1	15.6	-	6.5	暗灰N3/0	完形	平瓦片	
57	C 2	溝 9	1 区	No.8	土馬脚	(97.0)	(47.5)	(33.5)	-	112.2	にぶい黄橙10YR7/3	1/3残	裸馬	C 4
58		中世包含層	2 S区	灰褐色土	土馬脚?	34.4	12.7	11.6	-	6.6	橙5YR6/6	脚2/3	丸棒状	
59	C 13	古代包含層	1 区	灰褐色土	蹄羽口	(29.0)	(38.0)	(20.0)	-	22.2	灰白2.5Y8/1	?	熱変色	C 19
60	C 34	包含層	5 区	西側溝	陶製人形	36.2	21.0	23.2	5.5	15.2	にぶい黄橙10YR7/4	完形	頭部のみ	C 34

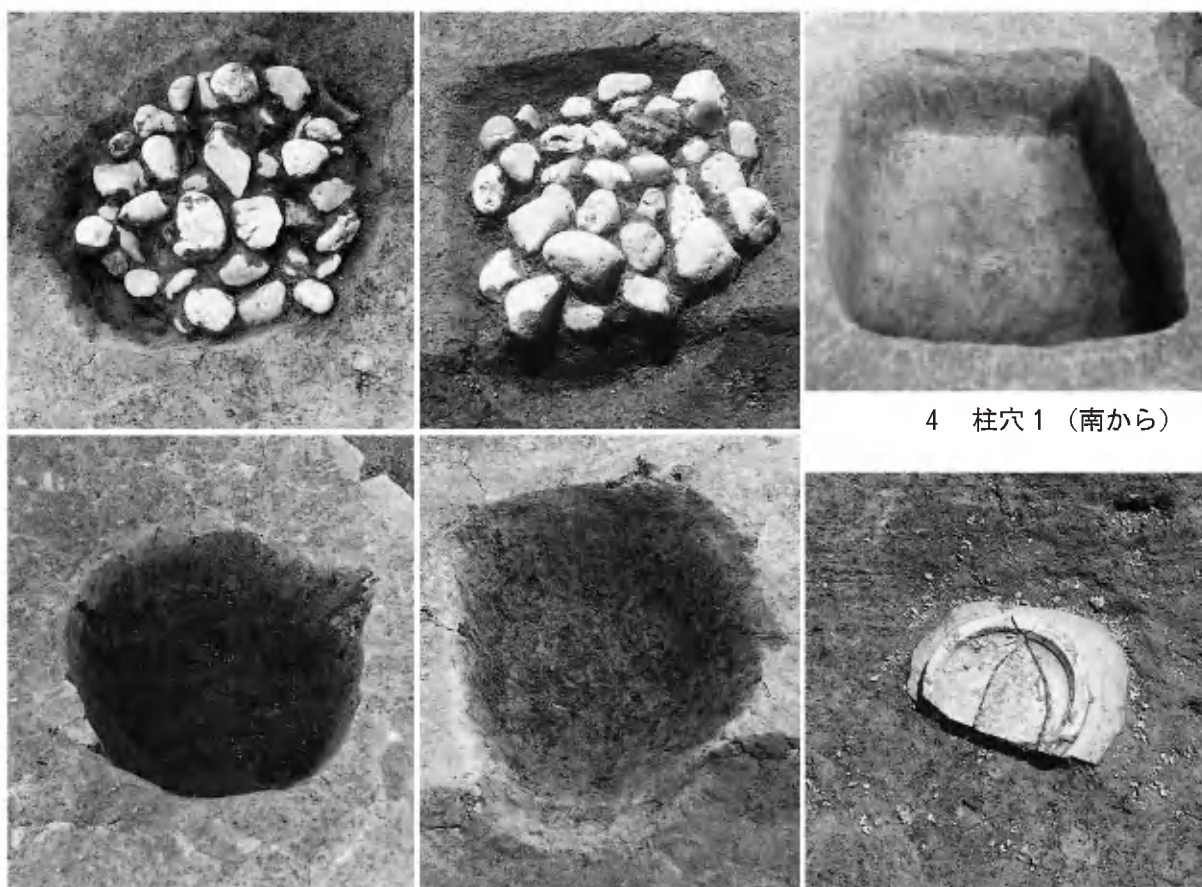
報告書抄録

ふりがな	なかなつかわいせき							
書名	中撫川遺跡3							
副書名	一般県道吉備津松島線道路改築に伴う発掘調査							
巻次	Ⅲ							
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	220							
編著者名	岡本寛久・氏平昭則							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市西花尻1325-3 http://www.pref.okayama.jp/kyouiku/kodai/kodaik.htm					TEL086-293-3211		
発行機関	岡山県教育委員会							
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市内山下2-4-6					TEL086-224-2111		
発行年月日	西暦2009年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
	岡山県	市町村	遺跡番号					
なかなつかわ 中撫川遺跡	岡山市 中撫川 439-1	201	332012159	34° 39' 00"	133° 50' 31"	2007. 4. 10 ～ 2007. 11. 28	2,543	道路 改築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
中撫川遺跡	集落	弥生・古墳 古代・中世 近世	溝・土壇・ 土器溜まり ・杭列	弥生土器・土師器・須恵器・ 緑釉陶器・瓦質土器・輸入磁 器・国産陶磁器・瓦・土馬・ 碁石・土錘・石鍋・銭貨・円 盤状土製品・石器・鉄器・銅 器・獣骨			中国製越州窯系青 磁碗・京都産緑釉 陶器出土。 護岸杭列を伴う中 世から近世の大形 水路。	
要約	<p>・1区から3区では、弥生時代から古墳時代にかけて、南北あるいは、北東から南西方向の溝が8条検出された。幅10mともっとも広い溝7は洪水砂で埋まり、底面では古墳時代前期の土器溜まりが認められた。なお、縄文時代の石器も出土している。</p> <p>・古代の遺構としては、1・2区から溝2条と集石土壇2基、方形柱穴1個が検出された。遺構の上方には古代の包含層が2層堆積していて、9世紀後半から10世紀前半の遺物がおもに出土した。遺物の中には中国製の越州窯系青磁碗の半完形品があり、京都府産の緑釉陶器碗も多く、足守川の河口近くに位置していたこの遺跡が、物流の拠点として位置していた可能性を考えさせる。また、土馬や碁・碁石など官衙的な色彩も濃い。</p> <p>・5区では13世紀後半以降と推定される大形の水路が検出され、この頃から大規模な土地開発が行われていたと考えられる。水路の屈曲部には護岸の杭列も認められた。</p>							



1 溝9・10

左上：1区全景（南東から） 右上：2N区全景（西から） 左下：土層断面（南東から）



4 柱穴1（南から）

2 土壇1 上：（東から） 下：（南から） 3 土壇2（北から） 5 緑釉陶器片出土状態（西から）

図版2



1 溝4 1区全景（西から）



2 溝7 2N区全景（西から）



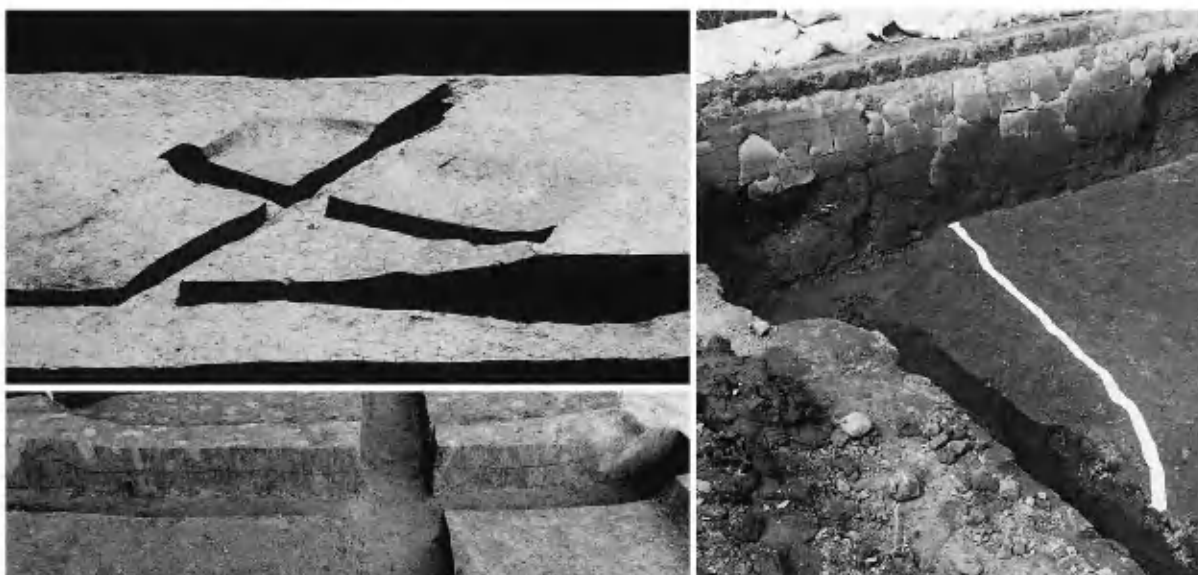
3 溝6・7 2S区全景（西から）



4 溝7土器溜まり1（東から）



5 溝7土器溜まり2（東から）



1 溝6 上：2 S区全景（北から）下：土層断面（南から） 2 溝5 1区全景（南西から）



3 溝1・2 1区全景（西から）



4 溝1 1区全景（南から）

5 2 S区北壁土層断面（南東から）

図版4



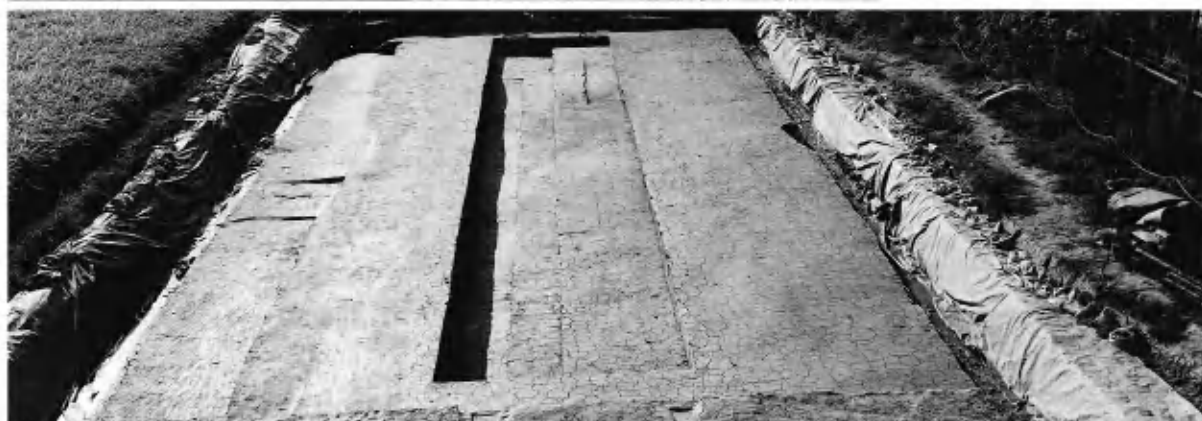
1 溝3
3区全景（東から）



2 溝3
土層断面（北東から）

3 4E区南壁
土層断面（北東から）

4 4W区調査
終了後全景（東から）





1 土壌3 検出状況（東から）



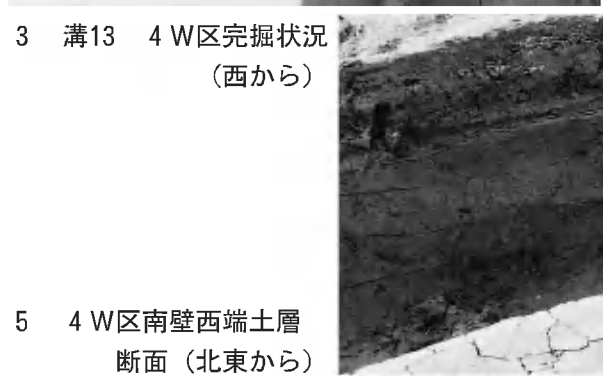
2 土壌3 完掘状況（北から）



3 溝13 4W区完掘状況
（西から）



4 溝13 4W区土層断面（東から）



5 4W区南壁西端土層
断面（北東から）



6 4W区北壁土層断面
（南東から）



図版6



1 5区近世遺構完掘後全景（西から）



2 溝14 左：上層完掘後（南から） 上：土層断面（南から）



3 5区中世遺構完掘後全景（西から）



1 溝13 全景 (東から)



2 溝11 全景 (南東から)



3 溝13 土層断面
(東から)

4 溝11 土層断面
(南東から)



5 溝11 土層断面
(溝12との接点付近)
(西から)



6 溝11 獣骨検出状況 (南から)



図版8



1 溝11
上：杭列2（南西から）
下：杭列3（東から）



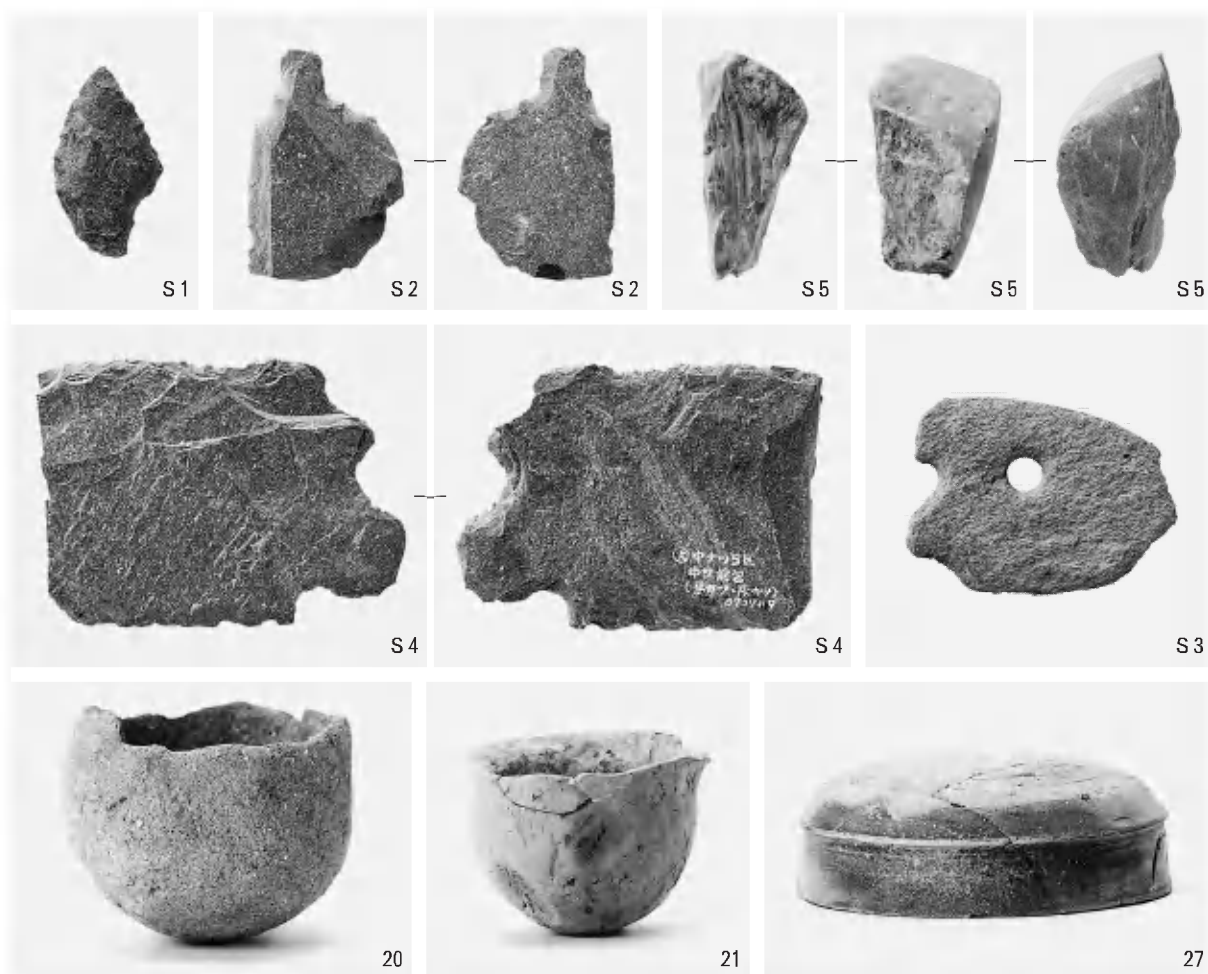
2 溝12
上：全景（南東から）
下：土層断面（北西から）



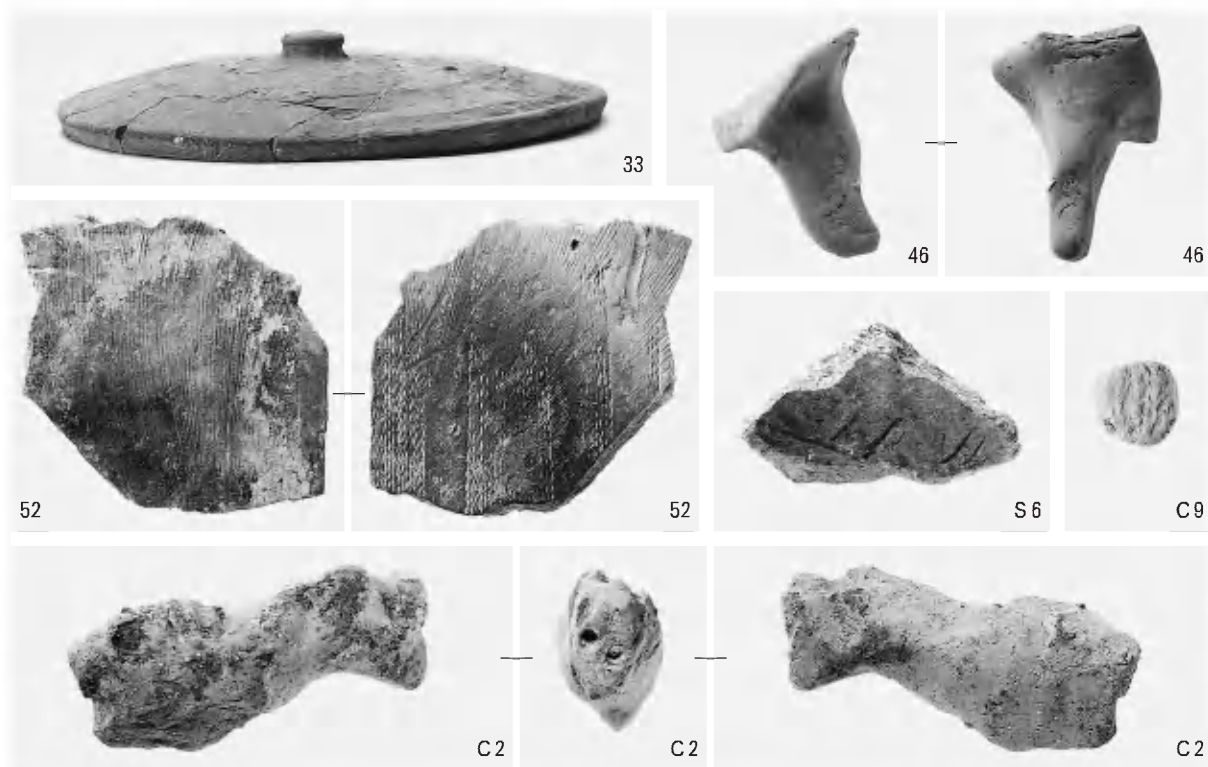
3 6区北壁土層断面
（南西から）

4 6区調査終了後全景
（東から）

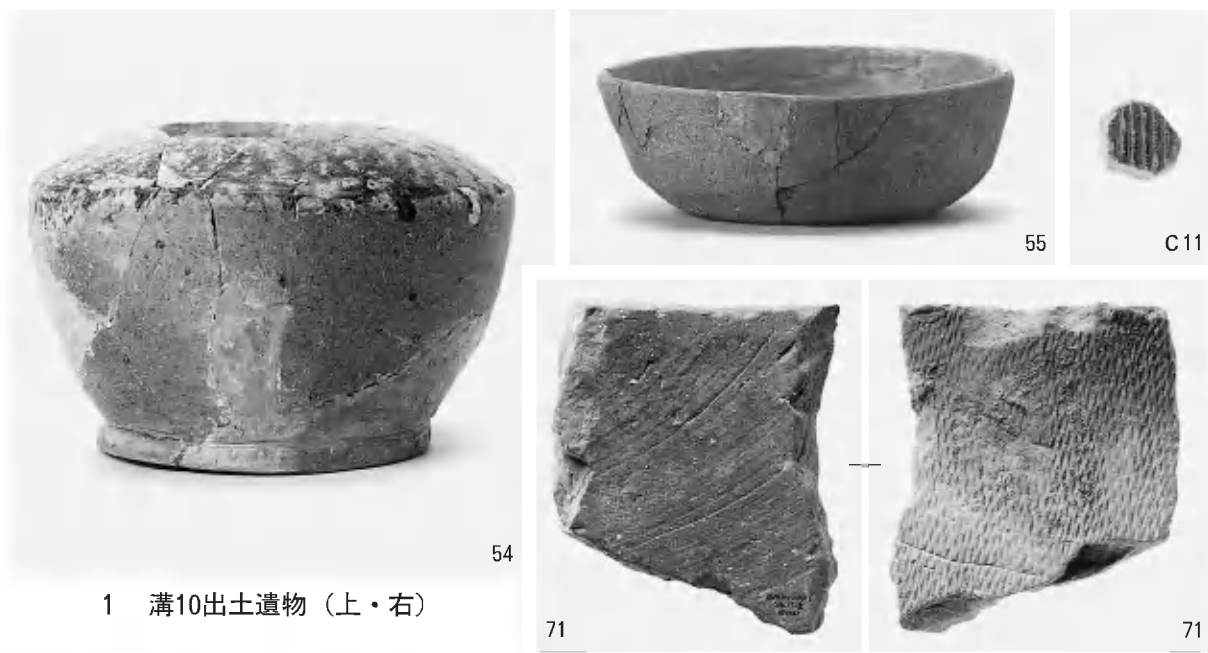




1 縄文時代～古墳時代出土遺物



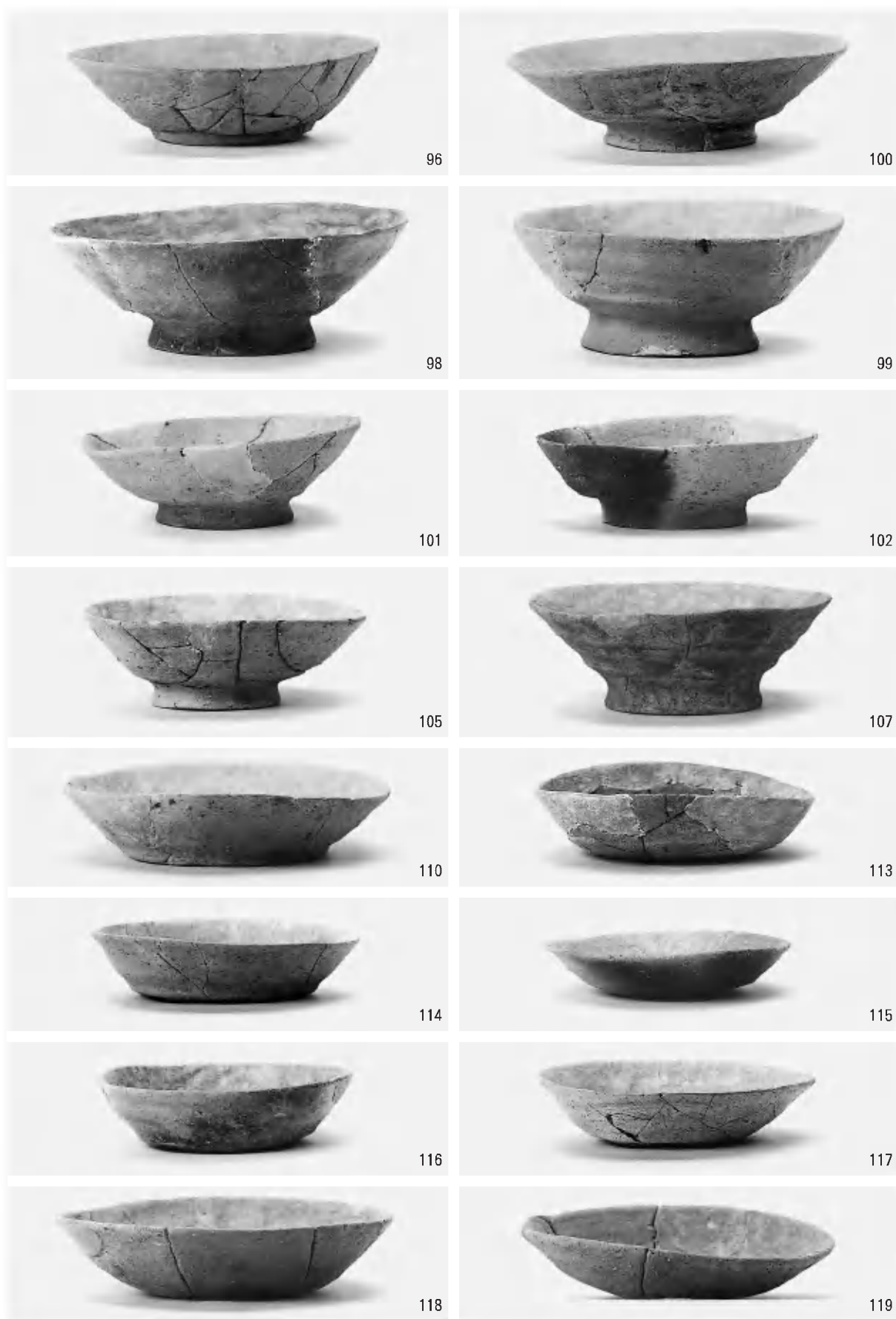
2 溝9出土遺物



1 溝10出土遺物（上・右）



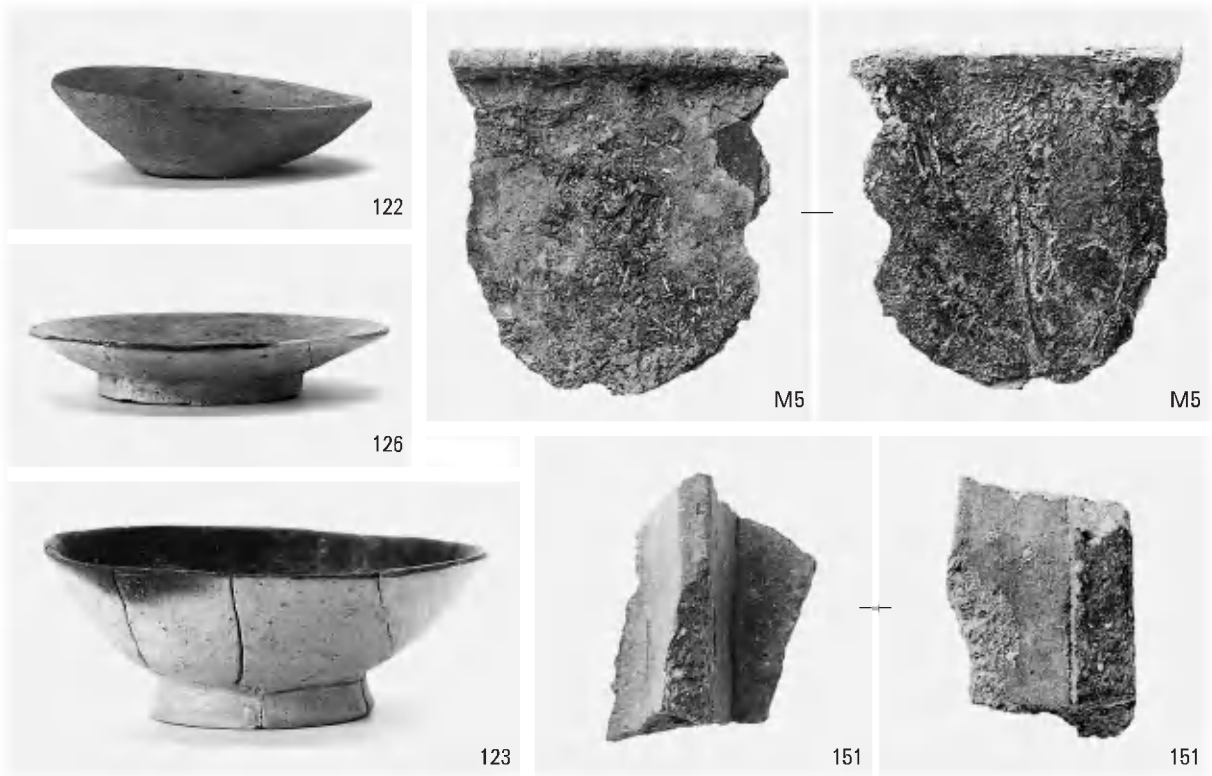
2 古代包含層下層出土遺物



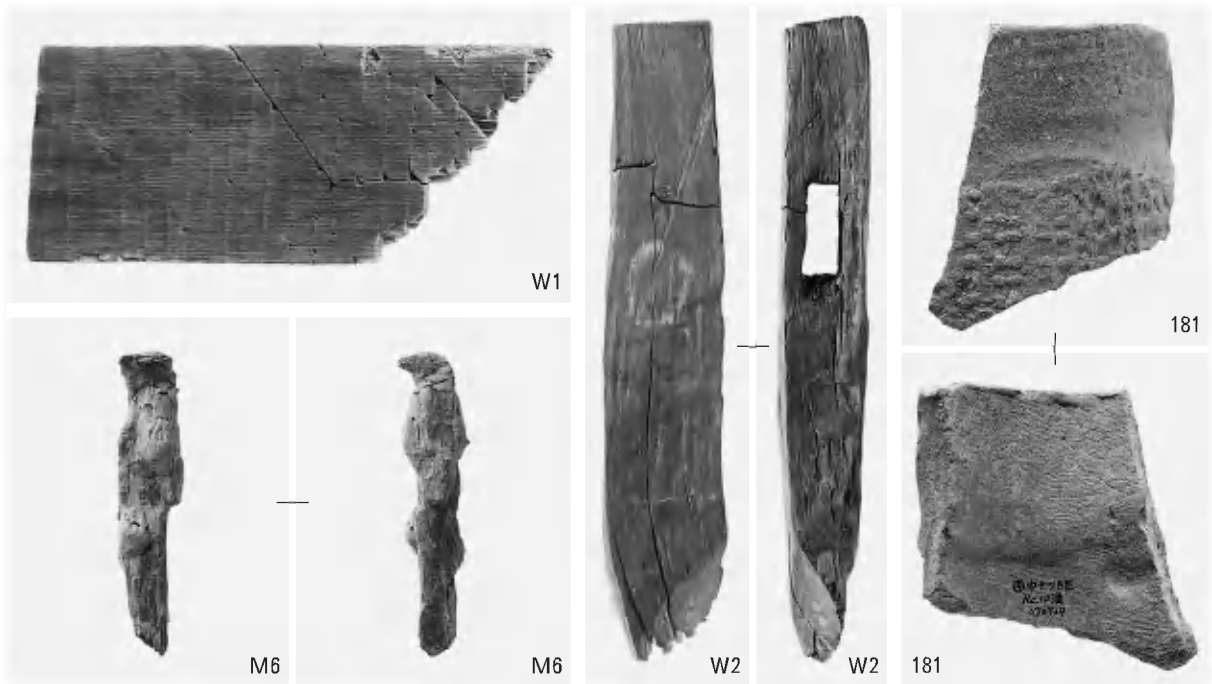
1 古代包含層上層出土遺物



1 各遺構・包含層出土土錘



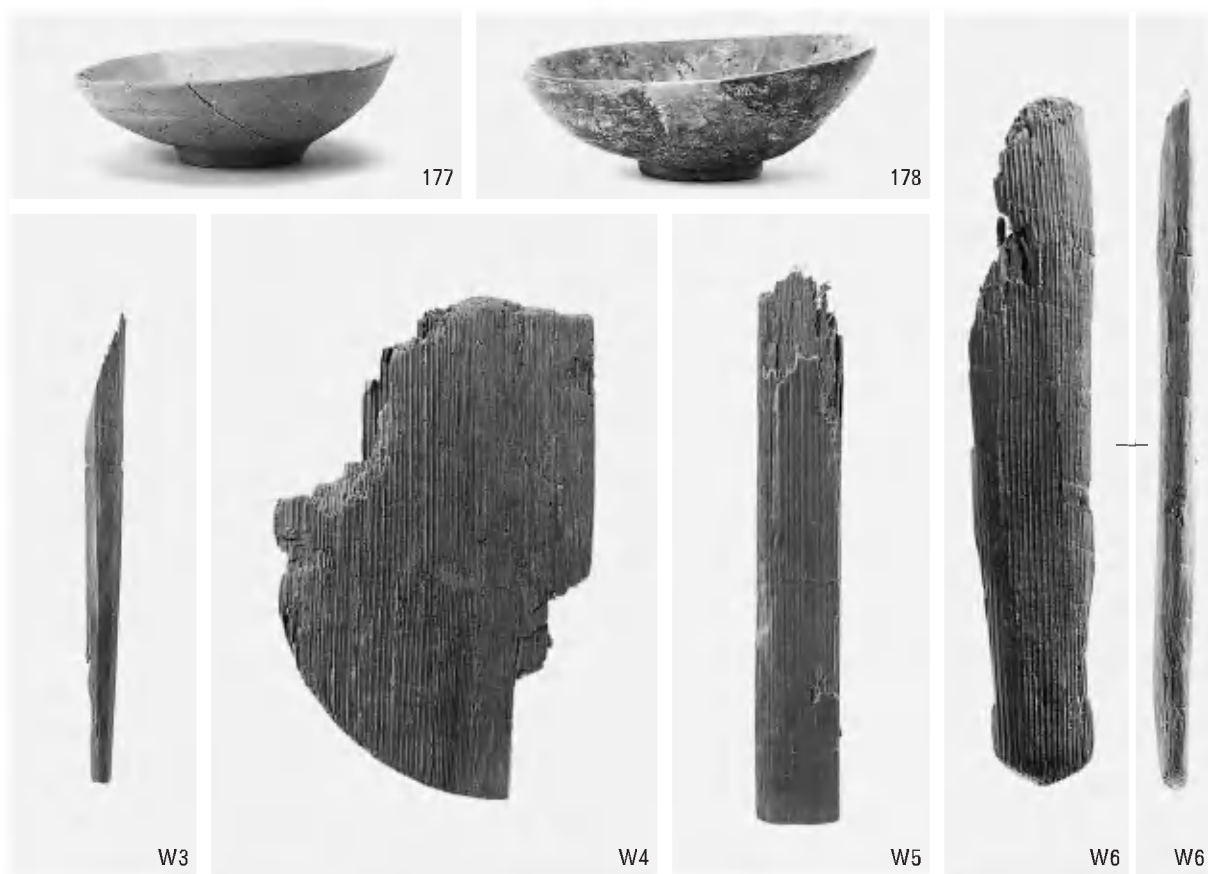
1 古代包含層上層出土遺物



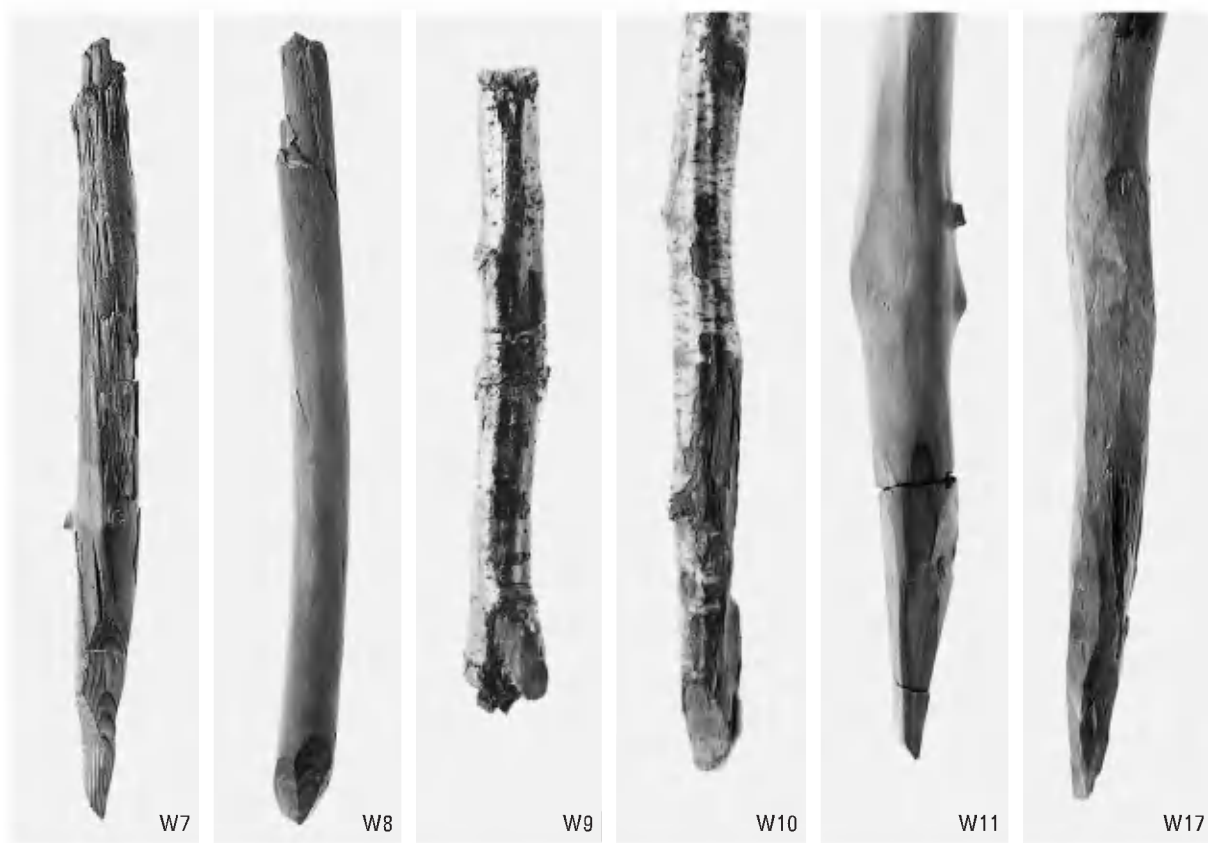
2 溝11上層出土遺物



3 溝11下層出土遺物



1 溝11下層出土遺物



2 溝11・13出土杭（杭列1～3）

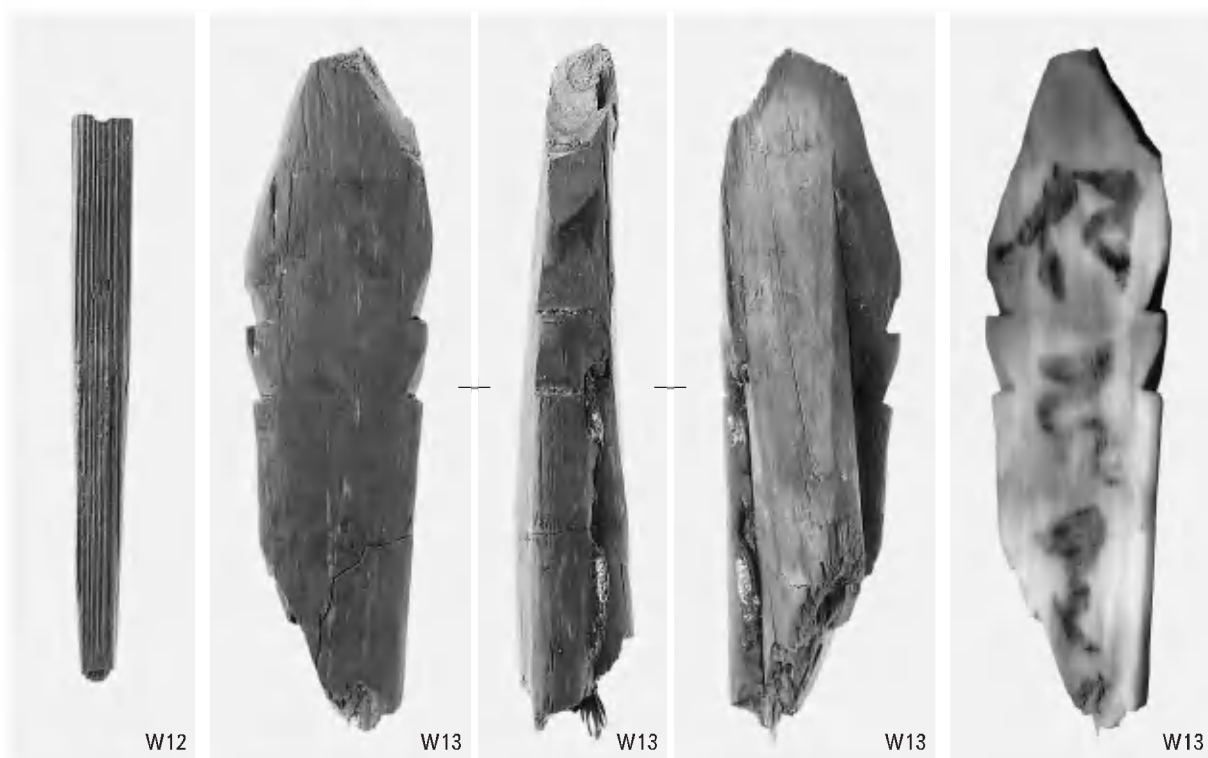


1 溝13出土卒塔婆轉用杭（右端：赤外線撮影集成写真）

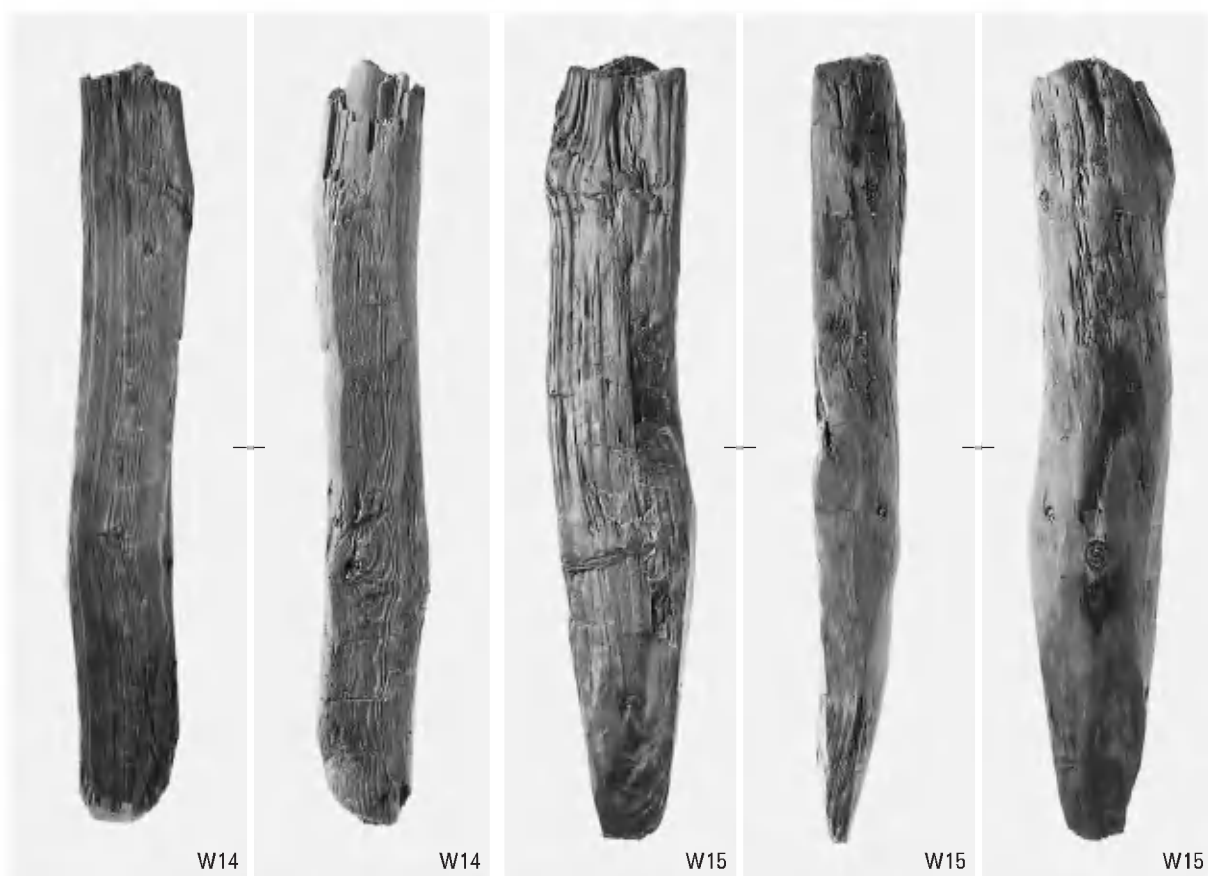


2 溝14出土遺物

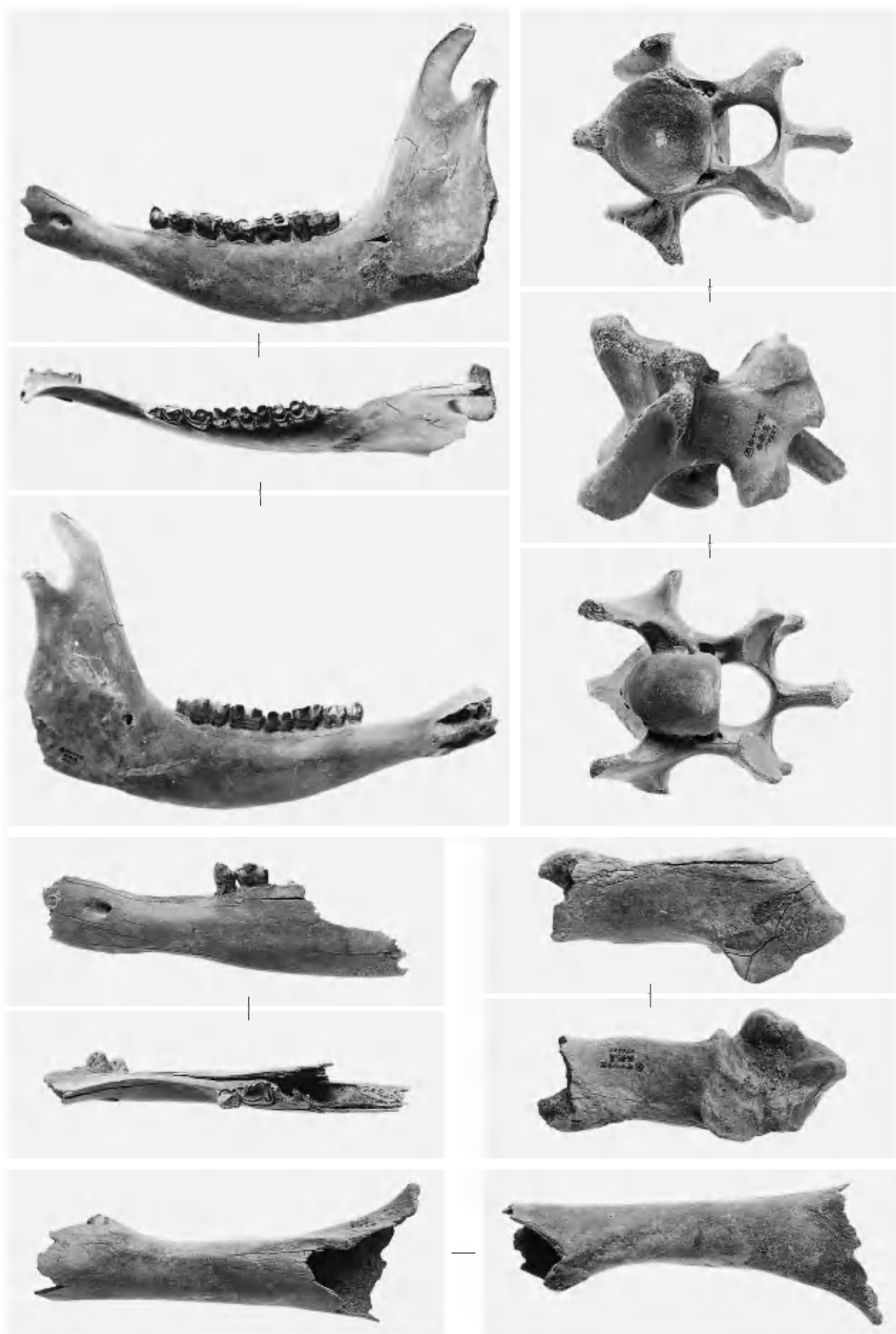
3 溝13出土遺物



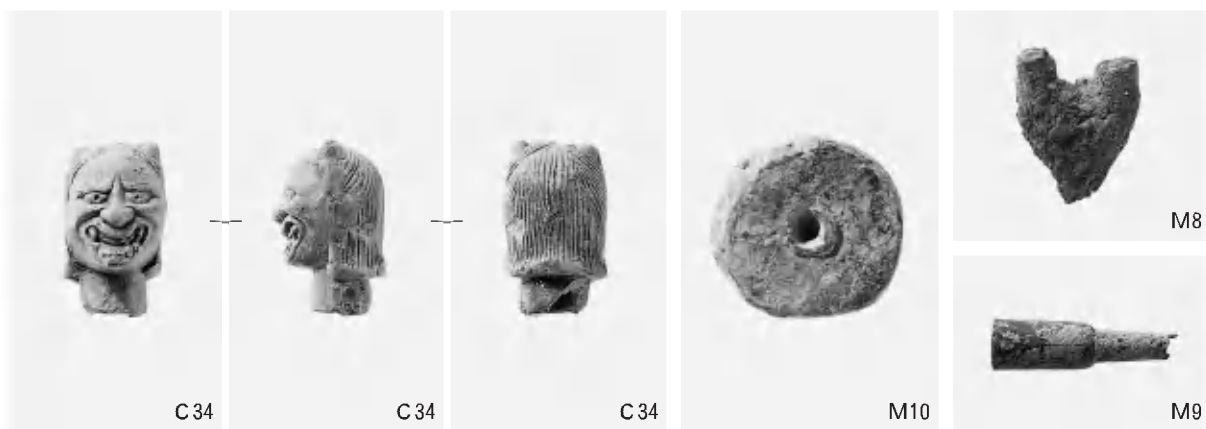
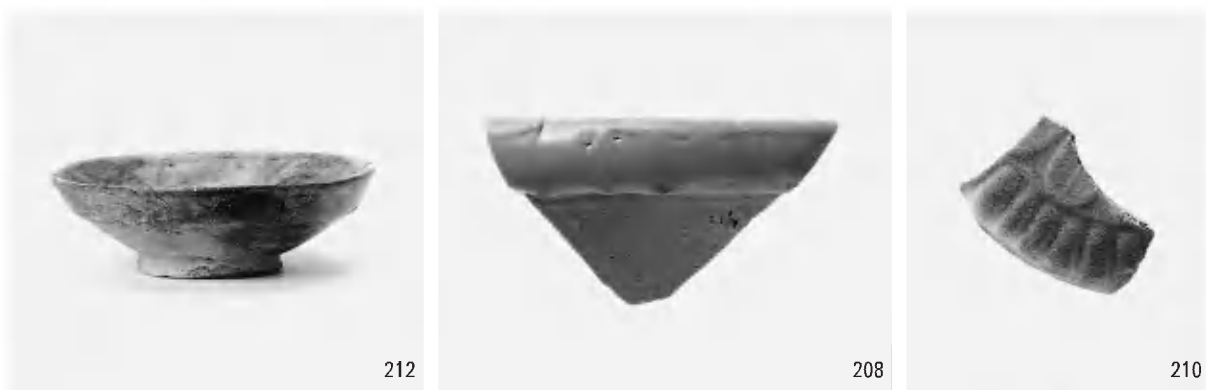
1 溝13出土遺物 (W13: 五輪塔轉用杭 右端: 赤外線撮影集成写真)



2 溝13出土杭 (杭列1)



1 溝14出土獣骨 (ウシ)



「熙寧元寶」

「淳化元寶」

「皇宋通寶」

「皇宋通寶」



「嘉祐元寶」

「元祐通寶」

「寛永通寶」

1 遺構に伴わない中世・近世遺物

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 220

中撫川遺跡 3

一般県道吉備津松島線道路改築に伴う発掘調査Ⅲ

平成21年 3 月19日 印刷

平成21年 3 月31日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3

発行 岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6

印刷 株式会社 三門印刷所
岡山市高屋116-7

